博士論文

サ系接続表現の史的展開
―“別れの挨拶語”化を事例として―

名古屋大学大学院人文学研究科

人文学専攻

川村　祐斗

2023 年 12 月

凡例

一、用例番号，表番号は各章ごとに付す。

一、注は，章ごとに番号を付し，原則として同頁下部に示す。

一、本文中で用いる研究対象の言語形式は，原則としてカタカナ表記とする。

一、用例中の表記は基本的にテキストの表記のまま引用する。ただし，引用に際して異体字・旧字体を通行字体に改めた箇所がある。また，用例文中における下線・記号等は特に断りのない限り稿者が付したものである。例：「____」（研究対象とする言語形式），「____」「〰〰」「_ _ _」（その他観察対象とする表現），「( )」（読解の便宜ため稿者が補った情報），「〔 〕」（原表記），「(略)」（使用テキスト本文省略箇所）等

一、用例の末尾には，原則として順に（地域, ）ジャンル，作品名，（巻名，歌番号, ）成立（または書写，刊行，初演，新聞等への掲載）年，調査資料における頁数（，コーパスのサンプル ID，開始位置）を示す。調査資料は「新全集」（新編日本古典文学全集），「大系」（日本古典文学大系），「国語研」（国立国語研究所），「東大国語研」（東京大学文学部国語研究室）等略称を用いる場合がある。コーパスのサンプル ID，開始位置には permalink を施す。

一、使用テキスト，検索条件等は各章末尾に示す。

一、本文中において，参考文献は著者の姓に続けて（年号）の形式で示す。ただし，括弧内に含まれる際は，年の後の括弧は省く。引用頁を示す場合は年号のあとに「:頁数」を付す。たとえば，「川村（2018:14）」であれば，当該論文・著書の p.14 から引用していることを表す。引用が複数頁に亙る場合は「川村（2018:13-14）」のように示す。執筆者が同一年度内に発表した複数の文献を参照する場合は，「川村（2018b）」のように年号のあとに小文字のローマ字を付して区別する。著書の再版以降を参照する場合は，その版の年・頁を示す。文献の題目・所収，初版の刊行年等は本研究末尾の【参考文献】欄にまとめて掲げる。

一、引用に際しては，原則として表記や記号の使い方等を原文のままとするため，以上の凡例には従わない。

（本文一頁：40 字×30 行）

目次

序章　本研究の背景・目的・方法 5
１．本研究の背景・目的 5
２．本研究の方法 6
２．１　サラバ・サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化 6
２．２　“別れの挨拶語”という術語について 9
２．３　「接続表現」と「接続詞」について 12
２．４　調査対象 14
３．本研究の構成 14
使用テキスト 15
【第Ⅰ部】サラバの史的展開 16
第１章 サラバの“別れの挨拶語”化 17
１．はじめに 17
２．調査の観点 18
３．調査結果 21
３．１　離行行動の特徴を満たす例 21
３．２　後件不明示の特徴を満たす例 23
３．３　離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例 24
４．おわりに 29
使用テキスト 30
第２章 サラバの接続詞化―指示性と場面展開機能に着目して― 32
１．はじめに 32
２．調査の観点 33
３．指示性の不明瞭化 34
４．場面展開機能の発達 38
４．１　先行論の確認，指標の設定 38
４．２　意志・命令表現との共起 38
４．３　イザ類との共起 44

４．４　指示性の不明瞭化との関係及び統語的条件……47
５．おわりに……48
使用テキスト……49
第３章 サラバの接続詞化―サレバ・未然形バとの対照―……51
１．はじめに……51
２．問題の所在……51
３．調査対象……54
４．後続表現に見られるサラバ・サレバ・未然形バの特徴……55
４．１　分類……55
４．２　サラバ……58
４．３　サレバ……60
４．４　未然形バ……61
5. 先行事態に見られるサラバ・サレバ・未然形バの特徴……64
５．１　サラバとサレバの比較……64
５．２　サラバと未然形バの比較……66
６．おわりに……67
使用テキスト……69
【第Ⅱ部】サヨウナラ（バ）の史的展開……70
第４章 サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化……71
１．はじめに……71
２．サヨウナラ（バ）の自立語化……73
３．調査資料……74
４．調査の観点……75
５．調査結果……78
５．１　離行行動の特徴を満たす例……78
５．２　後件不明示の特徴を満たす例……81
５．３　離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例……84
６．おわりに……87
使用テキスト……88
第５章 サヨウナラ（バ）の接続詞化―指示性と場面展開機能に着目して―……91

１．はじめに……91
２．指示性の不明瞭化……93
２．１　調査の観点……93
２．２　調査結果……95
２．２．１　非言語的文脈を受ける例……95
２．２．２　言語的文脈を受ける場合……96
２．２．２．１　相手の発話を受ける場合……96
２．２．２．２　自分の発話を受ける場合……98
２．３　まとめ……100
３．場面展開機能の発達……101
３．１　意志・命令表現……101
３．２　ハイ類……106
３．３　まとめ……109
４．おわりに……109
使用テキスト……110
第６章 サヨウナラ（バ）の接続詞化―構成要素に着目して― ……112
１．はじめに……112
２．問題の所在……112
３．サヨウの変化過程……114
３．１　後接要素……114
３．１．１　調査の観点および使用状況の概要……114
３．１．２　中古・中世前期……117
３．１．３　中世後期……119
３．１．４　近世・近代……120
３．２　機能的側面……124
３．２．１　中古・中世前期……124
３．２．２　中世後期以降……128
３．３　サヨウの応答表現化の背景……129
４．ナラ（バ）の変化過程……133
５．サヨウナラ（バ）の接続詞化……135

６．おわりに……136
使用テキスト……137
終章　本研究のまとめ……139
１．本研究のまとめ……139
　１．１　はじめに……139
　１．２　第１章のまとめ……139
　１．３　第２章のまとめ……140
　１．４　第３章のまとめ……140
　１．５　第４章のまとめ……141
　１．６　第５章のまとめ……141
　１．７　第６章のまとめ……142
　１．８　本研究のまとめ……142
２．今後の課題……145
【参考文献】……147

序章　本研究の背景・目的・方法

１．本研究の背景・目的

本研究は，サラバ・ソシテ・シカレバ等，構成要素にサ系列指示詞・ソ系（列）指示詞・シカ系列指示詞[1]を含む接続表現（以下，サ系接続表現）が文法機能を変化させていく事例を記述し，日本語文法史におけるサ系接続表現の様相の把握を試みるとともに，サ系接続表現の歴史的記述を精緻化するうえで日本語文法史の観点が必要であることを主張するものである。

日本語の接続表現には，指示詞を構成要素とするものが多い（高橋 1985，京極・松井 1997，岡﨑 2020 等）。先行する文脈を照応する指示詞の機能が，前後の文脈を繋げる接続表現の機能に適しているからであろう。中でもサ・ソ・シカ系（列）指示詞は古典語以来，前文脈を指示する用法を中心としており（岡﨑 2010），接続表現の構成要素に相応しかったと考える。

サ系接続表現は歴史的に，副詞や接続詞，感動詞，慣用表現等，日本語の談話・文章展開の一翼を担う様々な表現に変化してきたことが知られている（「接続表現」と「接続詞」の差異については後述する）。たとえば，サテ（ハ）・サスガ（ニ）・サラバ・サナガラ・サシテ・サゾ（カシ）・サモ・サヨウナラ・ソレガ・ソレヲ・ソコデ・ソモソモ・シカシ（ナガラ）等は，もともとサ・ソ・シカ系（列）指示詞を構成要素とする接続表現であったものが，それぞれ別の品詞・慣用表現へと転成・変化したものである。このように，サ系接続表現は歴史的に転成を繰り返しつつ，現代語まで使用され続けている。サ系接続表現の歴史的様相の把握は，日本語の談話・文章がどのように特徴づけられてきたかを知るうえで重要である。

しかし，サ系接続表現から別の品詞・慣用表現への変化において，構成要素であるサ・ソ・シカ系（列）指示詞や接続助詞，複文構文の機能等がどのように関わるのかについては，あまり議論されてこなかったと言える。特に指示詞については，現代語のソシテ・ソレデ・ソレガ・ソレヲ・ソコデを取り上げた田村（2005），竹内・岡﨑（2018），サテ・サレバの歴史を扱った岡﨑（2011，2015）が指示詞の機能変化に着目して検討を行っている

[1] 岡﨑（2010:18）に倣い，現代語の指示詞を表す場合は「一系」，古典語の指示詞を表す場合は「一系列」と呼ぶ。

程度である。指示詞の歴史上にサ系接続表現がどのように位置付けられるかについては，未だ検討の余地があろう（岡﨑 2019 等も参照）。特に，岡﨑（2011:76）が「指示詞が他の語と結びつき（「カクテ・サテ」の場合，助詞「テ」と），一語化した時に」，指示詞としての機能を失うという変化が始まる，と述べているように，サ・ソ・シカ系（列）指示詞を構成要素とする接続表現の一部は，変化の過程で指示の機能を失うとされている。前後の文脈を結び付けやすいという点で接続表現の一部をなしていたはずの指示詞が，その機能を失うとはどういうことだろうか。このような点を考察するうえでも，サ系接続表現の研究には指示詞の機能の観点が必須である。

その他，日本語文法カテゴリーの中でも接続表現の構造に大きく関わる条件表現を取り上げる。条件表現の場合，順接仮定条件の接続表現を取り上げた小林（1996:259-282）や矢島（2013:245-284），逆接確定条件の接続表現を取り上げた宮内（2014）や矢島（2018）等，条件表現の同じカテゴリーに属する接続表現を取りまとめ，用法や形態的差異等を考察した研究は見られる。しかし，接続表現が変化し，条件表現とは異なる機能を担うようになる現象（副詞化，感動詞化，慣用表現化等）については，条件表現史の中ではあまり論じられていないように思う。

以上を踏まえ，本研究の目的を以下に示す。

目的：指示詞や条件表現といった日本語文法カテゴリーと関わるサ系接続表現の歴史の構築を目指すとともに，サ系接続表現の歴史的記述において日本語文法史の観点が重要であることを主張する

２．本研究の方法

２．１　サラバ・サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化

本研究は指示詞や条件表現の歴史の中で，サ系接続表現がどのように変遷していくのかを扱う。しかし，一口に「サ系接続表現」と言っても，その形式や機能は多様である。ある現象・形式に焦点を当てずに記述していけば，種々雑多なものが混交し，かえってサ系接続表現の歴史が整理できない。

そこで本研究では，日本語文法史にサ系接続表現の歴史を位置付ける一環として，サ系接続表現の“別れの挨拶語”化を取り上げる。サ系接続表現の“別れの挨拶語”化の過程には様々な文法機能との関わりが認められ（後述），日本語文法史の課題として論じられるべ

き事例であると言える。

まず，「別れの挨拶語」を定義しておこう。以下に，本研究で扱う「別れの挨拶語」の定義を示す。

別れの挨拶語：その表現自体で「別れ」の意味を表す一語の自立語

この定義に従えば，ある表現が別れの場面で使用されていたとしても，その表現自体が「別れ」の意味を表し，かつ一語化していることが認められなければ，“別れの挨拶語”化したものとは言えないということになる。“別れの挨拶語”という術語については，2.2 節で詳述する。

本研究では，“別れの挨拶語”化という現象が，順接仮定条件のサ系接続表現と密接に関わっている点に注目する。サ系接続表現のうち，サラバやサヨウナラ（バ）等，順接仮定条件を表す形式は“別れの挨拶語”化する。あるいは“別れの挨拶語”化したとまでは言えなくとも（それ自体で「別れ」の意味を表しているとまでは断定できなくとも），別れの場面で使用されるようになる（例：ソレデハ等）[2]。

(1) （客）をかへあがつた河童をみるよふにぐにや／＼する女郎はこつちから。おさらばだはへ（江戸，洒落本，総籬，1787 年，洒落本大成 14p.56，52-洒落 1787_01065，179370）

(2) おくみは坊ちやんをつれて門口で見送つた。「さ，こちらへ入らつして左様ならをなさいまし。（略）」と，おくみは坊ちやまが車の背中の漆塗へ顔を写してゐられるのをこちらへ引き放した。（小説，桑の実，8，1913 年，青空文庫）傍点原文ママ

(3) その日のブログの最後の言葉「それじゃじゃーねー」（http://blogs.yahoo.co.jp/kikkun55//57795335.html，倉持 2013a:51）

---

[2] サラバやサヨウナラ（バ）は「さらばだ」「おさらばだ／する」「さよならだ／する」のように繫辞を後接したり動詞句を構成したりして「別れ」の意味を表せる（ただし，サラバは接頭辞オが付かなければ動詞句を構成できないという制約がある）。それに対して，ソレデハは「*それではだ／する」の形で「別れ」の意味を表せない。この点において，ソレデハは「“別れの挨拶語”化したとまでは断定できない」と見なす。

(1)はサラバに接頭辞オが前接したオサラバという形式，(2)はサヨウナラ（バ）が動詞句を構成する形式である。(3)はソレデハが形態変化したジャアに終助詞ネが後接した形式であり，ソレジャと共起している。いずれも，その表現自体が「別れ」の意味を表すと解釈しなければ，文意が読み取れない。本研究では，このような例を「それ自体で「別れ」意味を表すもの」と見なす。このようにサ系接続表現の中で“別れの挨拶語”化するのは，順接仮定条件の形式のみである。

一方で，同じサ系接続表現でも順接確定条件の形式（サレバ・シカレバ・ソレダカラ等）は“別れの挨拶語”化しない。また，同じ順接仮定条件の接続表現でもコ・ア・カク系（列）指示詞で先行状況を受ける形式（コレナラバ，アレナラバ，カカラバ等）は“別れの挨拶語”化しない。よって，接続表現の“別れの挨拶語”化における重要な点は，サ・ソ・シカ系（列）指示詞を構成要素とする点，順接仮定条件を表す点であると言える。

では，なぜ順接仮定条件のサ系接続表現のみが“別れの挨拶語”化するのだろうか。従来の“別れの挨拶語”に関する研究（蜂谷 1983，前田 1985，倉持 2013a，2013b，濱田 2013，田島 2018b 等）では，この点が問題にされてこなかった。それは，この変化が語彙史（挨拶語史）の中で個々に記述されてきたためであろう。たとえば，サラバやサヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化について記述した研究でも，当該表現が持つ文法的特徴（サ・サヨウ，未然形バ・ナラ（バ）等）についてはほとんど言及されていない。

なぜ順接仮定条件のサ系接続表現のみが“別れの挨拶語”化するのかという問に対しては，俄に解答を与え難い。しかし，この問に取り組むことで，これまで語彙史として扱われてきた現象を指示詞の歴史・条件表現史の一現象とし，文法史的課題として位置付けることはできる。サ系接続表現の“別れの挨拶語”化は，サ系接続表現に指示詞や条件表現がいかに関わってきたかを考察するのに相応しい現象であると言えよう。本研究では，サ系接続表現の“別れの挨拶語”化について考察するという方法を採ることで，サ系接続表現が日本語文法史にどのように位置付けられるのかを考察する一助としたい。

本研究では個別の形式を取り上げ，その歴史を記述する。具体的には，順接仮定条件を表すサ系接続表現の中でも，通時的に豊富な用例が得られるサラバとサヨウナラ（バ）を取り上げ，様々な観点から史的展開を観察する。また，比較対象としてサレバや未然形バ，サヨウやナラ（バ）に着目する章もある。

サヨウナラ（バ）は「さよなら／さいなら」等の短縮形を含む。また，「サヨウナラ（バ）」はバを含む場合と含まない場合を一括して表している。バのある形にのみ言及す

る場合は「サヨウナラバ」，バのない形にのみ言及する場合は「サヨウナラ」と表す。ナラ（バ）も同様である。さらに，読みが特定できない例等は適宜，調査対象から除いた。たとえば，「然ば／然者」はサラバ・サレバ・シカラバ・シカレバと 4 通りの読みが想定できるため除く[3]。なお，調査対象の観察範囲は，各章で述べる。

以上を踏まえ，本研究の目的と方法を整理する。

目的：指示詞や条件表現といった日本語文法カテゴリーと関わるサ系接続表現の歴史の構築を目指すとともに，サ系接続表現の歴史的記述において日本語文法史の観点が重要であることを主張する（再掲）

方法：順接仮定条件のサ系接続表現であるサラバとサヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化に着目する。“別れの挨拶語”化がなぜ順接仮定条件を表すサ系接続表現にのみ生じるのか，という問を手がかりとして，当該現象に指示詞や条件表現がどのように関わるのかを記述する

本研究では，順接仮定条件のサ系接続表現のみが“別れの挨拶語”化する理由について，明確で端的な解答を与えることは難しい。しかし，この変化の要因を明らかにし，それを手がかりとすることで，当該現象が日本語文法史において記述可能であることを示すことはできる。本研究によって，サ系接続表現の“別れの挨拶語”化の要因解明にいくらか貢献し，具体的な示唆をもたらすことは可能であろう。本研究は文法史研究への発展的課題をもたらすことを目指すものである。

２．２　“別れの挨拶語”という術語について

各時代における別れの表現については夙に多くの研究があり，どの時代にどのような別れの表現が存在するのか，その歴史的な様相が示されてきた（湯澤 1957，蜂谷 1983，前田 1985，諸星 1999，倉持 2013a，2013b，濱田 2013，中野 2016，濱屋 2016，田島 2018a，2018b）。サラバ・サヨウナラ（バ）の様相も概略は把握されていると言ってよい。

---

[3] 妙本寺蔵『いろは字』（永禄二（1559）年清書，鈴木 1974）では，「然者」の右側にサラバ，左側にサレバというルビが付されている。『いろは字』は「毎半葉，七行八段に墨格を引き，漢字を記しその左右や下に，かたかなで音や訓をつけ，しばしば注記を施し」（鈴木 1974:171）た辞書である。

しかし，これほどの研究の蓄積がありながら，統一の見解が示されていない点もある。“別れの挨拶語”サラバの成立時期についてである。研究者の中には，“別れの挨拶語”サラバが中古には既に存在していたとするもの（蜂谷 1983，前田 1985 等）と，中世後期以降に確立したとするもの（濱田 2013，田島 2018b）がある。たとえば，次例のサラバが接続表現であるか“別れの挨拶語”であるかは，研究者によって見解が分かれる。

(4) a.今といひて別るるだにもあるものを知られぬけさのましてわびしさ（和歌集，後撰和歌集，離別，1340 番歌，10 世紀半ば，蜂谷 1983:142）

b.さらばよと別れし時に言はませばわれも涙におぼほれましを（同，1341 番歌，蜂谷 1983:142）

(5) （僧都）「まかり降(お)りむこと，今日明日(けふあす)は障(さは)りはべる。月たちてのほどに，御消息(せうそこ)を申させはべらん」と申したまふ。いと心もとなけれど，なほなほとうちつけに焦(い)られんもさまあしければ，（薫）さらば，とて帰りたまふ。（作り物語，源氏物語，夢浮橋，11 世紀初期，新全集 25p.380，20-源氏 1010_00054，27590）

(4)(5)について蜂谷（1983:143）は，「この「さらばよ」は別れのことばとして用いられているものと思われる」と述べる。また，小田（2015:643）は(5)の例を「感動詞」の中の「挨拶の意を表すもの」に分類している。前田（1985:83）は(4)(5)の例を根拠に，「別れの時のあいさつ言葉は比較的早く発達していたらしい」と述べる。

一方，濱田（2013:52）は(4)について，

「さらばよ」の形で一見感動詞〈＝本研究の“別れの挨拶語”に相当〉のように見えるがそうではない。贈太政大臣（時平）の後朝文である 1340 に対しての返答の文で，歌意は「そういう事情ならそういうことだと別れの時に言ってくれたならば，私も（貴方と同様に）別れがわびしくて大いに泣いた事でしょう。しかしそう言ってくれなかったので，そうもしませんでした」の意。要するに感動詞では無かった。（山括弧内川村）

と述べる。また，(5)についても次のように述べる（濱田 2013:52）。

〈夢浮橋〉の例は，薫が横川の僧正に浮舟の隠所への案内を請うたのに，僧正が今日明日は支障が有り，来月になってこちらから御連絡させましょうと言ったのに対し，「そういう事ならばその時を待ちましょう」と言って帰った場合。「さらば」は対話者の主旨の了解を言う詞。離行の感動詞ではない。

濱田（2013）は中世後期の謡曲の例(6)を，“別れの挨拶語”化したサラバの発生と見ている。

(6) さらばといひて呉織漢織は帰れども（謡曲，呉服，14~15 世紀頃，濱田 2013:55）

このように，“別れの挨拶語”サラバの成立時期については諸説入り乱れ，統一の見解がなされていない。見解の相違が生じるのは，“別れの挨拶語”が明確に定義されず，判断が大きく解釈に依拠して，何をもって“別れの挨拶語”と見なすかが研究者ごとに異なるからであると考える。この点は，サヨウナラにおいても同様である。サヨウナラも“別れの挨拶語”の定義がなされず，解釈に依拠した用例判断がなされている。

変化の時期を特定するためには，個々の形式について，その歴史的記述を整理することから始めなければならない。そこで本研究では，2.1 節で示した“別れの挨拶語”の定義に合致する表現を確例とする。そして，その確例が出現する時期までのサラバ・サヨウナラ（バ）の歴史的推移を記述する。そうすることで，これまで諸説入り乱れ，歴史的記述自体整理されてこなかったサ系接続表現の変化の流れを整理できると考える。

次例は“別れの挨拶語”サヨウナラの確例と見なせる例である。

(7) おくみは坊ちやんをつれて門口で見送つた。「さ，こちらへ入らつして左様ならをなさいまし。（略）」と，おくみは坊ちやまが車の背中の漆塗へ顔を写してゐられるのをこちらへ引き放した。（再掲(2)）

接続表現サヨウナラ（バ）は，サヨウによる「先行内容を指示する機能」及びナラ（バ）による「前件と後件を接続する機能」を有する。しかし，(7)のサヨウナラには指示・接続の機能があるとは考えにくい。また，2.1 節で述べたように，サヨウナラそれ自体が「別れ」の意を持ち，「左様ならをなす」で「別れを告げる」という意味を表していると考えなけ

れば，文意が解釈できない。これはサヨウナラが「別れ」という実質的な意を表わす形式として自立語化していることを表す。本研究では，(7)のように当該表現それ自体で「別れ」の意を表していると解釈できる自立語を，“別れの挨拶語”とする。

なお，先行論では「別れの挨拶」（濱屋 2016），「別れの挨拶語」（楊 2016:68），「別れの挨拶の語」（小林 1996:274），「別れの挨拶表現」（田島 2018a，2018b），「別れのことば」（水谷 1982，蜂谷 1983），「別れの言葉」（前田 1985:86，倉持 2013a，2013b），「別れ時の詞」（濱田 2013），「辞去・送別の挨拶語」（諸星 1999:64）等の術語が使用される。しかし，ほとんどの先行論ではこれらが明確に定義されていない。本研究では，サラバやサヨウナラ（バ）が「別れ」の意を表す 1 つの自立語となることを重視し，楊（2016:68）で用いられた“別れの挨拶語”という術語を用いる。

また，先行論の中には，「別れ」の意を表すサラバやサヨウナラを「感動詞」と見なすものがある（蜂谷 1983，小林 1996，倉持 2013a，2013b，濱田 2013，小田 2015 等）。感動詞は「日本語の品詞論の中で，的確な地位が与えられず，かつ，その品詞名の下に所属されるべき語の浮動しているものの一つ」（鈴木 1997:138）である。挨拶語は「その一語一文相当性と対人的な呼掛け性から，感動詞の中にふくめて処理されることが多い」（山口 1984:135）。しかし一方で，挨拶語が「名詞」とされる場合もあったり（大日本國語辭典[4]，鈴木 1997:138 にも言及がある），感動詞が「語」ではなく「句」として扱われる場合もあったり（鈴木 1997:170）と，所属が一定していない。本研究では，このように品詞論的位置付けが曖昧な表現に関して「感動詞」「名詞」といった品詞としての呼称を用いることは避ける（引用文中ではこの限りでない）。

以下の各章では，“別れの挨拶語”の定義に合致する表現を確例とし，その例が出現する時期までにサラバやサヨウナラ（バ）がどのような推移を辿ったのか，各種指標を設定し調査する，という手法を取る。

２．３　「接続表現」と「接続詞」について

日本語には固有の接続詞がなく，すべて複合語か転成語であり，特に古典語ではその発達が十分ではなかったことが従来指摘されている（池上 1947，永山 1970，高橋 1985，京極・松井 1997，磯貝 2016 等）。すなわち，何らかの語句・表現を流用したり組み合わせた

[4]「さやう-なら（名）別れを告ぐる時にいふ語。」（大日本國語辭典（修訂 6 版）p.974）

りして，「接続」という機能を担う表現を作り出していたということである。たとえばサラバは，「指示詞サ＋動詞アリ＋接続助詞バ」という資材の組み合わせから成り，「接続」の機能は構成要素である指示詞サの指示の機能や，バの条件を表す機能によって成り立つ。このように「接続」の機能を持ち，「当該表現がそれを構成する個々の要素に分析可能であり，それぞれの構成要素が十分に機能している表現」を，本研究では「接続表現」と呼ぶ（引用文中ではこの限りでない。次の「接続詞」も同様）。

一方，接続表現の次の段階として，「当該表現が一語化することで，それを構成する個々の要素に分析することが不可能となり，それぞれの要素の機能も不明瞭化している表現」も存在する。本研究ではこれを「接続詞」と呼び，「接続表現」と区別する。

接続表現：「接続」の機能を持ち，当該表現がそれを構成する個々の要素に分析可能であり，それぞれの構成要素が十分に機能している表現

接続詞：接続表現の次の段階。当該表現が一語化することで，それを構成する個々の要素に分析することが不可能となり，それぞれの要素の機能が不明瞭化している表現

サ系接続表現の接続詞化という現象は，当該表現がもともと持つ文法機能（指示詞サの指示性や，未然形バの構造による順接仮定条件の機能）が不明瞭化していく変化である。前後を結び付けやすくするために接続表現の一部をなしていた指示詞の機能や，順接仮定条件の機能が不明瞭化するというのは，どのような事情によるのであろうか。この問について考察するためにも，「接続詞」という区分を設けるのは有用である。

また，第 2 章，第 5 章でも述べるが，サ系接続表現は接続詞の段階を経て，“別れの挨拶語”化したと考えられる。サ系接続表現の“別れの挨拶語”化を考察するうえで，接続詞の段階を想定しておくことが重要である。

なお，サラバは「さあらば」ではなく，サとアリが複合した「さらば」の形で文献上現れることが多い（サアラバは古典語の文献ではほとんど見られない）。その点で，形態的には出現当初から一語化しているとも捉えられる。しかし，上記の「接続詞」の定義でいう「一語化」は機能的な側面に着目したものである。形態的に一語化していても指示等の機能が明瞭である段階は，接続詞とは見なさない。

２．４　調査対象

本研究では，幅広いジャンルのテキストを調査対象とする。具体的には，作り物語・歌物語・日記・紀行・随筆・歴史物語・和歌集・軍記・説話・謡曲・キリシタン資料・狂言・浮世草子・浄瑠璃・歌舞伎脚本・噺本・洒落本・黄表紙・滑稽本・人情本・近代小説・雑誌・教科書・新聞・落語等を用いる。詳細な使用文献等については各章末尾に示す。調査には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』や，国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』・『噺本大系本文データベース』等，コーパスやデータベースを適宜利用する。データベースのないものは索引を用いた。索引もないものは目視で用例を採取した。

３．本研究の構成

本研究は第Ⅰ部，第Ⅱ部で構成する。

第Ⅰ部「サラバの史的展開」では，接続表現サラバの接続詞化，“別れの挨拶語”化の過程を観察する。第 1 章では，話者がその場を離れる行動を伴うか否か，後件が明示されるか否かを指標とし，サラバが“別れの挨拶語”化する過程を観察する。第 2 章では，指示性が不明瞭であるか否か，場面が展開し得るか否かを指標とし，サラバが接続詞化する過程を観察する。第 3 章では，サラバの後続表現及び先行事態に着目し，サレバ・未然形バと比較する。

続く第Ⅱ部「サヨウナラ（バ）の史的展開」では，サヨウナラ（バ）の接続詞化，“別れの挨拶語”化の過程を観察する。第 4 章では，話者がその場を離れる行動を伴うか否か，後件が明示されるか否かを指標とし，サヨウナラ（バ）が“別れの挨拶語”化する過程を観察する。第 5 章では，指示性が不明瞭であるか否か，場面が展開し得るか否かを指標とし，サヨウナラ（バ）が接続詞化する過程を観察する。第 6 章では，サヨウナラ（バ）の構成要素サヨウ及びナラ（バ）に着目し，サヨウナラ（バ）が接続詞化する過程を観察する。

各章の元となる発表・論文の初出は，以下の通りである。いずれも，加筆・修正を施している。

第 1 章　川村祐斗（2018）「サラバの別れの挨拶語化に関する記述的研究」『名古屋大学国語国文学』111 名古屋大学国語国文学会 pp.70-56（pp.(33)-(47)）.

第 2 章　川村祐斗（2020a）「接続表現サラバの“別れの挨拶語”化：「指示性の不明瞭化」と

「場面展開機能」の発達」『名古屋大学人文学フォーラム』3 名古屋大学大学院人文学研究科図書・論集委員会 pp.129-144.

第 3 章　川村祐斗（近刊）「サラバの史的展開：サレバ・未然形バとの対照」日本語学会編『日本語の研究』20-1 武蔵野書院.

第 4 章　川村祐斗（2021）「接続表現サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化」『Nagoya Linguistics』15 名古屋言語研究会 pp.1-14.

第 5 章　川村祐斗（2022）「接続表現サヨウナラ（バ）の機能変化」『Nagoya Linguistics』16 名古屋言語研究会 pp.1-14.

第 6 章　川村祐斗「サヨウナラ（バ）の史的展開：構成要素に着目して」名古屋言語研究会第 197 回例会（名古屋大学，2023 年 9 月 30 日）

序章，終章は書下ろしである。

使用テキスト

・源氏物語…『新編日本古典文学全集』小学館，国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』（中納言 2.7.2 データバージョン 2023.03）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2023 年 11 月 27 日確認）位置検索を使用
※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

・総籬…洒落本大成編集委員会編（1978-1988）『洒落本大成』中央公論社，国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』（バージョン等，上に同じ）

・桑の実…『青空文庫 Aozora Bunko』https://www.aozora.gr.jp（2023 年 11 月 22 日最終閲覧）

【第Ⅰ部】サラバの史的展開

第１章 サラバの“別れの挨拶語”化

１．はじめに

本章ではサラバの“別れの挨拶語”化の過程を観察する。“別れの挨拶語”サラバについて言及した研究には蓄積がある（榎本 1982，蜂谷 1983，前田 1985，倉持 2013a，2013b，濱田 2013，濱屋 2016，田島 2018a，2018b，竹内・萩原 2019）。しかし，いずれもサラバの意味変化に触れてはいるが，具体的指標をもってサラバが“別れの挨拶語”化する過程を考察した研究はほとんど見出せない。この他サラバを対象とした研究（清瀬 1955，山口 1996:250-262，小林 1996:259-282，坂詰 2015，楊 2016）では，いずれも様々な観点からサラバの機能について論じている。しかし，“別れの挨拶語”化についてはほとんど考察が及んでいない。そこで，本章では，具体的な指標をもってサラバの“別れの挨拶語”化の過程について論じていく。

接続表現サラバは前件の内容を仮定的に捉え，順当に続く内容を後件に導く順接仮定条件の機能を持っていたとされる(1)。

(1) （道長）「和歌ひとつづつ仕(つか)うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。（日記，紫式部日記，11 世紀初期，新全集 26p.166，20-紫式 1010_00001，150420）

接続表現サラバは構成要素に指示詞サを持つことから，その指示対象を前件，サラバに後続する主節述語句を後件とする。前件内容の指示は指示詞サ，後件との接続は接続助詞バの機能である。これらの機能は，サラバの“別れの挨拶語”化に伴って不明瞭化していく。

サラバは 17 世紀後半頃までに「別れ」の意を表す語として自立語化したと考える。それは，17 世紀後半から 18 世紀初期にかけてオサラバという形式(2)や，繋辞が後接した形式(3)が出現することからわかる。

(2) 嶋原の別も，吉原のおさらばといふ声も，同じ物うき朝（上方，浮世草子，諸艶大鑑，1-4，1684 年，田島 2018b:11）

(3) もうお目にかゝりますまい。さらばでござんす内衆(うちしゅ)もさらば／＼と，よそながら暇乞(いとまご)ひして，閨(ねや)に入いる。（上方，浄瑠璃，曾根崎心中，蜆川新地天満屋の場，

1703 年，新全集 75p.34，51-近松 1703_11003，18670）

接頭辞オが前接する(2)，繋辞が後接する(3)は，サラバが「別れ」の意を表す形式として自立語化したものと認められる。つまり，サラバという形式それ自体で「別れ」の意を表すということである。これは序章で示した“別れの挨拶語”の定義「その表現自体で「別れ」の意味を表す一語の自立語」に合致する。“別れの挨拶語”サラバは「指示詞サ＋動詞アリ未然形＋接続助詞バ」という，個々の構成体が複合して変化したものである。オサラバや繋辞後接例は，もとの内部要素である指示詞サ，接続助詞バそれぞれの機能が喪失したことを示すものと言える。これらの形式の出現はサラバが“別れの挨拶語”として定着したことの証左となる。

以上を踏まえ，オサラバや繋辞後接の例が出現するまでに，サラバが“別れの挨拶語”に顕著な特徴をどのように整えていったのかを記述する。具体的には，「発話直後にその場を離れる行動を伴うこと」「後件が明示されないこと」の 2 点に基づき用例を観察する。

２．調査の観点

サラバの“別れの挨拶語”化の過程を辿るにあたり，本章では以下の 2 つの観点を掲げる。

①発話直後にその場を離れる行動を伴うこと

②後件が明示されないこと

①発話直後にその場を離れる行動を伴うことは，サラバを含む発話直後に「帰る」「別れる」等の行動（以下，離行行動）を伴うという場面的特徴である。“別れの挨拶語”サラバは普通，発話直後に離行行動を伴う。

一方，調査結果を先取りするが，接続表現あるいは接続詞サラバは，時代を通して離行行動を伴わずとも使用可能であった(4)～(7)。

(4) 女がたに，「なほ舟にてを」とあれば，さらばとて，みな乗りて，（日記，蜻蛉日記，中，10 世紀後半，新全集 13p.261，20-蜻蛉 0974_00007，78720）

(5) （源氏）「しづまりぬなり。入りて，さらば，たばかれ」とのたまふ。（作り物語，源氏物語，空蟬，11 世紀初期，新全集 20p.123，20-源氏 1010_00003，21550）

(6)　（木曾）「猫は人にげんざうするか」。（郎等）「是は猫間の中納言殿と申公卿でわたらせ給ふ。御宿所の名とおぼえ候」と申ければ，木曾「さらば」とて對面す。（軍記，覚一本平家物語，8，猫間，1371 年頃，大系 33p.140）

(7)　獅子王然らばと〔farabato〕言うて，穴の中から出て（キリシタン資料，天草版伊曽保物語，蠅と,獅子王の事.，1593 年，大英図書館蔵 p.484，40-天伊 1593_00050，930）

離行行動には「帰る」「別れる」の他，「立つ」「出づ」「まかづ」「のく」「去る」「往ぬ」「過ぐ」「暇乞いす」等の動詞で行動が表示されるものも含める。「死ぬ」「殺す」等も「この世から離れる」意味を持つため離行行動に含める。

また，具体的な行動は明示されないが，場面が切り替わることでその場を離れたことが文脈上読み取れるもの(8)や，「見送る」等の行為から他者がその場を離れていることがわかるもの(9)等も離行行動に含める。

(8)　（太郎冠者）「（略）さらハかう参る，さらハ／＼（売手）「ようおじやつた（太郎冠者）「やれ／＼うれしや，いそひでもつてまいらう，参るほどにもどりついた「太こをわきにおきて，申／＼太郎くわじやがもどつて御ざる「もどつたか（果報者）「はりだこをもとめてきたか（狂言，虎明本狂言，張蛸，1642 年写，翻刻注解上 p.74，40-虎明 1642_01015，16390）

(9)　見送る人魂はなく，「さらば／＼」といふ声も遠ざかり（上方，浮世草子，男色大鑑，4，1687 年，新全集 67p.448）

②後件が明示されないことはサラバが後件を必須とするか否かという統語的特徴に基づくものである。後件が明示される場合（以下，後件明示），サラバは発話の冒頭(10)，または，発話の途中(11)に位置することになる。接続表現サラバは接続という機能上，前件・後件が必須であり，直後に語や句が続く位置に出現する場合が多い。よって，後件明示は接続表現サラバに顕著な特徴であると言える。前件は相手の発言や様子であることがあり，その場合，同一発話内に前件が存在する必要はなく，サラバは発話の冒頭に出現しやすくなる(10)。

(10) 嫗に，内侍ののたまふ，「仰せごとに，かぐや姫のかたち，優におはすなり。よく見て参るべきよし，のたまはせつるになむ，参りつる」といへば，（嫗）「さらば，かく申しはべらむ」といひて，入りぬ。（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.57，20-竹取 0900_00001，128840）

(11) （道長）「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。（再掲(1)）

一方，後件が明示されない場合（以下，後件不明示）は，発話の終わり(12)，または，前件も後件もなく単独で(13)使用される。“別れの挨拶語”サラバは接続の機能を果たさず前件・後件から独立しているため，直後に語や句が続かない場合が多い。よって，後件不明示は“別れの挨拶語”サラバに顕著な特徴であると言える。

(12) あ，それならば死にませう父上さらばと言ひ捨てて兄が死骸に寄りかゝり，（上方，浄瑠璃，出世景清，4，1685 年，新全集 76p.48）

(13) 見送る人魂はなく，「さらば／＼」といふ声も遠ざかり（再掲(9)）

以上，①②に基づきサラバの歴史を記述する。なお，①②を満たすだけでは“別れの挨拶語”とは言えない（後述）。すなわち，①②は“別れの挨拶語”サラバの十分条件とまでは言えないということである。

調査対象は発話の用例に限る[1,2]。これは，挨拶語という特性から，サラバの変化が発話で顕著に観察し得る現象であると考えるためである。

---

[1] 次例のように発話・心内表現の末尾が地の文に推移する例は調査対象から除外する。

(ア) さらば，この御なやみもよろしう見えたまふを，かならず聞こえし日違へさせたまはず渡りたまふべきよし，聞こえ契りたまふ。（作り物語，源氏物語，行幸，11 世紀初期，新全集 22 p.309，20-源氏 1010_00029，76600）

[2] 『天草版平家物語』では「右馬の允という人物の請いを受けて喜一検校が平家物語の概略を語る」（江口 2010:427）形式が取られている。そのため，各章冒頭の右馬の允の台詞に対する喜一検校の返答までを「発話」，以降の喜一検校の語り部分を「地の文」とする。(イ)では「語りまらせう」までが「発話」，「タダクラの」以降が「地の文」となる。

(イ) 右馬．高倉の宮の御謀反の容態をも聞きたい，御語り有れ．喜．先づは扨退屈も召されぬ御人ぢゃ．然らば〔Saraba〕語りまらせう：タダクラの宮の御謀反の由を披露仕ったれば，（キリシタン資料，天草版平家物語，2-2，1592 年，大英図書館蔵 p.107，40-天平 1592_02002，1030）

本章の対象とする時代は中古から近世前期（～1750 年）とする。中古以降とするのは，上代文献からはサラバが見出せず（楊 2016:68），中古以降しか観察できないためである。近世前期までとするのは，“別れの挨拶語”定着の証左となるオサラバや繫辞後接の例が，17 世紀後半から 18 世紀初期にかけて現れるようになるためである。

３．調査結果

３．１　離行行動の特徴を満たす例

①発話直後にその場を離れる行動を伴うことについて記述する。離行行動の用例数とその推移をジャンルごとに示す（表１）。

表1）離行行動の特徴を満たす例の歴史的推移

		中古			中世前期				中世後期				近世前期		
		物語	日記	随筆	軍記	説話	日記	随筆	軍記	謡曲	キリシタン	狂言	噺本	浮世草子	浄瑠璃
該当例	用例数	12	4	0	1	3	2	0	4	9	3	6	10	14	56
	百分率	12.0%	25.0%	0.0%	4.2%	6.8%	33.3%	0.0%	6.6%	12.3%	5.7%	8.6%	10.8%	51.9%	71.8%
計		100	16	12	24	44	6	2	61	73	53	70	93	27	78

※「計」は各作品における発話中のサラバの全用例数。表2，3も同様。「狂言」は『虎明本狂言』「脇狂言之類」のみ集計。表2以降も同様。

表 1 から，離行行動を伴う例は，発話の全用例数に対してそれほど多くないものの中古には既に存在していたことがわかる（128 例中 16 例）。(14)(15)は離行行動を伴うだけでなく，後件不明示の例としても注目される。詳しくは後述する。

(14)（僧都）「まかり降(お)りむこと，今日明日(けふあす)は障(さは)りはべる。月たちてのほどに，御消息(せうそこ)を申させはべらん」と申したまふ。いと心もとなけれど，なほなほとうちつけに焦(い)られんもさまあしければ，（薫）さらば，とて帰りたまふ。（作り物語，源氏物語，夢浮橋，11 世紀初期，新全集 25p.380，20-源氏 1010_00054，27590）

(15)（少将）「かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさめやはとなむ申しつると啓(けい)したまへ」といひける。この大徳(だいとく)の顔かたち，姿を見るに，悲しきこともものに似ず。（略）悲しとても，かた時(とき)人のゐるべくもあらぬ山の奥なりければ，泣く泣く，（内舎人）「さらば」といひてかへり来(き)て，（作り物語，大和物語，168，10 世紀半ば，新全集 12p.408，20-大和 0951_00001，392600）

(16) 夜のまに雨やみにためれば，（兼家）「さらば暮に」などて帰りぬ。（日記，蜻蛉日記，中，10 世紀後半，新全集 13p.267，20-蜻蛉 0974_00008，16380）

中世前期から後期までは引き続き離行行動の例が観察できるが，全体に占める用例数は少ない（中世前期 76 例中 6 例，中世後期 257 例中 22 例）。

中古から中世後期まではむしろ，離行行動以外の行動を伴うことが多かった(17)〜(19)。

(17) （道長）「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。（再掲(1)）

(18) 商人，女に問うて曰く，「（略）今はすみやかに具しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば，帰るべきやうなし」といへば，この女ども，「さらば，いざさせ給へ」といひて，前に立ちて導きて行く。（説話，宇治拾遺物語，6-9，13 世紀前半，新全集 50p.217，30-宇治 1220_06009，3810）

(19) 獅子王然らばと〔ʃarabato〕言うて，穴の中から出て（再掲(7)）

上の例では「のたまふ」「導きて行く」「出る」という言動を伴っている。このことから，中古から中世後期まではサラバの直後には，離行行動に限らず範列的に様々な行動を取れたことがわかる。様々な行動を取れたのであるから，その 1 つとして離行行動があっても不思議ではない。よって，離行行動の特徴を満たすだけでは，サラバが“別れの挨拶語”であることの証左にはならない。

近世前期に至ると離行行動の比率が急増する。しかし，噺本の用例数は浮世草子・浄瑠璃に比してそれほど多くない（93 例中 10 例）。これは，必ずしも離行行動を伴う必要のない接続表現（あるいは接続詞）サラバが優勢であるためと考える(20)。

(20) 旅人，在処の者に，此川をハ何とか言。（在処の者）あひそめ河と答ふ。（旅人）さらバこれを染てたべと，てぬくひを指出す。（上方，噺本，醒睡笑，8，1623 年序，噺本大系 2p.194）

噺本の表現は「全体的に言えば話しことばを基盤にして」（蜂谷 2007:950）いるが，「文語的性格の強いことも指摘されて」（同）いる。噺本に接続表現（あるいは接続詞）サラバが多いのは，こうした資料性が反映したためであろう。

一方，浮世草子・浄瑠璃では離行行動の例が多く見える（浮世草子 27 例中 14 例(21)，浄瑠璃 78 例中 56 例(22)）。

(21) （若衆）「（略）明日此の若衆さまをおこしまして下され。さらばや」と，いとまごひして帰られぬ。（上方，浮世草子，野白内証鑑，4，1710 年，新全集 65p.336）

(22) さらばお暇（いとま）申さうと表へ出れば，（上方，浄瑠璃，冥途の飛脚，上，1711 年，新全集 74p.120，51-近松 1711_03001，44950）

以上，中古から近世前期の離行行動を伴うサラバについて観察した。結果，離行行動の例は中世後期までは用例が少ないが，近世前期になると概ね多くなることがわかった。

３．２　後件不明示の特徴を満たす例

次に，**②後件が明示されないこと**について記述する。ジャンルごとの該当用例数を示す（表 2）[3]。

表2）後件不明示の特徴を満たす例の歴史的推移

		中古			中世前期				中世後期				近世前期		
		物語	日記	随筆	軍記	説話	日記	随筆	軍記	謡曲	キリシタン	狂言	噺本	浮世草子	浄瑠璃
該当例	用例数	7	1	0	5	3	1	0	15	10	11	6	38	12	53
	百分率	7.0%	6.3%	0.0%	20.8%	6.8%	16.7%	0.0%	24.6%	13.7%	20.8%	8.6%	40.9%	44.4%	67.9%
計		100	16	12	24	44	6	2	61	73	53	70	93	27	78

表 2 から，中古には既に後件不明示の例が存在していたことがわかる。また，中世後期までは，用例数はそれほど多くなく，全体の 1 割から 2 割程度である（中古 128 例中 8 例(23)，中世前期 76 例中 9 例(24)，中世後期 257 例中 42 例(25)）。

[3] 調査範囲でサラバの「呼び止め」の例が見られた(ウ)。新全集 51 頭注には「「おおい，おおい」ほどの呼びかけの言葉か。『袋草子』では「更さらに」。国会本系なし。」（p.94）とあり，諸本による相違が認められる。表 2 はこれも含めて集計した。

(ウ) （ある者）冷然として，二三町ばかり行くを，（源経兼）人を走らかして，「さらば」とよび返しければ，（説話，十訓抄，1252 年，新全集 51p.95，30-十訓 1252_01046，890）

(23) 女がたに，「なほ舟にてを」とあれば，さらばとて，みな乗りて，（再掲(4)）

(24) （木曾）「猫は人にげんざうするか」。（郎等）「是は猫間の中納言殿と申公卿でわたらせ給ふ。御宿所の名とおぼえ候」と申ければ，木曾「さらば」とて對面す。（再掲(6)）

(25) 獅子王然らばと〔ſarabato〕言うて，穴の中から出て（再掲(7)）

近世になると用例数が増加し，4 割から 7 割程度になる（噺本 93 例中 38 例(26)，浮世草子 27 例中 12 例(27)，浄瑠璃 78 例中 53 例(28)）。

(26) 其虵を一つものこさずかまへ入，たきて見給へ，かならずめしに成べし。さらばとてをしへにまかせ，ミなあつめてなべに入，（上方，噺本，一休諸国物語，4，1673 年頃，噺本大系 3p.293）

(27) 見送る人魂はなく，「さらば／＼」といふ声も遠ざかり，（再掲(9)）

(28) あ，それならば死にませう父上さらばと言ひ捨てて兄が死骸に寄りかゝり，（再掲(12)）

以上，中古から近世前期にかけて，発話におけるサラバの後件不明示の例を見た。結果，後件不明示の例は中世後期までは少ないが，近世になると多くなることがわかった。

３．３　離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例

前節まで，離行行動・後件不明示のサラバの歴史的推移をそれぞれ観察した。本節では，2 つの特徴をともに満たす例について観察する。サラバの全用例数に対する該当例の用例数及びその百分率を，ジャンルごとにまとめた（表 3）。

表3）離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例の歴史的推移

		中古			中世前期				中世後期				近世前期		
		物語	日記	随筆	軍記	説話	日記	随筆	軍記	謡曲	キリシタン	狂言	噺本	浮世草子	浄瑠璃
該当例	用例数	2	0	0	1	0	1	0	0	8	0	6	9	11	51
	百分率	2.0%	0.0%	0.0%	4.2%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	11.0%	0.0%	8.6%	9.7%	40.7%	65.4%
計		100	16	12	24	44	6	2	61	73	53	70	93	27	78

表3から，2つの特徴をともに満たす例の推移は概ね，それぞれの特徴の推移と類似していることがわかる。つまり，中世後期頃までは該当例が少ないが，近世前期になると用例がまとまって見えるようになる。近世前期のうち噺本における該当例が少ないが，これは先に見たように，噺本における離行行動の特徴を満たす例がそもそも少ないことによる。

次に，後件不明示のサラバのうち離行行動がどの程度見られるのか観察する。時代，ジャンルごとの該当用例数を示す（表4）。

表4）後件不明示のうち離行行動の特徴も満たす例の歴史的推移

		中古			中世前期				中世後期				近世前期		
		物語	日記	随筆	軍記	説話	日記	随筆	軍記	謡曲	キリシタン	狂言	噺本	浮世草子	浄瑠璃
該当例	用例数	2	0	-	1	0	1	-	0	8	0	6	9	11	51
	百分率	28.6%	0.0%	-	20.0%	0.0%	100%	-	0.0%	80.0%	0.0%	100%	23.7%	91.7%	96.2%
計		7	1	0	5	3	1	0	15	10	11	6	38	12	53

具体的に用例を観察していこう。表3・4から，中古の時点で離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例が存在することがわかる。

(29) （僧都）「まかり降(お)りむこと，今日明日(けふあす)は障(さは)りはべる。月たちてのほどに，御消息(せうそこ)を申させはべらん」と申したまふ。いと心もとなけれど，なほなほとうちつけに焦(い)られんもさまあしければ，（薫）さらば，とて帰りたまふ。（再掲(14)）

(30) （少将）「かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさめやはとなむ申しつると啓(けい)したまへ」といひける。この大徳(だいとく)の顔かたち，姿を見るに，悲しきこともものに似ず。（略）悲しとても，かた時(とき)人のゐるべくもあらぬ山の奥なりければ，泣く泣く，（内舎人）「さらば」といひてかへり来(き)て，（再掲(15)）

(29)(30)は①②両方の特徴を満たす中古の例として興味深い。しかし，2 つの特徴を満たすからと言って，それが“別れの挨拶語”であるとは限らない。第 2 章の内容とも関わるが，“別れの挨拶語”サラバは明瞭な指示対象を必要としない。ところが，(29)(30)では指示詞サが相手の発言内容を指示していると考えられる[4]。その点で，“別れ挨拶語”サラバの確例と

[4] 序章でも触れたように，(29)についての濱田（2013:52）の記述は, サの指示性に直接言及してはいない

したオサラバ等のように指示詞サの指示性が不明瞭な例とは一線を画す。

中古の指示詞サを含む接続表現について池上（1947:7）は「一往その語源的な文字通りの意味が強い時期にあると見られる」,「源氏等の「さりとも，さらば」等やうの語もすべて十分の意味ありと見たい」と指摘している。「文字通りの意味」「十分の意味」とは指示詞サが明瞭な指示対象を持つことを指していると思われる。中古のサラバは概ね指示性が明瞭な段階であったと推測できる。ただし，僅かであるが中古でも指示性が不明瞭な例が見られる。詳細は第 2 章を参照されたい。

中世後期，別れの慣用表現「暇申す」にサラバが続く例が見られる。

(31) 地謡〽（略）暇（いとま）申して（ワキは立って橋がかりへ行く。シテは中央へ出る）さらばとて，勅使は都に，帰りければ（謡曲，鬘物，楊貴妃，15 世紀頃，新全集 58p.360）

(32) よくきへや人々よ，／＼なごりをいふともつきすまし，いとま申てへきあけどの，さらばといひてあいものと，いひすて（狂言，虎明本狂言，連歌十徳，1642 年写，翻刻注解上 p.151，40-虎明 1642_01029，4380）

濱田（2013:54-55）は,「暇申す」とサラバの共起例が「さらばいとま申して」の形で使われ始め(33)，中世後期の謡曲等で「いとま申してさらばとて」の形で使用されるようになったと指摘する(34)。

(33) さらばいとま申てとて馬にうち乗り……西をさいてぞあゆませ給ふ（軍記，覚一本平家物語，7，忠度都落，1371 年頃，濱田 2013:54）

(34) 暇申てさらばとて，中門へさして出させ給ふ（室町小説，西行，中世後期，濱田 2013:55）

「暇申してさらばとて」の例は①②を満たす。これは主に七五調の舞台言語等で使用さ

が，本章にとって示唆的である。以下に引用する。

〈夢浮橋〉の例は，薫が横川の僧正に浮舟の隠所への案内を請うたのに，僧正が今日明日は支障が有り，来月になってこちらから御連絡させましょうと言ったのに対し,「そういう事ならばその時を待ちましょう」と言って帰った場合。「さらば」は対話者の主旨の了解を言う詞。離行の感動詞ではない

れ，「本来の言語生活は「さらばいとま申して」であった」（濱田 2013:55）ようである。発話直後に様々な行動を伴えたサラバが離行行動専用の形式として自立語化する背景には，このような慣用表現「暇申す」との共起が大きく関わっていたと考える。すなわち，サラバは中世後期「暇申す」と共起することで「別れ」の意味を表していたが，近世期になると「暇申す」と共起せず単独で「別れ」の意味を表すようになると考える。「暇申す」がサラバの機能変化にどのように関わるかについては，第 2 章 4.2 節で改めて述べる。

中世後期はサラバ全用例数に対して 2 つの特徴をともに満たす例の数が少ない。しかし，後件不明示のうち離行行動を満たす例について見ると，概ね高い比率を占めている。

表 4 では中世後期から近世前期にかけて，他ジャンルに比して用例が少ないジャンルのものも見られる（軍記 15 例中 0 例，キリシタン資料 11 例中 0 例，噺本 38 例中 9 例）。ジャンルごとに用例数が少ない理由を考える。まず，「軍記」に該当する『覚一本平家物語』は「応安四年（一三七一年）頃の言語事象を含む資料として扱うことができる」（吉田 2012:56）とされている。本章では 1333 年以降成立の作品を「中世後期」に含んでいるが，時期的にはまだ該当例が増加するに至らない段階の作品なのであろう。次に，キリシタン資料の用例数が少ないのは，原拠本の表現を踏襲する箇所があることによると考える(35)。

(35) a.人伝てに申すまじ事ぢゃと言うに因って：然らば〔faraba〕と言うて，清盛自ら中門の廊まで出でて（キリシタン資料，天草版平家物語，1-3，1592 年，大英図書館蔵 p.21，40-天平 1592_01003，13840）

b.「人傳(ひとづて)には申(まうす)まじき事(こと)なり」といふ間(あいだ)，さらばとて，入道(にうだう)みづから中門(ちうもん)の廊(らう)へ出(いで)られたり。（軍記，覚一本平家物語，2，西光被斬，1371 年頃，大系 32p.151）

噺本の場合は前述したが，全発話に対する離行行動の用例数がそもそも少ないため，2 つの特徴を満たす例も当然少なくなる。

これらを除く中世後期以降の資料では，いずれも後件不明示のサラバのうち離行行動の特徴も満たす例の用例数が 8 割を超えている（謡曲 10 例中 8 例(36)，虎明本狂言 6 例中 6 例(37)，浮世草子 12 例中 11 例(38)，浄瑠璃 53 例中 51 例(39)）。

(36) 地謡〽（略）暇(いとま)申して（ワキは立って橋がかりへ行く。シテは中央へ出る）さらばとて，勅使は都

に，帰りければ（再掲(31)）

(37) （太郎冠者）「（略）さらハかう参る，さらハ／＼（売手）「ようおじやつた（太郎冠者）「やれ／＼うれしや，いそひでもつてまいらう，参るほどにもどりついた「太こをわきにおきて，申／＼太郎くわじやがもどつて御ざる「もどつたか（果報者）「はりだこをもとめてきたか（再掲(8)）

(38) （若衆）「（略）明日此の若衆さまをおこしまして下され。さらばや」と，いとまごひして帰られぬ。（再掲(21)）

(39) あ，それならば死にませう父上さらばと言ひ捨てて兄が死骸（しがい）に寄りかゝり，（再掲(12)）

以上から，中世前期までは，後件不明示の特徴を満たす例であっても離行行動を伴う必要はない，むしろほとんど離行行動を伴わないことがわかる。一方で中世後期以降，後件不明示のサラバは離行行動を伴うことが一般化していると言える。

近世前期頃に後件不明示のサラバが離行行動との結びつきを強めていたことは，次例からも読み取れる。(40)からはその場を立ち去るならサラバと発話すること，(41)からはサラバと発話したらその場を立ち去ることが一般的になっていた可能性を示す。

(40) 両人是非（ぜひ）なく，へはかづきながら論はうらをかかれ，さらばともいはずに立ちかへる。（上方，浮世草子，好色一代男，6，1682 年，新全集 66p.189）

(41) 律儀（りちぎ）なやつで，唯今（ただいま）までいさみしが泪（なみだ）をこぼす。「さらば」といへども跡へも先へもゆかず。（上方，浮世草子，好色一代男，8，1682 年，新全集 66p.236）

以上，離行行動・後件不明示の特徴をともに満たすサラバの推移を見た。結果，該当例は中世後期までは少ないが，近世前期になると多くなることがわかった。また，後件不明示のサラバのうち離行行動の特徴を満たす例についても見た。結果，該当例は中世前期までは少ないが，中世後期以降概ね該当例が多くなることがわかった。

ここで日本語文法史の観点から，本章で扱った内容について少しく言及したい。ここまで，サラバが次第に“別れの挨拶語”の特徴を満たす例を増加させている，という歴史を見てきた。この結果には，接続表現としてのサラバが衰退することで相対的に“別れの挨拶語”の特徴を満たす例が増えているように見えるだけではないか，との反論が考えられる。岡

﨑（2010:84）はサ系列指示詞からソ系指示詞への交代が中世後期を転換期として起こったとしている。また，小林（1996:134）は「仮定条件の表現形式として中心的存在であった「動詞未然形＋バ」（略）が，中世，特に室町時代以降（略）その勢力を減じてきたであろうことは，想像に難くない」と述べている。指示詞サを含み，未然形バの構造を持つ接続表現サラバが，指示詞や条件表現の歴史に伴って，中世後期以降衰退していくのは当然であろう。よって，接続表現サラバが中世後期以降衰退し，結果的に“別れの挨拶語”サラバが残存するという見方自体は蓋然性が高い。

しかし，オサラバや繋辞後接の例が 17 世紀後半から 18 世紀初期頃に現れる等，指示詞や条件表現の史的推移とは別に，“別れの挨拶語”サラバが独自の変化を遂げていることもまた事実である。これは要するに，“別れの挨拶語”サラバが接続表現としての衰退の影響を被らずに維持されたということであり，それ以前から形式として固定化し，“別れの挨拶語”としての運用が一定の確立を見ていたことの現れであると考える。

４．おわりに

本章では，以下の特徴を指標として，“別れの挨拶語”サラバの歴史について記述した。

①発話の直後にその場を離れる行動を伴うこと

②後件が明示されないこと

調査の結果，①離行行動は中世後期まで少ないが近世前期に増加することがわかった。②後件不明示も中世後期まで少なく近世前期に増加した。両方の特徴を満たす例は近世前期に，後件不明示のうち離行行動の特徴を満たす例は中世後期以降増加することがわかった。中世後期以降サラバが後件不明示であれば離行行動を伴うことが一般化していたと言える。本章では 2 つの特徴に基づいて用例を観察することで，サラバが“別れの挨拶語”化する過程の一端を明らかにした。

序章でも触れたように，サラバの“別れの挨拶語”化の時期は先行論によって諸説ある。具体的には，中古で既に“別れの挨拶語”であったとする説（蜂谷 1983，前田 1985 等）と，中世後期以降“別れの挨拶語”化したとする説（濱田 2013，田島 2018b）とが併存している。しかし，サラバの“別れの挨拶語”化について論じるには，成立時期に関して統一の見解を与える必要がある。本章の調査結果から，サラバは中世後期から近世前期にかけて“別れの

挨拶語”としての特徴が顕著になり，近世前期にオサラバや繋辞後接例が現れることがわかった。よって，中世後期以降に“別れの挨拶語”化したと考える。

先行論では，指示詞サや未然形バが中世後期頃を境に衰退していくとされている（岡﨑 2010:84，小林 1996:134）。しかし，サラバは，構成要素に指示詞サを持ち，未然形バの形を有していながら，中世後期以降も衰退しない。むしろオサラバや繋辞後接例等の新しい形態を生み出し，“別れの挨拶語”化という独自の変化を遂げた。サラバの“別れの挨拶語”化は，指示詞や条件表現の変化の中で説明可能な現象ではなく，サラバという言語形式に生じた個別の変化を捉えて初めて説明できる変化であると言える。

とはいえ，サラバの構成要素の 1 つが指示詞サであり，サラバが未然形バの構造を持つ以上，指示詞や条件表現の歴史と無関係であったとも言い難い。続く第 2 章では，サラバが指示詞の機能をどのように失っていき，順接仮定条件とは異なる機能をどのように発達させていったのかに焦点を当てる。また，本章では論が複雑になることを恐れ，あまり触れなかったが，“別れの挨拶語”化の過程を精緻化するには「接続詞」の段階を想定する必要がある。第 2 章，第 3 章ではサラバの接続詞化の過程について論じていく。

使用テキスト

一部記号で示す。

◎…**国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2019.3, 中納言バージョン 2.4.2）** https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2019 年 11 月 3 日確認）〔平安時代編〕キー: 活用形 LIKE "未然形%"AND 後方共起: 語彙素読み="バ" ON 1 WORDS FROM キー，〔鎌倉時代編・室町時代編〕キー: (活用形 LIKE "未然形%" AND 語彙素読み="サル")AND 後方共起: 語彙素読み="バ" ON 1 WORDS FROM キー，〔室町時代編〕キー: 語彙素="さらば"　※サンプル ID，開始位置，permalink はバージョン 2023.03　※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

○…**『新編日本古典文学全集』小学館**：ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」http://japanknowledge.com/（2016 年 11 月～2017 年 12 月確認）キー「さらば」，範囲「古典本文」，サラバに該当しない例（例：夕去らば）は目視により除外。以下，同。

△…**『日本古典文学大系』岩波書店**：国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/（2017 年 9 月～12 月確認）キー「さらば」

□…**岡雅彦・武藤禎夫　編『噺本大系』東京堂出版**：国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」

http://base1.nijl.ac.jp/infolib/（2016 年 11 月～2017 年 12 月確認）キー「さらば」

●**中古【作り物語】**竹取物語，落窪物語，源氏物語…◎○，**【歌物語】**伊勢物語，大和物語，平中物語…◎○，**【日記】**蜻蛉日記，和泉式部日記，紫式部日記，更級日記，讃岐典侍日記…◎○，**【随筆】**枕草子…◎○，**【歴史物語】**栄花物語…○，

●**中世前期【軍記】**保元物語，平治物語…○，**【説話】**宇治拾遺物語，十訓抄…◎○，**【日記】**とはずがたり…◎○，**【随筆】**徒然草…◎○

●**中世後期【軍記】**覚一本平家物語…△，**【謡曲】**翁，脇能，修羅者，鬘物，四番目物，切能…○，**【キリシタン資料】**天草版平家物語，天草版伊曽保物語…◎大英図書館蔵本，**【狂言】**虎明本狂言（脇狂言之類）…◎大塚光信 編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版

●**近世前期【噺本】**戯言養気集，昨日は今日の物語（製版九行本），わらいくさ，醒睡笑，理屈物語，一休はなし，一休関東咄，狂哥咄，一休諸国物語，秋の夜の友，囃物語，杉楊子，新竹斎，篭耳…□，**【浮世草子】**好色敗毒散，野白内証鑑，浮世親仁形気，好色一代男，好色五人女，西鶴諸国ばなし，男色大鑑，万の文反古，世間胸算用，西鶴置土産，武道伝来記…○，**【浄瑠璃】**五十年忌歌念仏，淀鯉出世滝徳，冥途の飛脚，博多小女郎波枕，薩摩歌，丹波与作侍夜のこむろぶし，夕霧阿波鳴渡，山崎与次兵衛寿の門松，曾根崎心中，心中二枚絵草紙，卯月の潤色，心中重井筒，心中万年草，心中刃は氷の朔，今宮の心中，生玉心中，心中天の網島，心中宵庚申，堀川波鼓，大経師昔暦，鑓の権三重帷子，出世景清，用明天王職人鑑，けいせい反魂香，国性爺合戦，曾我会稽山，平家女護島，仮名手本忠臣蔵，双蝶蝶曲輪日記…○

第 2 章 サラバの接続詞化―指示性と場面展開機能に着目して―

1．はじめに

接続表現サラバは順接仮定条件の機能を持つ。前件内容の指示は構成要素である指示詞サ，後件との接続は同じく構成要素である接続助詞バの機能である。これら接続表現としての機能は“別れの挨拶語”化に伴って不明瞭化していくと考える。

第 1 章に引き続き，サラバの接続表現としての機能が不明瞭化したことの証左として，17 世紀後半以降出現するオサラバという形式や，繋辞が後接した形式に注目する。

(1) 嶋原の別も，吉原のおさらばといふ声も，同じ物うき朝（上方，浮世草子，諸艶大鑑，1684 年，田島 2018b:11）

(2) もうお目にかゝりますまい。さらばでござんす内衆もさらば／＼と，よそながら暇乞ひして，閨に入る。（上方，浄瑠璃，曾根崎心中，蜆川新地天満屋の場，1703 年，新全集 75p.34，51-近松 1703_11003，18670）

接頭辞オが前接する(1)，繋辞が後接する(2)は，サラバが「別れ」の意を表す形式として自立語化したものと認められる。オサラバや繋辞後接の例は，もとの内部要素である指示詞サ，接続助詞バそれぞれの機能が喪失したことを示すものと言える。よって，これらの形式の出現はサラバが“別れの挨拶語”として定着したことの証左となる。サラバは 17 世紀後半までに“別れの挨拶語”化したと考える。

また，中世末期のキリシタン資料『日葡辞書』のサラバの説明には，“別れの挨拶語”に相当する意の記載がある(3)。さらに，寛永 9（1632）年の奥書のある『臨済録抄』にも，サラバ（の反復形）が暇乞いの語であるとの説明がある(4)。これらからも，サラバが 17 世紀までに“別れの挨拶語”化したであろうことが窺える。

(3) Saraba.サラバ（さらば）では，平安でいらっしゃい，または，では，無事にお出でなさい〔御機嫌よう，さようなら〕.¶また，さあ，しっかり.¶また，そうであるからには.（キリシタン資料，（邦訳）日葡辞書，1603-1604 年，土井・森・長南編 1990:558）

(4) 又サラハ／＼イトマコイノ語也（抄物，臨済録抄，1632 年，駒澤大学文学部国文学研究室編 1975:332）

２．調査の観点

サラバは 17 世紀後半までにどのような変化を辿るのだろうか。用例を観察すると，“別れの挨拶語”とも言い難く，順接仮定条件を表すとも言い難い例が存在することがわかる。

(5) 能登殿前に進んだ郎等を憎い奴哉と有って，海へざんぶと蹴入れ，実光をば左の脇に挟み，弟をば右の脇に挟み，一締め締めて，いざ然らば〔ſaraba〕己等死出の山の供せいと有って，生年二十六で遂に海に入らせられた．（キリシタン資料，天草版平家物語，4-18，1592 年，大英図書館蔵 p.347，40-天平 1592_04019，35090）

(5)のサラバが“別れの挨拶語”でないことは明らかである。一方で，指示詞サの明瞭な指示対象が存在しない点，それに伴い前件・後件を順接仮定条件の関係で接続していない点で，順接仮定条件の接続表現サラバとも一線を画する。これは，サラバが「指示詞サ＋動詞アリ未然形＋接続助詞バ」と分析でき，それぞれの構成要素の機能が明瞭だった段階から，サラバが一語化し，それぞれの構成要素が語の一部となって，もとの機能が不明瞭になった段階へと変化したものであろう。これは接続表現サラバが“別れの挨拶語”化する過渡的な段階であると考える。本章では，序章で示したように，「サ＋アラ＋バ」と分析できる段階を「接続表現サラバ」，機能的に一語化した段階を「接続詞サラバ」と呼ぶ。接続詞サラバの例が存在することから，あるサラバの例が順接仮定条件を表していなかったとしても，それが必ず“別れの挨拶語”と見なせるわけではない，ということになる。しかし，(5)のような例は指示詞の機能等が不明瞭化している点で“別れの挨拶語”サラバと共通する。そのため，接続表現サラバの“別れの挨拶語”化の過程を記述するうえで，接続詞サラバの段階を認めておくことは重要である。

接続詞サラバが順接仮定条件を表さないとすると，どのような機能を有していると言えるか。(5)ではそれまでの状況を区切り，「海に入」るという新たな状況を起こす契機として働いているように思う。このように状況を区切り，場面を展開する機能を，本章では「場面展開機能」と呼ぶ。“別れの挨拶語”サラバも状況を区切り，立ち去ることで新たな場面を展開させるという点で場面展開機能を持つと言える。水谷（1982:23）も「別れの言

語行動は，それまでの行動への区切りを示す役割」を担い，「その後の行動への働きかけの機能を持つと考えるべきではないか」と述べている。よって，サラバは変遷の過程，特に接続詞化の過程で場面展開機能を発達させてきたと考える。

サラバの変化過程についてまとめると，次のようになる。

表1）サラバの変化過程

段階	言語形式	指示性	中心的な機能
分析的（サ＋アラ＋バ）な段階	接続表現サラバ	明瞭	順接仮定条件
機能的に一語化した段階	接続詞サラバ	不明瞭	場面展開機能
それ自体で「別れ」の意を表す段階	“別れの挨拶語”サラバ	不明瞭	場面展開機能

接続表現サラバは直接“別れの挨拶語”化したのではなく，接続詞サラバの段階を経て“別れの挨拶語”化したと見ることができる。この見方では接続詞化の過程という観点から，サラバの“別れの挨拶語”化の史的展開をより精密に記述することが可能となる。それを踏まえ本章では，次の特徴をもとに用例を観察する。

①サラバの構成要素である指示詞サの指示性が不明瞭であること

②サラバが場面展開機能を有すること

次節以降，サラバが出現し始める中古から，サラバが“別れの挨拶語”化すると考えられる 17 世紀以前を中心に，発話の例を対象として調査する[1]。

３．指示性の不明瞭化

本節ではサラバの構成要素サが明瞭な指示対象を持つか否かという観点で，サラバを分類する。サが明瞭な指示対象を持つ例を「指示性明瞭」，明瞭な指示対象を持たない例を「指示性不明瞭」とする[2]。後者には，指示対象となり得る言語的文脈も動作・様子も見出

---

[1] 第 1 章と同様，発話・心内表現の末尾が地の文に推移する例は調査対象から除外する。また，『天草版平家物語』では，各章冒頭の右馬の允の台詞に対する喜一検校の返答までを「発話」，以降の喜一検校の語り部分を「地の文」とする。

[2] 次のように，状況が詳細に描かれず，指示対象が特定不能の例は調査対象から除外する。

(ア) むかし，つれなき人をいかでと思ひわたりければ，あはれとや思ひけむ，（つれなき人）「さら

せない例(6)，直前の自身の発話文末が断定的表現の例(7)，サラバ直前の自身の発話が相手の発話内容を受ける例(8)等，順接仮定条件不成立の例が該当する。

(6)　（入道）「あはれ，人間の宝には，子に過ぎたるものこそなかりけれ。子ならざらん者，誰かはかく身に替へて助くべき。生々世々にもこの恩忘るまじきぞよ」とて，手を合せ喜びたまふ。義朝，心中に，「無慙の事かな。只今斬られたまはん事をも知りたまはず，かく宣ふよ」と思ひければ，涙のすすむを，さらぬ体にもてなして，（義朝）「さらば，正清，御輿進らせよ」（軍記，保元物語，中，為義最期の事，13 世紀前半，新全集 41p.340，30-保元 1223_02013，11120）

(7)　（道長）「明後日仏にいとよき日なり。さらば御堂かき払はせ，老法師の居所もかき払はせはべらん。（略）」（歴史物語，栄花物語，16，もとのしづく，11 世紀前期，新全集 32p.236）

(8)　（津の国）「（略）都へ御ざらハ同道いたさう（播磨）「それは日本一の事で御ざる，いざさらハ同道いたさう（狂言，虎明本狂言，かくすい，1642 年写，翻刻注解上 p.31，40-虎明 1642_01007，3460）

ここで，「指示性不明瞭」という術語について付言する。“別れの挨拶語”サラバは一見指示性がないように思える。しかし，出会った人々が何らかの相互行為を交わした後でなければ別れの挨拶はできない。“別れの挨拶語”サラバには先行する相互行為が必ず存在するということである。接続表現サラバが文脈や動作を具体的に指示するのに対し，“別れの挨拶語”サラバや接続詞サラバはそれまでの状況を一括し，漠然と指示すると考える。このように考えると，“別れの挨拶語”サラバは「指示性皆無」とは言い難く，「指示性不明瞭」と呼ぶのが適切である。指示性不明瞭の挙例の中には，サラバに先行する相互行為があり，一見指示性があるような例も見られるが，順接仮定条件が不成立の例は全て指示性不明瞭と判断する。

サラバの指示性の推移をまとめる（表 2）。調査資料は表 2 に示す通りである（略称を用いた。正式な作品名は表 3 や本章末尾を参照されたい）。

ば，あす，ものごしにても」といへりけるを，かぎりなくうれしく，またうたがはしかりければ，（歌物語，伊勢物語，90，10 世紀半ば，新全集 12p.194，20-伊勢 0920_00001，189820）

表2）サラバの指示性の推移

時期	中古												中世前期							中世後期			計
作品	竹取	平中	大和	蜻蛉	落窪	枕草	源氏	和泉	紫式	更級	栄花	讃岐	保元	平治	宇治	建礼	十訓	とは	徒然	覚平	天平	虎明	
明瞭	3	8	2	11	14	11	51	1	1	1	8	1	11	7	34	1	1	4	2	50	37	22	281
不明瞭							1				4		4	1	6		1	2		8	6	48	81

※『虎明本狂言』は「脇狂言之類」のみ集計。表3以降も同様。

表 2 から，時代を通じて指示性明瞭の例が中心であることがわかった。先行する言語文脈を指示する例(9)(10)や直接知覚できる動作・様子を指示する例(11)等がある。

(9) （道長）「和歌ひとつづつ仕(つか)うまつれ。さらば許さむ」（日記，紫式部日記，11 世紀初期，新全集 26p.166，20-紫式 1010_00001，150420）

(10) （果報者）「（略）是に何やらかひてあるが，なんぢハよミやうをならふたか（太郎冠者）「中ノ＼ならふてまいつた（果報者）「さらハようできかせい（狂言，虎明本狂言，鎧，1642 年写，翻刻注解上 p.66，40-虎明 1642_01014，11070）

(11) （玄光）「いざ，さらば，長田め，討たん」とて，常居(つねゐ)の方(かた)へ走り入りたれば，長田は逃げて失せにけり。「さらば，討(う)ち死(じ)にせよや」とて，（軍記，平治物語，下，義朝内海下向の事付けたり忠致心替りの事，13 世紀初期，新全集 41p.526，30-平治 1246_03002，23840）

指示性不明瞭の例は中古から僅かに見られる。(12)は中将が妹の尼君に琴の演奏を促す場面である。

(12) （母尼）「いで，その琴(きん)の琴弾(ことひ)きたまへ。横笛(よこぶえ)は，月にはいとをかしきものぞかし。いづら，くそたち，琴(こと)とりてまゐれ」と言ふに，それななりと推(お)しはかりに聞けど，いかなる所に，かかる人，いかで籠(こも)りゐたらむ，定めなき世ぞ，これにつけてあはれなる。盤渉調(ばんしきでう)をいとをかしう吹きて，（中将）「いづら。さらば」とのたまふ。（作り物語，源氏物語，手習，11 世紀初期，新全集 25p.319，20-源氏 1010_00053，145920）

(12)では，サラバの直前にサの指示する内容は見当たらない。「それななり…あはれなる」は中将が母尼について「どうしてこのような老婆が生き残っていてこんな所にこもり暮し

ているのだろう」（新全集 25p.319）と感じている記述であり，サの指示対象とは言い難い。

池上（1947:7）は中古の指示詞サを含む表現について「一往その語源的な文字通りの意味が強い時期にあると見られる」,「源氏などの「さりとも，さらば」などやうの語もすべて十分の意味ありと見たい」と述べる。「文字通りの意味」「十分の意味」とはサが指示性明瞭であることを意味すると解釈できる。しかし，(12)のサラバは指示性不明瞭であり，池上の言の反例となる。

中世になると，指示性不明瞭の例が一定数見られるようになる。(13)は乙若が義朝に自分の首を斬るよう促す場面である。

(13) （乙若）「（略）今生（こんじやう）に思ひ置く事とては，母御前の御行く末なり。されども，後（おく）れ先立（さきだ）つ慣（な）らひ，弓矢取る者の子供なれば，力及ばぬ事どもなり。さらば，はや，疾（と）う疾（と）う仕（つかまつ）れ。（略）」とて （軍記，保元物語，下，義朝幼少の弟悉く失はるる事，13 世紀前半，新全集 41p.362，30-保元 1223_03001，48570）

(13)はサラバに先行する文が断定の助動詞ナリで終止する。自身が述べた断定的な内容を指示するならば確定条件の形式が続くのが自然であり，サラバの順接仮定条件はここでは成立しないと考える。仮定条件不成立という点でそれまでのサラバとは一線を画する。

一方で，(13)はサラバが「弓矢取る者の子供なれば，力及ばぬ事どもなり」という一般論を仮定している，という見方もできる。その場合サは前件の一般論を指示し，順接仮定条件が成立することになる。ただし，(13)が順接仮定条件として解釈できるとしても，一般論によって自身の個別具体的な状況について断定的に述べる表現法そのものはレトリカルであり，本章の趣旨に大きく影響するものではないと考える。

指示性不明瞭の用例数は，中世末期『虎明本狂言』に至ると，指示性明瞭を上回る。

(14) （太郎冠者）「（略）代物ハどれて渡しまらせうぞ（売手）「三条の大極やでうけとりまらせう（太郎冠者）「それは私の知人でござる，さらハそれでわたしまらせう（狂言，虎明本狂言，目近籠骨，1642 年写，翻刻注解上 p.90，40-虎明 1642_01018，22640）

(14)はサラバに先行する発話が前の相手の発言を受けており，指示性不明瞭と判断できる。

仮定条件では解釈しづらい点，(13)と同様，順接仮定条件のサラバとは異質である。

(13)(14)は前件を仮定した場合に後件としてどのようなことが起こるのかを述べるというよりも，自身や相手の発言を受けて，それを仮定することなく，次の行為（(13) では相手の行為，(14)では自身の行為）を提示することに主眼が置かれているように思う。

以上，サラバの構成要素である指示詞サの指示性が明瞭か否かを観察した。調査の結果，中古で僅かであった指示性不明瞭の例は，中世前期以降一定数見られるようになり，中世末期『虎明本狂言』に至ってまとまって見られるようになることがわかった。

４．場面展開機能の発達

４．１　先行論の確認，指標の設定

場面展開機能の発達を論じるにあたり，先行論を確認しておく。清瀬（1955），小林（1996）は中世末期のサラバについて記述する。清瀬（1955）は，『天草版平家物語』のサラバは「接合よりも転換の役割を演じ」（pp.192-193），また，「誘いかけ，うながし，手をさしのべる心意」（p.197）があり，「相手の注意を喚起し，行動をうながすきっかけ」（p.197）となると述べる。小林（1996:266）は，狂言台本のサラバには「現代語の「ソレデハ」「デハ」にあたる，場面的に転換する一つの契機を示す」用法があり，これを「契機的用法」と称する。「場面展開機能」，「転換の役割」，「契機的用法」が厳密に同一視できるかは慎重になる必要があるが，少なくとも中世後期頃のサラバが「転換」「展開」という言葉に象徴される特徴を持っていたことは認められるであろう。しかし，これらの先行論は具体的指標に基づく記述ではない。また，中世末期の様相を記述するものであり発達の過程が把握できない。

そこで本章では，後続する意志・命令表現，イザ・イデ等の感動詞（以下，イザ類）という具体的指標を設定する。意志・命令表現やイザ類は場面を展開することを明示的に示す表現であり，これらと共起するサラバに着目することで，場面展開機能の発達過程を調査し得ると考える。

４．２　意志・命令表現との共起

意志・命令表現はサラバの後続表現の中でも，場面の展開を明示的に表す表現であると考える。それは，疑問・推量・推定表現等が事態に対する話者の認識を表すのに対し，意志・命令表現は行為の実行に関わる意味を表すからである。自ら行為を実行したり相手に

行為を実行させたりすることは場面展開の契機となり得る。よって，場面展開時には意志・命令表現が多く使用されることが予想される。(13)(14)がその一例である。以上から，意志・命令表現はサラバの場面展開機能発達の過程を辿る指標として有効であると考える。

ただし，本研究は，意志・命令表現を後続させていれば必ず場面展開機能を有する，と主張したいわけではない。あくまで，場面展開機能獲得の過程を観察し得る指標として，意志・命令表現に着目するに過ぎない。実際，順接仮定条件を表しつつ，意志・命令表現を後続させる例は見られる(15)(16)。

(15) 商人，女に問うて曰く，「（略）具しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば，帰るべきやうなし」といへば，この女ども，「さらば，いざさせ給へ」といひて，前に立ちて導きて行く。（説話，宇治拾遺物語，6-9，13 世紀前半，新全集 50p.217，30-宇治 1220_06009，3810）

(16) （内侍）「仰せごとに，かぐや姫のかたち，優におはすなり。よく見て参るべきよし，のたまはせつるになむ，参りつる」といへば，（嫗）「さらば，かく申しはべらむ」といひて，入りぬ。（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.57，20-竹取 0900_00001，128840）

(15)(16)のサラバは意志・命令表現と共起しているが，相手の発話内容を仮定して後続表現を導いていると解釈することが可能である。意志・命令表現と共起することによって場面を展開させているように見えるが，それは意志・命令表現という環境条件が整っているために生じる解釈であり，サラバそれ自体にはまだ場面展開機能が備わっていない段階であると考える（詳細は第 3 章で述べる）。このように，意志・命令表現と共起しているからといって必ずしも場面展開機能を持つと断言するわけではない。しかし，場面を展開させ得る代表的な表現として意志・命令表現との共起に着目することは，用例観察において有用であると考える。

調査結果の確認に先立ち，サラバの後続表現に関する研究に触れておく。楊（2016）は中古から中世前期のサラバの後続表現を意志・命令・疑問・推定表現に分類する。楊（2016:77）によれば，中古和文のサラバの後続表現は「疑問表現が続く例がやや少なく，意志表現，命令表現，推定表現が続く例が幅広く見られ」るという（285 例中意志 97 例 34.0%，命令 96 例 33.7%，疑問 26 例 9.1%，推定 66 例 23.2%）。さらに，中世前期になると

「和文調の強い作品では，「さらば」の用法が大きく偏るようになり，意志表現と命令表現が続く例が中心とな」（p.77）る（201 例中意志 61 例 29.9%，命令 110 例 54.7%，疑問 15 例 7.5%，推定 15 例 7.5%）。また，小林（1996:259-282）は『虎明本狂言』と『虎寛本狂言』における接続表現の後続表現を，推量・意志（意向・勧誘）・希望・命令・疑問・断定・平叙に分類する。それによれば，『虎明本狂言』におけるサラバの後続表現 349 例中意志 178 例 51.0%，命令 155 例 44.4%と，意志・命令表現に偏向していることがわかる。

以上，先行論によれば，中古におけるサラバの後続表現は意志・命令・推定表現等幅広い後続表現を取るが，中世以降，和文調の強い作品や狂言等を中心に意志・命令表現に偏向することがわかった。しかし，楊（2016）・小林（1996）の調査では，『虎明本狂言』を除き中世後期頃の様相が不明である。また，楊（2016）では完了ヌの承諾表現(17) 等がどのように分類されるのかが記されておらず，分類方法についても検討が必要である。

(17) （薫）「明後日（あさて）ばかり車奉らん。その旅の所尋ねおきたまへ。ゆめ，をこがましうひがわざすまじくを」と，ほほ笑（ゑ）みてのたまへば，わづらはしく，いかに思すことならんと思へど，奥（あう）なくあはあはしからぬ御心ざまなれば，おのづからわが御ためにも，人聞きなどはつつみたまふらむと思ひて，（弁の尼）「さらばうけたまはりぬ。（略）」と聞こゆ。（作り物語，源氏物語，東屋，11 世紀初期，新全集 25p.87，20-源氏 1010_00050，256890）

以上を踏まえ，サラバの後続表現を調査した。調査資料は表 3 に示す通りである[3]。

---

[3] (イ)のような後件が続かない例は調査対象外とする。また，表 3 における「打消」とは，(ウ)のように「先行の事柄に対し，後続の事柄が反対・対立の関係にあることを示す（逆接の確定条件）」（日本国語大辞典「さら-ば」）と説明される例を指す。打消意志ジ等は推量に含む。「その他」は後件に「物を」という表現が来る例(エ)，「省略」は後件の述語句末が途中で省略されている例(オ)を指す。

(イ) 女がたに，「なほ舟にてを」とあれば，さらばとて，みな乗りて，（日記，蜻蛉日記，中，10 世紀後半，新全集 13p.261，20-蜻蛉 0974_00007，78720）

(ウ) （新三位中将）「（略）されば那智（なち）の奥（おき）にて身（み）をなげてましますごさんなれ。さらばひきぐして一所（しよ）にも沈み給（たま）はで，ところ〻にふさん事（こと）こそかなしけれ。（略）」ととひ給へば，（軍記，覚一本平家物語，10，三日平氏，1371 年頃，大系 33p.285） **打消表現**

(エ) 梶原この言葉に腹が居て，妬う然らば〔faraba〕梶原も盗まう事で有った物をとどっと笑うて退いたと申す．（キリシタン資料，天草版平家物語，4-2，1592 年，大英図書館蔵 p.233，40-天平

表3）サラバの後続表現の歴史的推移

時代	作品	意志	命令	疑問	推量	推定	断定	完了	願望	打消	その他	省略	計	意志命令率
中古	竹取物語	3											3	100%
	大和物語	1											1	100%
	平中物語	4	1	1		1							7	57.1%
	蜻蛉日記	1	5		1							4	11	54.5%
	落窪物語	4	5	1	1		1					1	13	69.2%
	枕草子	2	5	1	2							1	11	63.6%
	源氏物語	8	14		7	8		1	1			15	54	40.7%
	和泉式部日記	1											1	100%
	紫式部日記	1											1	100%
	堤中納言物語	2	3									5	10	50.0%
	大鏡	1	2		1	1	1						6	50.0%
	讃岐典侍日記											2	2	0.0%
中世前期	宇治拾遺物語	14	19		2		2					1	38	86.8%
	建礼門院右京大夫集			1									1	0.0%
	十訓抄	1	2	1									4	75.0%
	とはずがたり		1	1								3	5	20.0%
	徒然草		2										2	100%
中世後期	覚一本平家物語	9	29	5	1			1		1	1	2	49	77.6%
	天草版平家物語	10	19	4			2				1		36	80.6%
	天草版伊曽保物語	3	4										7	100%
	虎明本狂言	30					5		2				57	87.7%
計		95	131	15	15	10	11	2	3	1	2	34	319	70.8%

作品に占める後続表現の割合が30.1%~の箇所に濃い網掛け，15.1%~の箇所に薄い網掛けを施す。

表 3 から，時代を通じて意志・命令表現がサラバの後続表現の多くを占めることがわかる。中古に比べ中世の方が意志・命令表現を後続表現に取る割合がやや高くなっている。

時代ごとに用例を確認していこう。中古は作品による差も見られるが，意志・命令表現が概ね 5〜6 割程度で推移する。例を示す(18)(19)。

1592_04002，20110）**その他**

(オ)　（少将）「誰（た）がともなくて，さし置かせて来たまへよ。さて，今日（けふ）のありさまの見せたまへよ。さらばまたまたも」（作り物語，堤中納言物語，買合，11 世紀半ば，新全集 17p.453，20-堤中 1055_00001，170860）**省略表現**

(18) （道長）「和歌ひとつづつ仕(つか)うまつれ。さらば許さむ」（再掲(9)）**意志表現**

(19) （薫）「いでさらば，伝へはてさせたまへかし。（略）」とのたまひても，また涙ぐみぬ。（作り物語，源氏物語，東屋，11 世紀初期，新全集 25p.53，20-源氏 1010_00050，133260）**命令表現**

また，楊（2016:77）が述べるように，中古のサラバは意志・命令表現以外にも疑問(20)・推量(21)・推定表現(22)等幅広い後続表現を取る。

(20) （女ども）「夜(よ)ふけにければ，局もなくてなむ，よるべもなくてある」といへば，（男）「さらば，ここにやは宿(やど)りたまはぬ」（歌物語，平中物語，7，10 世紀半ば，新全集 12p.465，20-平中 0960_00001，41750）**疑問表現**

(21) （道綱母）「夜数(よかず)にはしもせじとす」と忍(しの)びやかに言ふを聞き，（兼家）「さらば，いとかひなからむ。異夜(ことよ)はありと，かならず今宵(こよひ)は」とあり。（日記，蜻蛉日記，下，10 世紀後半，新全集 13p.292，20-蜻蛉 0974_00009，80700）**推量表現**

(22) （左馬頭は女と口論の末，指を噛まれる）（左馬頭）『かかる傷さへつきぬれば，いよいよまじらひをすべきにもあらず。辱(はづかし)めたまふめる官位(つかさくらゐ)，いとどしく何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひおどして，（左馬頭）『さらば，今日(けふ)こそは限りなめれ』と，（作り物語，源氏物語，帚木，11 世紀初期，新全集 20p.74，20-源氏 1010_00002，78580）**推定表現**

中世前期以降になると，中古同様作品による差は見られるものの，意志・命令表現が全体の概ね 7 割以上を占めるようになる。中古では意志・命令表現以外にも幅広い後続表現を取っていたが，中世になると後続表現が意志・命令表現に比較的偏向するようになる。中世の例を示す(23)(24)。

(23) 商人，女に問うて曰(いは)く，「（略）具(ぐ)しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば，帰るべきやうなし」といへば，この女ども，「さらば，いざさせ給へ」といひて，前に立ちて導きて行く。（再掲(15)）**命令表現**

(24) （太郎冠者）「（略）代物ハどれて渡しまらせうぞ（売手）「三条の大極やでうけとりまらせう（太郎冠者）「それは私の知人でござる，さらハそれでわたしまら

せう（再掲(14)）**意志表現**

中世後期は，別れの慣用表現「暇申す」にサラバが続く例(25)が多く見られるようになる時期でもある（濱田 2013:54-55，田島 2018b:9-10）。

(25) 地謡〽（略）暇申して（ワキは立って橋がかりへ行く。シテは中央へ出る）さらばとて，勅使は都に，帰りければ（謡曲，鬘物，楊貴妃，15 世紀頃，新全集 58p.360）

濱田（2013:54-55）は，「暇申す」とサラバの共起例が「さらばいとま申して」の形で使われ始め(26)，中世後期の謡曲等で「いとま申してさらばとて」の形で使用されるようになったと指摘する(27)。

(26) さらばいとま申てとて馬にうち乗り……西をさいてぞあゆませ給ふ（軍記，覚一本平家物語，7，忠度都落，1371 年頃，濱田 2013:54）

(27) 暇申てさらばとて，中門へさして出させ給ふ（室町小説，西行，中世後期，濱田 2013:55）

サラバは中世後期「暇申す」と共起することで「別れ」の意味を表していたが，近世期になると「暇申す」と共起せず単独で「別れ」の意味を表すようになると考える。「暇申す」という「別れ」の意を表す表現との共起が，サラバの“別れの挨拶語”化の要因となったという主張は妥当であろう。しかし，なぜサラバが「暇申す」と共起するようになったのかについては説明を要する。本研究では，これがサラバと意志表現との共起に関係があると見る。「暇申す」はいわば「離行」の意志を示す表現である。その点で，「さらばいとま申して」の形はサラバが意志表現を後続させる場合と類似している。サラバが「暇申す」と多く共起するようになった背景には，意志・命令表現等，場面展開を表す表現と共起しやすくなっていたことがあったと言えよう。

以上，サラバの後続表現を調査した。その結果，意志・命令表現と共起するサラバの例は中古から高い割合を占めるが，中世前期以降その割合がより高くなることがわかった。また，サラバが「暇申す」と共起できるようになった背景には，サラバが意志表現等と共起しやすくなっていたことが背景にあったと考えた。

４．３　イザ類との共起

本節では場面展開機能の発達過程を辿る指標としてイザ類（イザ・イデ）に着目する。以下，イザ類とサラバの共起例を「イザサラバ類」と呼ぶ。

イザ類は意志・命令表現と多く共起することから場面展開機能を有していると考える。また，森田（1997:198）は「「サア」と自分が積極的に行動を思い立つ気持ちは，対者意識に立てば人を誘うことばとなる。（略）「いざ」はそのようなときに発する語であった」と述べる。さらに，「「いざ」と似た語に「いで（乞）」があり，「サア？」と自己に対する疑いをこめた問いかけの気持ちを表した。これはさらに自己の意志を促すはたらきへ広がり，対者意識に立って他者に何らかの行為・行動を促すことばへと転化していった」（pp.198-199）と述べる。

これらは上代・中古から用例が観察できる(28)(29)。

(28) 夕星（ゆふつづ）の夕（ゆふへ）になればいざ寝よと〔伊射祢余登〕（和歌集，万葉集，5，雑歌，904 番歌，8 世紀後半，新全集 7p.93，10-万葉 0759_00005，50480）**命令表現**

(29) 夜中（よなか）ばかりに，廊に出でて人呼べば，（大納言）「下（お）るるか。いで，送らむ」とのたまへば，（随筆，枕草子，大納言殿まゐりたまひて，11 世紀初期，新全集 18p.447，20-枕草 1001_00293，6040）**意志表現**

中世末期のイザ類・イザサラバ類の様相も確認しよう。まず，『日葡辞書』『日本大文典』の記述を確認する(30)～(33)。

(30) IZa. イザ（いざ）勧誘の感動詞. すなわち，‘さあ’．例，Iza ite qicŏ.（いざ行て聞かう）（略）（キリシタン資料，（邦訳）日葡辞書，1603-1604 年，土井・森・長南編 1990:353）

(31) Ide．イデ（いで）感動詞．さあ，あるいは，さて．例，ide mono mixô（いでもの見せう）（略）（同，p.331）

(32) Izasaraba. イザサラバ（いざさらば）では，さあ. 勧誘の感動詞.（同，p.353）

(33) 慫慂〇De（で）。Ideide（いでいで）。Sa（さ）。例へば，　Sà yomŏ（さあ読まう）。} 単数に用ゐる。Ideide（いでいで）。Iza（いざ）。Izaya（いざや）。Iza saraba（いざさらば）。} 複数と単数に用ゐる。（キリシタン資料，ロドリゲス日本大文典，1，

副詞に就いて，1604-1608 年，土井訳 1955:293）

中世末期のイザサラバ類は勧誘等の意を表す形式として，イザ類と同類のものとして捉えられていたことが窺い知れる。また，小林（1996:267）は『虎明本狂言』のイザサラバを「契機的用法であることを明示するもの」とする。前述したように「契機的用法」とは場面展開機能に相当する用法であると考えられるから，中世末期のイザサラバはイザ類と同様，場面展開機能を有していたものと推測できる。

サラバが場面展開機能を持つかどうかを意味分析のみで判断するのは困難である。それに対して，イザ類という形式的な指標を用いることは，場面展開機能の発達過程を客観的に示すものとして有効であると考える。

以上を踏まえイザサラバ類の推移を見る。調査対象は新全集所収作品（中古・中世）及び『覚一本平家物語』『天草版平家物語』『天草版伊曽保物語』『虎明本狂言（脇狂言之類)』の発話文である。うちイザサラバ類が見られた作品を表 4 に示す。

表4）イザサラバ類の歴史的推移

時代	作品	イザサラバ	イデサラバ
中古	源氏物語		1
中世前期	平治物語	1	
中世後期	覚一本平家物語	1	4
	太平記	4	6
	ものくさ太郎		1
	謡曲集	4	5
	天草版平家物語	3	
	天草版伊曽保物語	2	
	虎明本狂言	18	3

表 4 から，中古・中世前期はイザサラバ類(34)(35)がかなり少ないことがわかる[4]。

[4] 発話以外では手紙の例が 1 例見える。

(エ) 御返りに，いざ，さらば渡らむ。ゆゆしげなる人は。などぞ聞こえたまひける。（作り物語，宇津保物語，国譲上，10 世紀後半，新全集 16p.22）

(34) （薫）「いでさらば，伝へはてさせたまへかし。（略）」とのたまひても，また涙ぐみぬ。（再掲(19)）

(35) （玄光）「いざ，さらば，長田め，討たん」とて，常居(つねゐ)の方(かた)へ走り入りたれば，長田は逃げて失せにけり。「さらば，討(う)ち死(じ)にせよや」とて（再掲(11)）

中世後期にはイザサラバ類がまとまって見られるようになる(36)(37)。

(36) （孫一）「がてんがいたほどに，いざさらハお供申ていかう（孫二）「いそいでつれまらしてまいらふ（孫一）「いざさらハござれ（狂言，虎明本狂言，薬水，1642 年写，翻刻注解上 p.108，40-虎明 1642_01021，17270，17550）

(37) 文覚(もんがく)は「（略）いでさらばふみをやらう」どいひければ（軍記，覚一本平家物語，5，文覚被流，1371 年頃，大系 32p.361）

サラバもイザ類も中古に既に存在するにも拘わらず，イザサラバ類が中世後期まで顕著に見出せないのはなぜか。前述したように，中古のサラバは意志・命令表現が一定の割合を占めるものの，その他幅広い後続表現を取る。一方，中世前期以降意志・命令表現の割合がより高くなる。これをサラバの場面展開機能の発達の反映と考えると，中世後期のイザサラバ類の増加も理解しやすい。つまり，イザサラバ類はサラバの場面展開機能がこの期に最も顕著になったことの表れとして，場面展開機能を担う形式同士が選好する環境（意志・命令表現等）に共起して生まれたものと考える。試みに，表 4 の例の後続表現を調査してみると，イザサラバ 33 例中意志表現 25 例，命令表現 7 例，省略形 1 例，イデサラバ 20 例中意志表現 15 例，命令表現 2 例，疑問表現 2 例，省略形 1 例であった。イザサラバ類は意志・命令表現と共起しやすいことがわかる。イザサラバ類の少ない中世前期までは，サラバがイザ類と共起するのに十分なほど場面展開機能が発達していない段階ということであろう。

以上，意志・命令表現とサラバの共起が中世前期以降増加し，イザサラバ類が中世後期に増加することから，場面展開機能は中世前期から発達し始め，中世後期にその特徴が顕著になったと考える。

４．４　指示性の不明瞭化との関係及び統語的条件

接続表現サラバは順接仮定条件を表す。これは未然形バという構造と指示詞サ・接続助詞バの機能に支えられた特徴であり，いずれの要素が欠けても成立しない。本章の調査から，サラバのサの指示性は中世以降不明瞭化していくことがわかった。これは順接仮定条件成立の要件が満たされなくなっていくことを意味する。

サラバは指示性が不明瞭になりながらも，その形式自体は維持され続ける。これはサラバが場面展開機能を担う形式へと変化していった結果であろう。指示性不明瞭の例の後続表現を調べると，概ね意志・命令表現に偏る。よって，指示性の不明瞭化と場面展開機能の発達は連動していると考える。

ここで指示詞の歴史的変化とサラバの関わりについて考える。岡﨑（2010:84）は指示副詞について「中世後期を転換期として，カク・サからコ・ソ・アへと」変化すると述べる。構成要素にサを含む接続表現サラバも，この変化に伴ってソを含む形式に置き換わり，次第に衰退していくことが予想される。しかし，中世後期では指示性不明瞭のサラバは維持され，17 世紀後半までに“別れの挨拶語”化する。第 1 章でも述べたように，サラバは指示詞の歴史的変化とは離れたところで独自に変化したということになる[5]。前述の通り，サラバは順接仮定条件という指示詞サの機能に支えられた接続表現から，場面展開機能を担う接続詞へと変化していたと考える。接続詞サラバでは指示詞サは語の一部となって，もとの機能を失っていたため，指示詞の歴史的変化の影響を受けなかったのだろう。

場面展開機能発達の理由として，サラバと意志・命令表現との共起例が中古から一定数見られることの他，サラバの発話冒頭での使用が多いことも挙げられる(38)(39)。

(38) 商人，女に問うて曰(いは)く「(略) 具(ぐ)しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば，帰るべきやうなし」といへば，この女ども，「さらば，いざさせ給へ」といひて，前に立ちて導きて行く。(再掲(15))

(39) （内侍）「仰(おほ)せごとに，かぐや姫のかたち，優(いう)におはすなり。よく見て参るべきよし，のたまはせつるになむ，参りつる」といへば，（嫗）「さらば，かく申しは

[5] 一方で，接続詞サラバは近世中期頃までに衰退し，ソレナラバ等に交替するようである。小林（1996）では，『虎明本狂言』（1642 年写）におけるサラバ多用から『虎寛本狂言』（1792 年写）におけるソレナラバ多用へという交替の様子が報告されている。

べらむ」といひて，入りぬ。（再掲(16)）

小野寺（2014）は発話冒頭及び発話末という位置について「会話の中で，話者達がさまざまな会話運営上の意図，（略）「話題を換える」「会話を始める」などの行為を，いろいろな語用論的要素で表す場所」（p.16）とする。特に発話冒頭は「会話の中で，これから起こる行為を知らせる」（p.20）場所であると位置付ける。サラバが，コミュニケーションの開始を図り，後に場の状況が展開することを示す標識として機能するようになったのは，発話冒頭に多く出現するという統語的条件にもよると考える。

５．おわりに

本章では以下の観点から接続表現サラバの接続詞化の過程を調査した。

①サラバの構成要素である指示詞サの指示性が不明瞭であること

②サラバが場面展開機能を有すること

結果，中古で僅かだった指示性不明瞭の例は中世前期以降徐々に増加し，中世末期にまとまって見出せることがわかった。また，意志・命令表現との共起例の割合が中世前期以降より高まり，イザ類との共起例が中世後期にまとまって見られることから，場面展開機能は中世前期から中世後期にかけて発達したことがわかった。サラバが 17 世紀後半までに“別れの挨拶語”化することを考えると，指示性の不明瞭化及び場面展開機能の発達が中世末期に最も顕著になるのは，時期的な整合性も取れており蓋然性が高い。本章では，指示性不明瞭や場面展開機能の特徴が最も顕著になる中世後期にサラバは接続詞化を果たしたと考える。

本章の調査結果はサラバの変化過程を把握するものである一方，指示詞サや未然形バの質的変化がサラバの現象面に表れた結果であるとも考えられる。たとえば，4.2 節でサラバの後続に意志・命令表現が多いことを述べたが，指示詞サを構成要素とする他の接続表現（例：サレバ）や未然形バの後続に意志・命令表現が多い可能性も考えられる。その場合サラバの後続に意志・命令表現が多用されるのは，サラバの特徴ではなく指示詞サや未然

形バの特徴の反映ということになる[6]。このように，サラバの変化過程における現象は，サラバ自体の変化なのか指示詞サや未然形バの質的変化の反映なのかが曖昧である。

序章では，“別れの挨拶語”化するのが順接仮定条件を表すサ系接続表現のみであるのはなぜか，という問を立てた。この問を考察するに当たり，サラバの特徴が順接仮定条件のサ系接続表現独自のものであるか否かを検討する必要がある。そのためには，サラバと指示詞サを含むその他の接続表現，サラバと未然形バを比較する必要がある。本章では具体的指標をもとにサラバの変化過程の一側面を記述するに留め，他形式との比較は第 3 章で行う。

使用テキスト

一部，記号で示す。

◎…**国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2019.3, 中納言 2.4.2）** https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2019 年 11 月 3 日確認）サラバ：①〔平安時代編〕キー: 活用形 LIKE "未然形%"AND 後方共起: 語彙素読み="バ" ON 1 WORDS FROM キー，②〔鎌倉時代編・室町時代編〕キー: (活用形 LIKE "未然形%" AND 語彙素読み="サル")AND 後方共起: 語彙素読み="バ" ON 1 WORDS FROM キー，③〔室町時代編〕キー: 語彙素="さらば"，④イザ：キー: 語彙素読み="イザ"，⑤イデ：キー: 語彙素読み="イデ"　※サンプル ID，開始位置，permalink はバージョン 2023.03　※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

○…**『新編日本古典文学全集』小学館**：ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」 https://japanknowledge.com/（2019 年 11 月 3 日確認）キー「さらば」，範囲「古典本文」

△…**『日本古典文学大系』岩波書店**：国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」 http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/（2019 年 7 月 8 日確認）キー「さらば」

●**上代【和歌集】**万葉集…◎○

●**中古【作り物語】**竹取物語，落窪物語，源氏物語，堤中納言物語…◎○，宇津保物語…○，**【歌物語】**伊勢物語，平中物語，大和物語…◎○，**【日記・紀行】**蜻蛉日記，和泉式部日記，紫式部日記，更級

---

[6] 山口（1980:92）は「可能性の表現形式である仮定の条件形式は，後句の帰結に主体の推量・意志・命令・反語などの志向を導く傾向が強い」と述べているが，どの表現がどのくらいの割合で仮定条件句の後続に出現するかまでは示していない。

日記，讃岐典侍日記…◎○，**【随筆】**枕草子…◎○，**【歴史物語】**大鏡…◎○，栄花物語…○

●**中世前期【軍記】**保元物語，平治物語…◎○，**【説話】**宇治拾遺物語，十訓抄…◎○，**【日記・紀行】**建礼門院右京大夫集，とはずがたり…◎○，**【随筆】**徒然草…◎○

●**中世後期【軍記】**太平記…○，覚一本平家物語…△，**【謡曲】**翁，脇能，修羅者，鬘物，四番目物，切能…○，**【仮名草子】**ものくさ太郎…○，**【キリシタン資料】**天草版平家物語，天草版伊曽保物語…◎大英図書館蔵本，日葡辞書…土井忠生・森田武・長南実 編（1990）『邦訳日葡辞書』岩波書店，ロドリゲス日本大文典…土井忠生 訳（1955）『日本大文典』三省堂，**【狂言】**虎明本狂言…◎大塚光信 編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版，**【その他】**臨済録抄…駒澤大学文学部国文学研究室 編（1975）『『禪門抄物叢刊』第九 臨済録抄』汲古書院

●**近世前期【浄瑠璃】**曽根崎心中…◎○

第 3 章 サラバの接続詞化―サレバ・未然形バとの対照―

1．はじめに

序章で述べたように，サ系接続表現の中でも順接仮定条件の表現は“別れの挨拶語”化する。接続表現が“別れの挨拶語”化するには，サ系列指示詞を構成要素とし，順接仮定条件を表す表現であることが重要であると言える。

なぜ順接仮定条件のサ系接続表現のみが“別れの挨拶語”化するのか。従来の研究ではこの点が問われてこなかった。それは，この変化が語彙史（挨拶語史）の中で個々に記述されてきたためであろう。また，サラバの“別れの挨拶語”化の過程を把握するには，その前段階である接続詞化に着目する必要がある。本章では第 2 章に引き続き，サラバの接続詞化に焦点を当て，サレバ・未然形バとの比較を通して，上記の問について考察する足掛かりとする。それによって，これまで語彙史として扱われてきた現象を条件表現史の一現象とし，文法史的課題として位置付けることを目指す。

2．問題の所在

第 2 章では，順接仮定条件の接続表現サラバが“別れの挨拶語”化する過程で，その過渡期の段階があることを見出した。

(1) 能登殿前に進んだ郎等を憎い奴哉と有って，海へざんぶと蹴入れ，実光をば左の脇に挟み，弟をば右の脇に挟み，一締め締めて，いざ然らば〔ſaraba〕己等死出の山の供せいと有って，（キリシタン資料，天草版平家物語，4-18，1592 年，大英図書館蔵 p.347，40-天平 1592_04019，35090）

(1)のサラバについて，第 2 章では，指示詞サの指示対象が明瞭でない点等から順接仮定条件のサラバと異なると述べた。また，構成要素（サ＋アリ＋バ）の機能が明瞭だった段階（接続表現）から，もとの機能が失われた段階になったもの（接続詞）と位置付けた。接続表現サラバは接続詞の段階を経て“別れの挨拶語”化したと言える。サラバの“別れの挨拶語”化の過程を把握するには，接続詞化の過程を精緻化する必要がある。

第 2 章では，接続詞サラバが「状況を区切り，場面を展開する機能」を持つと考え，そ

れを「場面展開機能」と呼んだ。これは，狂言台本のサラバについて，小林（1996:266）が「契機的用法」と呼ぶものと概ね重なる。契機的用法とは「場面的に転換する一つの契機を示すような」（同:266）用法である[1]。契機的用法では仮定条件としての判断的性格がほとんど消失しているとされ，本研究の主張と通ずる。第 2 章ではまた，“別れの挨拶語”サラバも「状況を区切り，立ち去ることで新たな場面を展開させる」点で，接続詞サラバと同様，場面展開機能を持つと指摘した。

第 2 章では，サラバの場面展開機能の発達過程を調査する際，サラバの後続表現，特に意志・命令表現に着目した。そして，中古のサラバは意志・命令表現との共起が多い一方，疑問・推量表現等も後続させるが，中世前期～後期には，意志・命令表現との共起に偏重するという調査結果が得られた。

しかし，なぜサラバと意志・命令表現が多く共起するのか，その背景は未解明である。また，それが順接仮定条件のサ系接続表現としての，サラバ独自の様相であるか否かも不詳である。既述の如く“別れの挨拶語”化する接続表現は順接仮定条件のサ系接続表現に限られるため，当該変化には順接仮定条件のサ系接続表現独自の特徴が関わると考える。その特徴は，順接仮定条件のサ系接続表現でない表現と比較することで浮き彫りになろう。

そこで本章では，サラバと意志・命令表現との共起の多さが順接仮定条件のサ系接続表現独自の特徴か否かを探るために，サラバをサレバや未然形バと比較する。なお，仮定表現の帰結句を共時的に観察した小林（1996:37-69）や，未然形バ以外の仮定表現も含めてモダリティ形式を調査した高山（2002:93-105）等はあるが，未然形バのみの後続表現に関する通時的研究は見えない。また，サレバの後続表現に関する研究も見出せない。

サラバが接続詞化して獲得した契機的用法（「場面展開機能」に相当）は，「言語主体が，ある動作・行為をなそうとするのに別段支障がない，順当な状況であると認定していることを示」（小林 1996:266）すとされる。意志・命令表現も，行為の実現を指向する表現である点で，「動作・行為をなそうとする」際に使用されやすいと考える。よって，サラバの接続詞化について考察するにあたり，意志・命令表現との共起という環境条件は，有用な指標と言える。

また本章では，サラバの先行事態にも着目する。順接仮定条件を表すサラバは接続表現である以上，当然先行事態を受ける。また，順接仮定条件を表さない“別れの挨拶語”サラ

---

[1] 清瀬（1955:192-3）も『天草版平家物語』のサラバが「転換の役割」を担うと述べる（第 2 章 4.1 節）。

バも，先行する事態を受けていたと考える。これは，別れの挨拶が何らかの相互行為を交わした後でなければ発話されない点による（第 2 章 3 節）。つまり，サラバは順接仮定条件を表すか否かに拘わらず，何らかの先行事態を受けていたと言える。そこで本章では，サラバ・サレバ・未然形バの先行事態における相違を観察する。

特に，先行事態が話者自身の導入したものなのか，外部で生じたものなのかに着目する（ここで言う「話者」は，発話者・心内話者・書き手・詠み手を含む（以下，同様））。たとえば，(2)のサラバは話者自身の導入した情報（波線部）を受けている。

(2)　（道長→紫式部，宰相の君）「和歌ひとつづつ仕(つか)うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。（日記，紫式部日記，11 世紀初期，新全集 26p.978，20-紫式 1010_00001，150420）

一方，相手の発話や行動，周囲の出来事等，話者以外が主体となる外部の事態を受ける例もある。(3)では，後件の思考内容（破線部）を導く根拠として，話者の外部から導入された事態（波線部）を受けていると解釈できる。

(3)　車より，「いとよう知れる人の，憂(う)きことどものありける，いひし，聞きしかば，心憂(こころう)し。いはじ」といひければ，さらば，これは志賀の人なるべしと思ふに，（歌物語，平中物語，25，10 世紀後半，新全集 12p.498，20-平中_0960_00001，129990）

サラバが話者自身の導入した事態を受ける場合，先行事態と後続表現の間に区切りは生じず，発話が連続する。一方，サラバが外部事態を受ける場合，先行事態と後続表現の間に談話展開上の区切りが生じる。それによって，話者自身が保持していない情報を外部から得る契機となり，情報が更新され，新たな提言・行為指示等を導く可能性を生む。よって，外部の事態を受けることで，場面が展開する可能性があると考える。そこで，サラバの先行事態の特徴が，サレバや未然形バとどのように異なるのかを探る。

ここで 2 つの指標について付言する。接続詞サラバはそれ自体で場面展開機能を表す。しかし，接続表現サラバの段階では，意志・命令表現と共起する等，場面が展開し得る環境で結果として場面展開機能が表されていたと考える。本章は必ずしも，意志・命令表現

の後続や外部事態を受けること自体が，接続詞サラバ成立の必要条件とする立場ではないが[2]，場面が展開する環境で使われることはサラバの接続詞化において必須だったと言える。本章では場面展開の代表的指標として，意志・命令表現や外部事態に着目するものである。これにより，ともすれば主観的判断に陥りやすい「接続詞化」という事象に対して，ある程度客観的な観察が可能となる。結論を先取りすれば，意志・命令表現や外部事態等と共起する環境でサラバが示す，サレバとも未然形バとも異なる特性が，接続詞化という機能変化を導いたと考える。

以上より，本章では次の①②の課題に取り組む。本章の目的は，①②について記述することで，接続詞化の過程で見られるサラバの特徴が，順接仮定条件のサ系接続表現としての，サラバ独自のものであることを確認することである。

① **サラバとサレバ，未然形バは後続表現においてどのような相違があるか**（4 節）

② **サラバとサレバ，未然形バは先行事態においてどのような相違があるか**（5 節）

３．調査対象

調査する時代は中古から近世前期までとする。これは，サラバやサレバが中古から現れること，近世前期までにサラバが“別れの挨拶語”化したと考えられることによる。17 世紀後半にオサラバというサラバの新しい形が見えるようになることから(4)，この頃までにサラバは“別れの挨拶語”化したと思しい。

(4) 嶋原の別も，吉原のおさらばといふ声も，同じ物うき朝（上方，浮世草子，諸艶大鑑，1684 年，田島 2018b:11）

調査対象は『日本語歴史コーパス』（以下，CHJ）の中古～近世の資料（近世は近松浄瑠璃のみ）とし，「コーパス検索アプリケーション『中納言』」で検索した（https://chunagon.ninj

[2] この点は，サラバの後続表現が疑問表現等であったり，サラバが外部事態を受けていなかったりした場合でも，他者への働きかけが読み取れる等して，場面が展開することはあり得ることを踏まえている（例：では，そろそろ始めませんか？【疑問表現】）。そのうえで，一定の基準に基づいて用例を観察するため，意志・命令表現と外部事態を代表的指標として扱う。

al.ac.jp/chj/search）。ただし，和歌集編『古今和歌集』の例[3], 読みが特定できない例[4]，形態的に通常のサラバ・サレバと用法が区別できる例[5]，サラバ以外で未然形バ節に指示詞を含む例[6]，中世後期以降のナラバ・タラバの例[7]，底本の欠損等で後続表現が不明の例，検索ゴミの例等を除く。得られた 4336（サラバ 796，サレバ 350，未然形バ 3190）例を本章の調査対象とする。

４．後続表現に見られるサラバ・サレバ・未然形バの特徴

４．１　分類

本研究の「後続表現」とはサラバ・サレバ・未然形バに対する主節述語であり，話者の思考や態度等を表す表現とする。後続表現の意味は，節末の形や文脈等から判断した。また，サラバ・サレバ・未然形バの後に節が複数続く場合，当該表現がどの節を修飾するか

---

[3] 平安時代編-仮名文学『古今和歌集』との用例の重複を回避するため除いた。

[4] たとえば，(ア)の下線部は「さらば／されば／しからば／しかれば」と複数の読みが想定できるため，調査対象として扱えない。

(ア)　（老僧）「然(され)バ，此(こ)ノ経(きやう)ヲ聴聞(ちやうもん)セムガ為(ため)ニ，若干(そこばく)ノ止事無(やむごとな)キ神等(かみら)ハ来(きた)リ給(たま)フニコソ有(あり)ケレ」

（説話，今昔物語集，12-36，1100 年頃，新全集 35p.270，30-今昔 1100_12036，4270）

上の例は底本「新全集」では「され」の訓が付され，CHJ でも同様の形態論情報が与えられている。しかし，底本の『今昔物語集』における漢字の振り仮名は，「もし当時，仮名で書くとしたならばこう書いたであろうと校訂者が再構した」（新全集 35p.16）ものであり，サレバの確例とは言えない。

[5] 感動詞的表現と解せるオサラバ，サラバダ，サラバサラバ，サレバヨ，已然形終止を伴わないサレバコソ，サレバトテ，サレバコ（レ）ハ，コ（レ）ハサレバ，サレバダ，サレバサ，サレバノコト（デゴザル），サレバサレバ等である。通常の用法と異なるか否かの判断は『日本国語大辞典』や岡崎（2015）等を参考にした。通常のサラバ・サレバと用法が異なると解釈できても，形態的に区別できない例は調査対象とした。たとえば，別れ時の単独のサラバは“別れの挨拶語”なのか，未だ接続表現や接続詞の段階なのか形態的に区別ができない。このような例は調査対象に含めた。

[6] カカラバ，サ（モ）アラバ，シカラバ，ソノギナラバ，ソレナラ（バ），コレ～＋未然形バ，サホド～＋未然形バ，サヨウ～＋未然形バ，カノ～＋未然形バ等である。これらを排除する意図は，指示詞の影響に依らない未然形バの様相を把握するためである。

[7] ナラバ・タラバは中世前期頃まで未然形バの一形式であったが，中世後期頃からそれ自体で 1 つの接続助詞的な働きをする形式となり（小林 1996:123 等），未然形バ衰退の流れから独立する。これを踏まえ本章では，中古・中世前期のナラバ・タラバのみ調査対象とする。ただし，中世後期以降のナラバ・タラバを全て接続助詞的であると見なす意図はない。ナラバ・タラバとは異なる，未然形バ自体の歴史を描くための便宜的な処置である。

の判断は文脈に拠った。以上の処理に従えば「後続表現」の認定は些か恣意的であるが，サラバの歴史を把握するための，一定の傾向は見出せよう。これを踏まえ，以下，後続表現の分類項目を示す。なお，サレバや未然形バとの比較上の便宜のため，第 2 章 4.2 節とは分類の仕方が一部異なっている。

「φ」…当該表現で言い切る例。“別れの挨拶語”なのかそうでないのか判別しにくい単独のサラバ等も含む。なお，底本で「サラバ。～」のように直後に句点が付されても，後の節への修飾が読み取れる場合は，「φ」以外に分類した。

(5)　（内舎人）「さらば」といひてかへり来(き)て，（歌物語，大和物語，168，10 世紀後半，新全集 12p.408，20-大和 0951_00001，392600）

「省略」…述部が最後まで示されず，途中で切れる例。時間（明日／暮ニ／暁ニ等）を提示し再会等の意志を示したり促したりする例(6a)，場所（コナタニ／～ガモトへ等）を提示し移動の意志を示したり促したりする例(6b)，副詞（ハヤ／疾ク等）を提示し即座の行為を促す例(6c)等，意志・命令の意が読み取れる例を「省略表現 1」とする。その他，思考・認識の意が読み取れる例(6d)，「飛躍的な連接法[8]」（山口 1996:46-64）の例 (6e)を「省略表現 2」とする。

(6)　a.（兼家）「さらば，なほ明日(あす)」とてものせられぬ。（日記，蜻蛉日記，中，10 世紀後半，新全集 13p.250，20-蜻蛉 0974_00007，35750）

b.（大君）「日ごろ経(ふ)ればにや，今日(けふ)はいと苦しくなむ。さらば，こなたに」と

---

[8] 「順接仮定条件を表す形式（略）が，順当な帰結を伴なわずその帰結に反する事態に続く」（山口 1996:46）現象を指す。(6e)は「引き寄せたら寄るべきなのに，簡単には寄らないで」と解釈できる。「寄せば」がかかる「寄るべき」に当たる部分が省略されているため，「省略表現 2」に分類した（第 2 章では「打消」）。坂詰（2015）や山口（1996:46-64）によれば，同様の例がサラバにも見える(オ)。

(オ)　白衣なる法師どもに具しておはしけるが，さらばいそぎもあゆみ給はで，あそこ爰に立とゞまり，「あれはたが家ぞ，是は何者が宿所ぞ，こゝはいづくぞ」と，道すがらとはれければ，見る人みな手をたゝゐてわらひあへり。（軍記，平家物語，8，鼓判官，13 世紀頃，坂詰 2015:106）

言ひ出だしたまへり。（作り物語，源氏物語，総角，11 世紀初期，新全集 24p.308，20-源氏 1010_00047，305730）

c.（匂宮）「（略）さらばはや」とて，この人を帰したまふ。（作り物語，源氏物語，浮舟，11 世紀初期，新全集 25p.192，20-源氏 1010_00051，316290）

d. 法皇これを御覧じて，「あなむざんや。されば今まで，此者共は，命のいきてあるにこそ」とて，（軍記，平家物語，2，卒都婆流，13 世紀頃，新全集 45p.178，30-平家 1250_02016，14680）

e. ひきよせはたゝにはよらて春駒のつなひきするそなはたつときく（和歌集，拾遺和歌集，雑賀，1185 番歌，1005 年頃，古典選集本文 DB 正保版本「二十一代集」p.547，20W 拾遺 1005_20020，14940）

「命令」…文末が命令形の例，ナ～ソ等。

(7)　（頭の弁）「（略）さらば，な見えそ」とて，（随筆，枕草子，職の御曹司の西面の立蔀のもとにて，11 世紀初期，新全集 18p.106，20-枕草 1001_00047，9640）

「意志」…ム・ウ・動詞終止形等。話者 1 人の行為の例。なお，話者の行為でも反事実的事態は「推量」とする（「（想定の状況では）自分は○○しただろう」という推量の意を表すため）。

(8)　（津の国）「（略）都へ御ざらハ同道いたさう（狂言，虎明本狂言，かくすい，1642 年写，翻刻注解上 p.31，40-虎明 1642_01007，3200）

「疑問」…不定語，助詞カ・ヤを含む例。質問・自問・反語は区別しない。

(9)　「されば，何としたることぞ」と誰（たれ）も心得ず。（日記，とはずがたり，3，1306 年，新全集 47p.400，30-とは 1306_03008，17100）

「推量」…ム・マシ・ジ・ベキ・ウ・ダロウ・マイ等。「意志」等に該当しない例。

(10) （播磨中将成憲）「清盛だにあらば，かくはよも出ださじ。（軍記，平治物語，上，信西の子息闕官の事，13 世紀前半，新全集 41p.421，30-平治 1246_01004，3940）

「断定」…連体ナリ・文末ゾ・ジャ・ダ・～ニソウロウ等。

(11) 悪人の真似とて人を殺さば，悪人なり。（随筆，徒然草，85，1336 年，新全集 44p.148，30-徒然 1336_01085，2430）

「判断」…動詞終止形等。推量・断定等以外で，事態に対する話者の認識を表す例。

(12) 越前守，「こはなでふことぞ。さらば，よその人のやうにものしたまふかな。（作り物語，落窪物語，3，10 世紀後半，新全集 17p.235，20-落窪 0986_00003，82650）

「事象」…キ・ツ・ヌ・タリ等。既実現の出来事を描写した例。

(13) 歌の返し，箱に入れて，返す。名残りなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましをとぞありける。されば，帰りいましにけり。（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.42，20-竹取 0900_00001，79270）

「その他」…願望（バヤ等），推定（メリ等），当為（ベシ等），勧誘（ウ等）等。

4．2　サラバ

本節では前節の分類区分を踏まえ，サラバの後続表現の傾向を把握する。用例はいわゆる本文種別「会話／心内／地の文／手紙／歌・韻文」によって分類した。分類に際し，CHJ の形態論情報が付与されている場合は原則それに従い，形態論情報がない例や，情報がテキストの内容と合致していない例は，筆者の判断で情報を追加・修正した。また，会話文中で心内文を引用する例は「心内」とした（「会話」の情報が付与されていても，「思ふ／存ず」等があれば「心内」とした）。序文・注釈等は「地の文」とし，会話・手紙文中の和歌は「歌・韻文」に分類した。その他，判断の揺れる例は「不明」とした。

以上を踏まえ，サラバの後続表現を本文種別ごとに分類した結果を示す（表 1）。

表1）サラバの後続表現

		φ	省略1	命令	意志	疑問	推量	断定	判断	省略2	その他	計	意志命令率
中古	会話	4	26	35	22	9	9	1	4	4	13	127	65.4%
	心内		1	2	1	1	3	4	1	4	1	18	22.2%
	歌・韻文	2		1	3	1	2		2		1	12	33.3%
	その他	5			2	1	1					9	22.2%
中世前期	会話	4	6	65	24	8	3	1	2	1	7	121	78.5%
	不明	20		1	2	2						25	12.0%
	その他		1	2	3	3	1		1	4	4	19	31.6%
中世後期	会話	11		169	170	7	4	3	3	1	43	411	82.5%
	歌・韻文	1			14							15	93.3%
	不明	1										1	0.0%
近世前期	会話	19	3	1	7						3	33	33.3%
	その他	3			1				1			5	20.0%
計		70	37	276	249	32	23	9	14	14	72	796	70.6%

※各時代に計10例以下の本文種別が複数ある場合は「その他」として一括する。また，各本文種別で当該表現の占める割合が30.1%～の箇所に濃い網掛け，15.1%～の箇所に薄い網掛けを施した（本文種別「その他」「不明」や計10例以下の箇所には施さない）。意志・命令表現の他，それらの省略と見なせる「省略表現1」の該当箇所を太枠で囲み，総計に占めるこれらの割合を「意志命令率」として示す。以上は表2・3も同様である。

表 1 から，サラバの後続表現は会話文を中心に，全体的に意志・命令表現との共起率が高いことが看取される。それでも中古のサラバは疑問・推量表現等とも一定数共起している。それが中世前期～後期には，意志・命令表現へ偏重することがわかる。以上は概ね第 2 章の調査や先行論の指摘と同様の結果である。また，近世前期にはφの割合が上がり，意志・命令率が低下する。これは，別れの場面での使用(14)が増加することの反映であろう（近世前期φ22 例中 21 例）。その結果，意志・命令表現等との共起の必要性が低下したと考える。

(14) （徳兵衛）ちとお杯（さかづき）いたしましよ（治右衛門）重ねて／＼，預けます。さらばと言ひてぞ帰りける（上方，浄瑠璃，心中重井筒，上，1707 年，新全集 75p.162，51-近松 1707_15001，18450）

サラバは中世後期に意志・命令率が最高となることがわかった。また，先行論では，中世後期に場面展開機能相当の特徴が見えると指摘されてきた（2 節や注 1 参照）。また，第 2 章では，サラバとイザ・イデ等との共起例や，サラバの指示性が不明瞭の例がまとまっ

て見られるのも中世後期であることを示した。これらの諸点から総合的に判断して，サラバは中世後期に接続詞化したと見なす。

４．３　サレバ

サレバの後続表現の結果を示す（表 2）。

表2）サレバの後続表現

		φ	省略1	命令	意志	疑問	推量	断定	判断	事象	省略2	その他	計	意志命令率
中古	会話				2	7	10	16	6	12	1	5	59	3.4%
	地の文							1	1	25	1	3	31	0.0%
	手紙					1	1			1			3	0.0%
中世前期	会話		2	4	2	10	4	13	10	15	2	13	75	10.7%
	地の文					3	10	8	13	59	1	12	106	0.0%
	その他				1	4	1		3		3		12	8.3%
中世後期	会話	1				9	5	9	8	13	1	2	48	0.0%
近世前期	会話					1		1	3	3	7		15	0.0%
	地の文									1			1	0.0%
計		1	2	4	5	35	31	48	44	129	16	35	350	3.1%

表 2 から，サレバは意志・命令表現との共起が少ないことがわかる。なお，省略表現 1 は 2 例とも『保元物語』の例であるが，別本ではサラバとなっており，サレバの確例として扱い難い。

(15) a. 門を閉(と)ぢて，叩(たた)けども叩けども，音もせず。「されば，左京大夫(さきやうたいふ)が許(もと)へ」と仰せければ，（軍記，陽明文庫蔵保元物語，中，新院御出家の事，13 世紀前半，新全集 41p.315，30-保元 1223_02006，1670）

b. 門(もん)をとぢて，たゝけ共(ども)／＼をともせず，「さらば左京大夫(さきやうのだいぶ)がもとへ。」とおほせければ，（軍記，金刀比羅宮蔵保元物語，中，新院御出家の事，13 世紀前半，大系 31p.127）

省略表現 1 の 2 例を除けば，サレバが意志・命令表現と共起する例は 9 例のみとなる。サ

レバがいかに意志・命令表現と共起しにくかったかがわかる[9]。サレバは事象表現や話者の思考内容（断定・判断表現等）を後続させやすい形式であったと言えよう。

４．４　未然形バ

次に未然形バの調査結果を示す（表 3)。

表 3 から，未然形バの後続表現は，中世前期まで推量・疑問表現が中心であり，これらが未然形バの最も典型的な後続表現だったことがわかる。意志・命令表現は全体の 2〜3 割と一定数存するが，サラバほどの偏向は見出せない。それが中世後期や，近世前期の会話文では，意志・命令表現の割合が推量・疑問表現を上回る。未然形バと意志・命令表現との共起の増加は一見，サラバと意志・命令表現との共起率が高まることと，連動しているようにも捉えられる。

しかし，必ずしもそうとは言えない。未然形バと意志・命令表現の共起率が中世後期以降高まると言っても，共起率が 7〜9 割に達していたサラバと比べれば，やや低い。また，意志・命令表現との共起率が高まる時期が中世前期以降であるサラバと異なり，未然形バは中世後期以降である。未然形バの変化が先行すれば，サラバの変化がそれに連動したと説明もできるが，未然形バの一形式だったサラバの変化が先行し，未然形バ全体の変化を牽引したとは考え難い[10]。

---

[9] サラバとの対立で言えば，サレバが意志・命令表現と共起しにくいのは順接確定条件の特徴ということになる。しかし，順接確定条件を表す已然形バには意志・命令表現との共起例が見られる(カ)(キ)。

(カ)　（かぐや姫）「（略）かくあさましきそらごとにてありければ，はや返したまへ」（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.35，20-竹取 0900_00001，58410）

(キ)　（藤原兼家）「（略）いと便なかるべければ，かしこへものしなむ」（日記，蜻蛉日記，上，10 世紀後半，新全集 13p.140，20-蜻蛉 0974_00002，66760）

サレバが意志・命令表現と共起しにくいことが順接確定条件の特徴であると主張するには，已然形バの後続表現の用例数を詳しく調べる必要がある。今後の課題とする。

[10] 中世後期以降，未然形バと意志・命令表現の共起が増加する点については，推測の域を出ないが，順接仮定条件を表す他形式の出現が要因と考える。矢島（2013:61-94）によれば，『平家物語』から近世中期資料にかけて，仮定的条件文全体に対する已然形＋バ，タラ，ナラ等の割合が高まる一方，未然形＋バの割合が減少するという。このような他形式の増加が，未然形バの後続表現にも影響したのではないか。つまり，已然形バやタラ・ナラが仮定条件を表すようになり，推量・疑問表現と共に頻用され始めた結果，未然形バでは次点で多かった意志・命令表現との共起が顕現してきたのではない

表3）未然形バの後続表現

		φ	省略1	命令	意志	疑問	推量	断定	判断	事象	省略2	その他	計	意志命令率
中古	会話	35	8	59	59	53	171	6	16	1	24	17	449	28.1%
	心内	48	3	1	16	51	121	3	5		15	1	264	7.6%
	地の文	1		2	1	13	34		10	1	2	8	72	4.2%
	手紙	4	2	7	1	5	11				3	1	34	29.4%
	歌・韻文	45	2	71	69	220	278	4	35		7	37	768	18.5%
	不明	3					2		1				6	0.0%
中世前期	会話	14	6	79	84	69	229	22	23	1	8	51	586	28.8%
	心内	16	1	9	31	27	72	1	6	1	5	3	172	23.8%
	地の文	1		2		24	67	6	15	16	1	13	145	1.4%
	手紙	1		1	3	1	10	1	2		1		20	20.0%
	歌・韻文	15	1	27	13	57	48	1	4		2	11	179	22.9%
	不明				4	7	13	2	2			2	30	13.3%
中世後期	会話		4	73	46	10	35	8	13	6	4	10	209	58.9%
	心内			1	15	1	1				1	4	23	69.6%
	歌・韻文			4	3	3	1		2		1		14	50.0%
	その他			1	2	2	1		1			4	11	27.3%
近世前期	会話	12	4	45	22	7	14	2	14		35	6	161	44.1%
	地の文	13		3	1		4		1		2	1	25	16.0%
	その他	5	2	1	5	1	2	1	2		2	1	22	36.4%
計		213	33	386	375	551	1114	57	152	26	113	170	3190	24.9%

サラバも未然形バも，サレバとは異なり，一定数意志・命令表現と共起するが，サラバの方が全体的に共起率が高い。特にサラバは中古から既に，未然形バと比べ高い割合で意志・命令表現と共起している。この違いは何に起因するのだろうか。

その要因の 1 つを考えるにあたり，後件にモダリティ制限があるとされる反事実的条件文に着目する。有田（2007:150）によれば，前件が反事実的内容を表す場合，意志表現は後続しないとされる。現に(16)は反事実的事態としては解釈できない（用例の「＃」は反事実的でない解釈であれば文が成り立つことを表す）。有田（2007:151）は，「反事実的前件は，発話時点において成立しないことが話し手にとって明らかな命題であり，それが話し手の意志成立の条件にはなり得ない」と述べている。

かと推測される。この点に関して，用例調査に基づいた実証が要される。今後の課題である。

(16) ＃大雪でバスが不通になっていたら，研究会は中止にしよう。（有田 2007:150）

有田（2007）は反事実的事態と命令表現の関係には触れていない。しかし，前件の条件が成立しないことが話者にとって明らかな反事実的条件文では，後件の話者の心的態度が効力を持たないことも発話時点で明らかとされている（有田 2007:153）。この点から，行為要求という心的態度を表す命令表現も，反事実的事態では後続し得ないと考える。

このような反事実的事態の例が，未然形バには一定数存する(17)（3190 例中 828 例 26.0%）。

(17) （「よからぬ物」を見た僧都の描写）頭（かしら）の髪あらば太りぬべき心地するに，（作り物語，源氏物語，手習，11 世紀初期，新全集 25p.282，20-源氏 1010_00053，9890）

各時代の内訳は，中古 1593 例中 548 例 34.4%，中世前期 1132 例中 229 例 20.2%，中世後期 257 例中 13 例 5.1%，近世前期 208 例中 38 例 18.3%である。中世後期がやや少ないが，各時代一定数，当該例が存在することがわかる。

一方，サラバが反事実的事態を表す例は極めて少ない（796 例中 2 例 0.3%）。(18)は祭りの後，女房たちが再度舞を見たがっている場面，(19)は源氏の去り際に明石君が見送りに現れない場面である[11]。

(18) （女房たち）「八幡（やはた）の臨時の祭の日，名残（なごり）こそ，いとつれづれなれ。など帰りて，また舞ふわざをせざりけむ。さらばをかしからまし。（随筆，枕草子，なほめでたきこと，11 世紀初期，新全集 18p.258，20-枕草 1001_00136，13000）

(19) （源氏）「（略）しばしにても苦しや。いづら。などもろともに出でては惜しみたまはぬ。さらばこそ人心地もせめ」（作り物語，源氏物語，松風，11 世紀初期，新全集 21p.416，20-源氏 1010_00018，67000）

(18)は「なぜ帰って，また舞うことをしなかったのか。そうしたらおもしろかったろうに」，(19)は「なぜ一緒に出てきて別れを惜しまないのか。そうであればこの気持も落ち着くだ

[11] 川村（2020b:68）では源氏物語に反事実的事態を表すサラバが存在しないと述べたが，改める。

ろうに」と解せる。サラバが指示する文は，それぞれ「舞ってくれたら」「出てきてくれたら」という反事実的意味を含意する。このような例は稀少である。

未然形バが制限なく反事実的事態を表すのに対し，サラバは反事実的事態を表しにくかったと言える。しかし，反事実的事態を前件とする条件文が意志・命令表現を後続できない点から，意志・命令表現との共起においては未然形バに制限があり，サラバには制限がなかったことになる。反事実条件文の構成可否という差はサラバと未然形バにおいて，サラバの方が意志・命令表現と共起しやすい様相に繋がる要因の 1 つと考える。

5. 先行事態に見られるサラバ・サレバ・未然形バの特徴

5．1　サラバとサレバの比較

先行事態におけるサラバとサレバの相違をまとめていく（表 4)。話者以外の主体によって導入される言語的・非言語的事態（相手の発話・行為，周囲の出来事等）がサラバ・サレバの直前に現れる場合を「外部」，話者自身が導入した事態（自身の発話等）がサラバやサレバの直前に現れる場合を「内部」とする。

表4）サラバとサレバの先行事態

	中古		中世前期		中世後期		近世前期	
	外部	内部	外部	内部	外部	内部	外部	内部
サラバ	101(61)	65(39)	113(68)	52(32)	372(87)	55(13)	12(34)	25(66)
サレバ	5 (5)	88(95)	12(6)	181(94)	25(52)	23(48)	12(75)	4(25)

※表4の括弧内の数字は各時代・表現に占める「外部」「内部」の割合である（表5も同様）。

表 4 から，サラバは「外部」が多く，中世後期には 8 割以上になることがわかる。(20)では，外部事態（波線部）を条件として，「かく申しはべらむ」という発話を導いている。(21)では，非言語的な外部事態を契機として，「討ち死にせよや」と発話している。

(20)　（内侍）「（略）（カグヤ姫ヲ）よく見て参るべきよし，（帝ガ）のたまはせつるになむ，参りつる」といへば，（嫗）「さらば，かく申しはべらむ」といひて，入りぬ。（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.57，20-竹取 0900 00001，128840）

(21)　常居(つねゐ)の方(かた)へ走り入りたれば，長田は逃げて失せにけり。（玄光）「さらば，討(う)ち死(じ)

にせよや」とて（軍記，平治物語，下，義朝内海下向の事付けたり忠致心替りの事，13 世紀前半，新全集 41p.526，30-平治 1246_03002，23840）

(20)(21)の波線部は既実現事態であるが，サラバの話者にとって新規に導入されたばかりの内容である。そのため，即座に確定的事態としては扱えず，仮定的に処理される[12]。ゆえに，もともと順接仮定条件を表すサラバで受けられる。

近世前期のサラバで「内部」が多いのは発話末等で使用され，外部事態を受けていると解し難い例があるためである(14)。後続表現の場合と同様，サラバが別れの場面で頻用されることで，発話末の例が増加したと考える（別れの場面かつ発話末のサラバは，中世後期「内部」55 例中 0 例，近世前期「内部」25 例中 11 例である）。

一方，先行事態を確定的に受けるサレバは，外部の事態を受けることが難しい。(22)は，既定的であると話者が認識した事態（波線部）を，サレバが受ける例である。

(22) （桐壺院）「皇子（みこ）たちあまたあれど，そこ（＝若宮）をのみなむかかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ，いとよくこそおぼえたれ。（作り物語，源氏物語，紅葉賀，11 世紀初期，新全集 20p.329，20-源氏 1010_00007，64530）

サレバにも外部の事態を受けていると解釈できる例はある（350 例中 54 例 15.4%）。しか

---

[12] 話者が得た新情報を自身の知識体系の中に内在化するのに時間がかかるという Akatsuka（1985）の指摘に示唆を受けた考えである。英語の接続詞でも新情報を受けた直後では because 等の使用は不自然であり，未確定の内容を表す if 等が選択されるという(ク)（*は非文であることを表す）。

(ク) A: I'm going to the Winter LSA.

B: If (*Because) you are going, I'm going, too. （Akatsuka1985:635）括弧内川村

このような，新情報を受ける際に仮定を表す表現が使用される現象は，前田（2009:46-47）や矢島（2013:76）によれば，近世前期や現代の日本語にも見えるという (ケ ab)

(ケ) a.「どこへ捨ててきたのよ！」「K 急行の崖の草ん中だ」「私，行って取ってもらってくる！」「行くなら行ってみろ。電車の線路の用地内に物を捨てるのは，重大な行為だからな。どんなふうに処罰されるかわからんぞ」（小説，夫婦の情景，1983 年，前田 2009:47）

b.（相手の様子を発話の場で認識し，）ムヽその覚悟がきはまればもふ落付た満足した。（上方，浄瑠璃，丹波与作待夜の小室節，1707 年，矢島 2013:76）括弧内川村

しそれらはたとえば，「言った通りであることを聞き手に気づかせる表現」（徳永 2007:225）が後続する例(23)[13]，応答表現的に使用される例(24)，サラバとの混用例(15)等，特殊な用法や，確例と認めがたい例であることが多い。中世後期・近世前期のサレバで「外部」が多いのは応答表現的な使用が多いためである。これらは順接確定条件の用法とは一線を画するものと思われ，個別に検討を要するため，本章ではこれ以上取り扱わない。

(23) （篁）「（略）え申し候はじ」と奏(そう)しければ，（帝）「ただ申せ」とたびたび仰せられければ，（篁）「さがなくてよからんと申して候ふぞ。（略）」と申しければ，（帝）「おのれ放ちては誰(たれ)か書かん」と仰せられければ，（篁）「さればこそ，申し候はじとは申して候ひつれ」と申すに，（説話，宇治拾遺物語，3-17，13 世紀前半，新全集 50p.138，30-宇治 1220_03017，1930）

(24) （孫二）「やれようこそおじやつたれ，此間ハお目にかゝらなんだ（孫一）「されハ此間ハおめにかゝらなんだ（狂言，虎明本狂言，薬水，1642 年写，翻刻注解上 p.105，40-虎明 1642_01021，3580）

以上，サラバの方がサレバよりも基本的に外部事態を受けやすく，中世後期に用例数が 8 割以上に達することを確認した。4 節の調査に加え，中世後期に「外部」の例が最多になることから，やはりサラバは中世後期頃に接続詞化したと考える。

5．2　サラバと未然形バの比較

先行事態におけるサラバと未然形バの相違をまとめていく（表 5）。

表5）サラバと未然形バの先行事態

	中古		中世前期		中世後期		近世前期	
	外部	内部	外部	内部	外部	内部	外部	内部
サラバ	101(61)	65(39)	113(68)	52(32)	372(87)	55(13)	12(34)	25(66)
未然形バ	54(3)	1539(97)	31(3)	1101(97)	19(7)	238(93)	11(5)	197(95)

[13] 已然形終止を伴っているため調査範囲に含めた。「案の定だ」と訳されるサレバコソ（已然形終止を伴わないサレバコソ）は，この「言った通りであることを聞き手に気づかせる表現」から成立したとされる（半藤 1992，徳永 2017，碁石 2022）。「案の定だ」と訳すサレバコソは調査範囲外である（注 5 参照）。

未然形バの場合，話者以外の主体によって導入される言語的・非言語的事態が未然形バ節で表現されていれば「外部」，そうでなければ「内部」と判断した。表 5 から，未然形バは一貫して，サラバよりも「外部」の例が少ないことがわかる。

未然形バが外部事態を受ける例を挙げる(25)(26)。(25)は三条右大臣の和歌に対する兼輔朝臣の返歌である。波線部を受け，その情報が未然形バ節に取り込まれている。(26)では何某が牛博労の発話を受け，その内容を未然形バ節で表現し直している。

(25) （三条右大臣）はかなくてよにふるよりは山しなの宮の草木とならまし物を　返し（兼輔朝臣）山しなの宮の草木と君ならは我代はしづくにぬるはかりなり（和歌集，後撰和歌集，哀傷歌，1390 番歌，955 年，古典選集本文 DB 正保版本「二十一代集」p.378，20W 後撰 0955_22022，1930）

(26) （牛博労）「（略）牛にかぎつてくるしうなひ子細が有（何某）「くるしうなひ子細があらハいハしめ，（狂言，虎明本狂言集，牛博労，1642 年写，翻刻注解下 p.428，40-虎明 1642_07031，10920）

既述の如く，外部の事態は即座に確定的事態として扱えず，新情報として仮定的に処理される。特に(26)では，「くるしうなひ子細が有」ことは既実現であるが，何某にとって新情報であるため，仮定的に受けることになる。順接仮定条件を表す未然形バが外部の事態を受けられる点は理にかなっている。

では，未然形バで当該例が少なく，サラバのみ多いのはなぜか。それは，サラバが未然形バよりも端的に外部事態を指せたためと考える。未然形バが外部事態を受ける場合，相手や周囲の状況によって導入された情報を，言語化し直す必要がある。円滑さが要される相互行為で既出の情報を繰り返すのは冗長だろう。一方サラバは指示詞サが外部事態を指示するため，即座に後続表現を導ける。未然形バと異なり，既出情報を再提示する煩雑さはない。よって，サラバは未然形バよりも外部事態を受けやすかったと言える。

6．おわりに

本章では課題①②に取り組んだ。それぞれに回答することで，本章のまとめとする。

① サラバとサレバ，未然形バは後続表現においてどのような相違があるか

→サラバは意志・命令表現との共起率が高く，特に中世前期以降 7〜9 割に達する。一方，サレバは意志・命令表現とほとんど共起しない。未然形バは一定数意志・命令表現と共起し，中世後期以降 5〜7 割に達するが，サラバほどの偏りはない。サラバが意志・命令表現と共起しやすいのは，サラバが反事実的事態を表しにくい点で，意志・命令表現との共起に制限がなかったことが要因の 1 つと考える。

② サラバとサレバ，未然形バは先行事態においてどのような相違があるか

→サラバは外部事態を受ける例が多く，中世後期には 8 割以上に達する。一方，サレバは例外を除き，外部事態をほとんど受けない。外部事態は話者にとって新情報であり，仮定的に処理されるため，サレバでは受けにくかったと考える。また，未然形バもサラバに比べると，外部事態をあまり受けない。指示詞サを含むサラバの方が，端的に外部事態を指示できたためであろう。

以上を踏まえ，サラバの接続詞化の過程について記述する。

条件表現史では，未然形バが表した仮定条件の表現が近代語で消滅し，もともと確定条件を表した已然形バが仮定条件を表すようになるとされる（小林 1996:17）。サラバが未然形バの一形式という性格を保持し続けていたのであれば，未然形バの動きに連動してサラバも衰退に向かうことが予想される。

ところが，サラバは未然形バ衰退の流れとは連動しない。中古のサラバは比較的幅広い表現を後続していた点で，未だ未然形バの一形式という性格が強かったと考える。だが，中世前期以降サラバと意志・命令表現の共起率が急増する。反事実的事態を表しにくい等の特性を背景に，意志・命令表現との共起の偏りを強めていったと考える。また，サラバはそもそも外部事態を受ける例が多かった。サラバが指示詞サを含み，順接仮定条件を表したことを背景に，中世後期にその傾向が顕著になる。以上の調査と，第 2 章及び先行論の指摘から，サラバは中世前期以降，未然形バの一形式という性格を脱し始め，中世後期には場面展開機能を担う接続詞となったと考える。場面展開機能発達の時期については第 2 章における主張と同様であるが，本章ではそれが，順接仮定条件を表すサ系接続表現としての，サラバ独自の特性を背景とすることを明らかにした。これらの背景は，サラバをサレバや未然形バと対照させることで顕著に見出されたものである。

“別れの挨拶語”化するサ系接続表現は順接仮定条件を表すもののみである（1 節）。サラ

バの接続詞化の過程で見える特徴が，順接仮定条件のサ系接続表現としての特性を背景とすることから，本章は“別れの挨拶語”化の過程解明にもいくらか寄与したと考える。

使用テキスト

・国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（バージョン 2022.10，中納言バージョン 2.7.0）

https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2023 年 2 月 2 日確認）①キー: (語彙素="然る" AND 語彙素読み="サル") AND 後方共起: 語彙素="ば" ON 1 WORDS FROM キー，②キー: 語彙素="さらば"，③キー: 語彙素="されば"，④キー: 活用形 LIKE "未然形%" AND 後方共起: 語彙素="ば" ON 1 WORDS FROM キー　⑤文字列検索：用例(カ)(キ)　※重複する例は適宜，調査対象から除いた　※サンプル ID，開始位置，permalink はバージョン 2023.03　※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

●**中古【作り物語】**竹取物語，落窪物語，源氏物語，堤中納言物語…『新編日本古典文学全集』小学館（以下，○），**【歌物語】**伊勢物語，大和物語，平中物語…○，**【日記・紀行】**土佐日記，蜻蛉日記，紫式部日記，和泉式部日記，更級日記，讃岐典侍日記…○，**【随筆】**枕草子…○，**【歴史物語】**大鏡…○，**【訓点資料】**西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点巻一，**【和歌集】**古今和歌集…○，後撰和歌集，拾遺和歌集，後拾遺和歌集，金葉和歌集，詞花和歌集，千載和歌集…国文学研究資料館蔵正保版本「二十一代集」

●**中世前期【軍記】**（陽明文庫蔵）保元物語，平治物語，平家物語…○，（金刀比羅宮蔵）保元物語…永積安明・島田勇雄 校注（1961）『日本古典文学大系 31 保元物語平治物語』岩波書店，**【説話】**今昔物語集（本朝部），宇治拾遺物語，十訓抄…○，**【日記・紀行】**海道記，建礼門院右京大夫集，東関紀行，十六夜日記，とはずがたり…○，**【随筆】**方丈記，徒然草…○，**【和歌集】**新古今和歌集…国文学研究資料館蔵正保版本「二十一代集」

●**中世後期【キリシタン資料】**天草版平家物語，天草版伊曽保物語…大英図書館蔵本，**【狂言】**虎明本狂言…大塚光信 編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版

●**近世前期【浄瑠璃】**曾根崎心中，薩摩歌，心中二枚絵草紙，卯月紅葉，五十年忌歌念仏，丹波与作待夜のこむろぶし，卯月の潤色，心中重井筒，堀川波鼓，淀鯉出世滝徳，心中刃は氷の朔日，心中万年草，冥途の飛脚，今宮の心中，夕霧阿波鳴渡，長町女腹切，生玉心中，大経師昔暦，鑓の権三重帷子，博多小女郎波枕，山崎与次兵衛寿の門松，心中天の網島，女殺油地獄，心中宵庚申…○

【第Ⅱ部】サヨウナラ（バ）の史的展開

第４章 サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化

１．はじめに

“別れの挨拶語”サヨウナラは，接続表現サヨウナラ（バ）が変化したものである。接続表現サヨウナラ（バ）は，前件（指示対象）の内容を仮定的に捉え，順当に続く内容を後件（主節述語句）に導くという順接仮定条件の機能を持つ(1)(2)。

(1) 中居その ヲイ／＼さあお二階へお出なんし 東どこだ／＼ そこゝに致しませうかね 文何処でもよしさそさようなら爰がお静でよふござりませふ（江戸，洒落本，深川新話，1779 年，洒落本大成 8p.217，52-洒落 1779_01025，27240）

(2) いなか（略）だい／＼こうをおたのミ申たいが，できませうかな てだい イヤ，それハごきどくなことでござります。おのぞミならバ，じきにできます いなか さやうならバ，おたのミもふしますと，ぜに二百文つゝミてさしいだす。（江戸，噺本，落咄屠蘇機嫌，下，1817 年，噺本大系 18p.124）

前件内容の指示はサヨウ，後件との接続はナラ（バ）の機能である。“別れの挨拶語”サヨウナラは，これらの機能が不明瞭化していると考える。

サヨウナラ（バ）については夙に多くの研究があり，歴史的様相の概略が示されている（湯澤 1957，蜂谷 1983，前田 1985，諸星 1999，倉持 2013a，2013b，濱田 2013，中野 2016，濱屋 2016，田島 2018a，田島 2018b 等）。それらによれば，サヨウナラ（バ）が 19 世紀初期頃に“別れの挨拶語”化したというのが先行論における共通見解のようである。

しかし，“別れの挨拶語”化の時期を 19 世紀初期頃とするのは早計である。そもそもこれらの先行論では何を以って“別れの挨拶語”と見なすのかが曖昧である。このことは序章で述べたように，“別れの挨拶語”の定義が明確になされず，解釈や不十分な条件に依拠した用例判断が行われてきたことに起因すると考える。

たとえば，(3)(4)等の 19 世紀初期の例について田島（2018b:14）は，「単独で使用されており，挨拶表現として定着したことが確認できる」とする

(3) あだもじ「ハイさやうならトこしをかゞめる（江戸，滑稽本，浮世床，初編上，

1813 年，新全集 80p. 271）

(4) 櫛八「ホイ，あの儘(まんま)か。ハイさやうならト跡じさりにしきゐをまたぐと（同，p.274）

“別れの挨拶語”についての明確な定義が見られず，単独であることを“別れの挨拶語”の根拠としていることがわかる。確かに“別れの挨拶語”サヨウナラは接続表現サヨウナラ（バ）のように前件・後件が必須でない。そのため単独で使用されることは多いだろう。(3)(4)も“別れの挨拶語”のように捉えることは一見可能のように見える。

しかし，単独であるというだけでは“別れの挨拶語”であることの根拠にはならない。後述するように，接続表現サヨウナラ（バ）は後件が明示されずとも使用可能である。(3)(4)は接続表現（あるいは接続詞）サヨウナラが別れの場面で使用されただけとも解釈できる。田島（2018b）を始めとする先行論では，このように“別れの挨拶語”の定義が曖昧なまま論じられている。“別れの挨拶語”の定義が不明確であれば，サヨウナラ（バ）の歴史的変化の把握も不十分ということになろう。そこで本章では，序章で示した“別れの挨拶語”の定義をもとに，具体的指標を設定し，サヨウナラ（バ）の歴史的変化の様相を把握することを目的とする。

また，サヨウナラ（バ）について論じるにあたり，東西差にも言及すべきである。別れの場面で用いられる接続表現由来の形式については各地で分布が異なる。たとえば，『新日本言語地図』第 150 図では，「親しい友達に対して，別れの挨拶で「ではまた」と言うとき，どのように言いますか」という質問に対する日本各地の回答結果が示されている。それによれば，東京地方にジャー・ジャーマタ等，大阪地方にホナ・ホンナラ等が集中するといった地域差が看取される。本章との関連で言えば，サヨナラ・サヨナラマタが愛知地方ほか各地に点在する。また，近世以降の接続表現を調査した矢島（2013，2019）によれば，ソレデハが江戸東京語資料で，ソレナラ・ソウシタラが上方大阪語資料で頻用されるといった東西差が報告されている。これらを踏まえれば，サヨウナラ（バ）も地域によって異なる様相を示すことが予想される。しかし，サヨウナラ（バ）に関する先行論では使用地域について断片的な指摘があるのみであり，統計的な実証は行われていない。その指摘も「“さやうなら”系の語は江戸言葉として近世後期に発達してきたものらしい」（前田 1985:86，傍線川村）とするものもあれば，「サヤウ系統では，上方語で「さやうなら」，江戸ことばでぞんざいな「すんなら」が使われた」（森田 1997:206，傍線川村）とするものも

あり，見解が一致していない。そこで本章では，東西資料を比較した統計的調査を行う。

２．サヨウナラ（バ）の自立語化

序章で述べたように，“別れの挨拶語”を「その表現自体で「別れ」の意味を表す一語の自立語」と定義する。サヨウ及びナラ（バ）という構成要素から成っていた接続表現サヨウナラ（バ）は順接仮定条件の機能を希薄化させ，後にサヨウナラという形式それ自体で「別れ」の意味を帯びるようになったと考える。“別れの挨拶語”サヨウナラの確例と見なすには，それ自体が「別れ」の意味を表す自立語として，接続表現が現れ得ない環境に生起した例を探せばよい。

該当例は 20 世紀初期になると出現する(5)〜(7)。

(5) おくみは坊ちやんをつれて門口で見送つた。「さ，こちらへ入らつして左様ならをなさいまし。（略）」と，おくみは坊ちやまが車の背中の漆塗へ顔を写してゐられるのをこちらへ引き放した。（小説，桑の実，8，1913 年，青空文庫）傍点原文ママ

(6) おくみは久男さんを負(おぶ)つて後から門口まで附いて出た。「坊ちやんがお父さまに左様ならでございますつて。」と，こちらから言ふと，（同）

(7) 「（略）九時までに来なくってはいかん。日本堤分署(にほんづつみぶんしょ)です。――浅草警察署の管轄内(かんかつない)の日本堤分署です。――それじゃ，さようなら」と独(ひと)りで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。（東京，小説，吾輩は猫である，9，1905 年，青空文庫）

(5)はサヨウナラが動詞句を構成する例である。「サヨウナラをなす」が「別れを告げる」意であると考えなければ文意が解釈できない[1]。(6)はサヨウナラが繋辞を後接する例である。「サヨウナラでございます」が「お別れでございます」の意を表すと考えなければ解釈できない。(7)はサヨウナラがソレジャと共起する例である。ソレジャが「接続」の機能を担い，サヨウナラが「別れ」の意を表すと解釈するのが自然である。よって，サヨウナ

[1] 動詞句構成例について蜂谷（1983:146） は「近代以降,「さようならをする」「さようならをいう」などのように，感動詞からさらに別れの意を示す名詞としても用いられるようになる」と説明する。

ラがその形式自体で「別れ」の意味を表すと解釈できるようになるのは，20 世紀になってからであると考える[2]。

サヨウナラ（バ）はサヨウ及びナラ（バ）という構成体が複合したものである。(5)〜(7)のサヨウナラはもとの内部要素であるサヨウ及びナラ（バ）の機能が喪失したことを表している。これらの形式の出現はサヨウナラ（バ）のもとの機能が希薄化し，“別れの挨拶語”として定着したことの証左となる。

以上から，サヨウナラは 20 世紀初期までに「別れ」を表す形式に変化したと考える。これを踏まえ，サヨウナラ（バ）がどのような変化過程を辿ったのか記述する。

３．調査資料

本章では，東西比較が可能となる 18 世紀後半から 20 世紀初期までの上方関西語・江戸東京語資料を調査対象とした。近世では噺本・洒落本・浄瑠璃・歌舞伎脚本・黄表紙・滑稽本・人情本作品から用例を得た。近代では関西弁話者の発話が豊富に得られる上司小剣の小説，東京出身の作者による小説から用例を収集した。純粋な発話の用例のみを対象とし，発話の引用等は除外した。なお，本章では用例の出現状況等から，便宜上 1751〜1875 年を近世（上方・江戸），1876〜1925 年を近代（関西・東京）とする。詳細な使用資料の情報は本章末尾に記す。

ただし，近代の資料についてはいくつかの点で注意を要する。1 点目は，1876〜1900 年成立の関西語資料が得られなかったことから，当該時期において時代の断絶が存在する点である。2 点目は，近代関西語資料として単一作者の作品のみを対象としたことによる偏りが，調査結果に反映される可能性がある点である。3 点目は，東京出身の作者の作品を

---

[2] J. C. ヘボン著『和英語林集成』には，19 世紀後半頃からサヨウナラが「別れ」の意を表す形式として使用されていた可能性を示す項目がある。次例のように，サヨウナラは Farewell や Good-bye，Good-day に対応するものとして記載されている。

(ア) SAYŌNARA サヤウナラ *interj*. A salutation at parting, farewell, good-bye. Syn. SHIKARABA, O-SARABA.（和英語林集成初版，1867 年，飛田・李編 2000:323）

(イ) FAREWELL，Sayōnara; osaraba; go-kigen-yoroshū.（和英語林集成初版，1867 年，同 2001:145）

(ウ) GOOD-BYE, *interj*. Sayōnara, go-kigen-yorashii.（和英語林集成再版，1872 年，同 2001:166）

(エ) GOOD-DAY, *interj*. Konnichi wa, sayōnara.（和英語林集成三版，1886 年，同 2001:166）

ただし，『和英語林集成』の記述のみから，サヨウナラが 19 世紀後半には“別れの挨拶語”化していたと考えるのは早計であろう。参考として記載するに留める。

東京語資料として扱っており，登場人物が純粋な方言としての東京語を話すわけではないという点である。近代小説の会話文では，いわゆる“東京弁”ではなく，文体に適した規範的な表現が出現しやすいと考える。よって，関西弁話者が登場する上司小剣の作品との比較条件が一致していない。4 点目は，2 点目と通ずる問題であるが，東京語資料では複数の作品を対象としており，3 点目同様，関西語資料と同じ条件による比較ができない点である。以上の点に関して，調査の際に注意しなければならない。

本章では資料の質・量ともに不十分ではあるが，本章の課題について，一定の示唆は得ることができると考える。今後，調査対象を増加し，統一された条件で東西比較されることが望まれる。以上を踏まえ，次節以降，調査内容について記述する。

４．調査の観点

サヨウナラ（バ）の用例を観察する指標として，次の条件を用いた。

①発話直後にその場を離れる行動を伴うこと

②後件が明示されないこと

これらは，サラバの“別れの挨拶語”化の過程を記述した第 1 章と同じ指標である。このような指標を設定することで，解釈に依らず客観的に用例を観察することができる。以下，①の「行動」を「離行行動」，②を「後件不明示」と呼ぶ。

①発話直後にその場を離れる行動（離行行動）を伴うことは別れの行為という場面的特徴である。“別れの挨拶語”サヨウナラは，離行行動とともに使用されることが多い。一方，調査結果を先取りするが，接続表現（あるいは接続詞）サヨウナラ（バ）は離行行動を伴わずに使用可能であった(8)(9)。

(8) 乙ひめうなづき，さやうならバ，是を持つてお出と，例(れい)の玉手箱を渡されしかハ，（上方，噺本，立春噺大集，君竹 3，1776 年，噺本大系 10p.237）

(9) 客サア一ツのみな。げいチト是はおゝさへ。客マア／＼。（げい）さやうなら。ト三味せんをかゝへて居ながら，さかづきをとる。（江戸，洒落本，傾城買四十八手，真の手，1790 年，大系 59p.407）

サヨウナラ（バ）は離行行動を伴わずに使用可能であった段階から，徐々に離行行動を伴う段階へ変化していったと考える。そこで，話者がサヨウナラ（バ）を含む発話の直後に伴う行動に着目し，離行行動を伴う例が歴史的にどのように推移するかを調査した。

離行行動には次のような場合を含める。まず，その場を離れる行為（行く，出る，帰る，去る，別れる等）またはそれに準ずる行為（出かけるために「靴を履く」等）が明示される場合である。その他，「具体的な行動は描かれないが文脈から話者が場を離れたことがわかる場合」(10)，「サヨウナラ（バ）の発話者ではなく聞き手が場を離れる，すなわち発話者が相手を見送る場合」(11)，「結果として発話直後にその場を離れられなくとも，立ち去ろうとしたことが明白な場合」(12)も離行行動の該当例と見なす。

(10) 志「（略）死んだものは仕方がありませんからお念仏でも唱えてお上げなさい，左様なら」新「あれさ志丈さん，あゝ往(い)って仕舞った，お嬢が死んだなら寺ぐらいは教えてくれゝばいゝに，聞こうと思っているうちに行って仕舞った，（略）」（東京，小説，怪談牡丹燈籠，6，1884 年，青空文庫）

(11) ばんとう「（略）私(わし)が見舞(みめへ)に行(いつ)たら直(ぢき)に本復(ほんぶく)さ。ハイさやうなら　三人「アイト出てゆく（江戸，滑稽本，浮世風呂，3 上，1812 年，大系 63p.184）

(12) 孝助は，「さようならば御機嫌よろしゅう」と玄関の敷台を下(お)り草鞋を穿(は)こうとする，其の側へお徳はすり寄り袂(たもと)を控え，涙に目もとをうるましながら，「御機嫌様よろしく」と縋(すが)り付くを孝助は慰(なだ)め，善藏に送られ出立しました。（東京，小説，怪談牡丹燈籠，15，1884 年，青空文庫）

②後件が明示されないこと（後件不明示）は，サヨウナラ（バ）の後件の有無という統語的特徴である。後件が明示される場合，サヨウナラ（バ）は発話文頭または発話文中に位置することになる。接続表現サヨウナラ（バ）は接続という機能上，前件・後件が必須である。そのため，直後に語句・節等が続く位置（文頭・文中）に出現する場合が多いのである。前件は相手の発話内容であることもある。この場合，同一発話内に前件が存在しないということであり，サヨウナラ（バ）は文頭に位置することになる(13)。

(13) 中居そのヲイ／＼さあお二階(にけへ)へお出なんし東どこだ／＼そこゝに致しませうかね文何処(どこ)でもよしさそさようなら爰(こゝ)がお静(しつか)でよふござりませふ（再掲(1)）

一方，後件が明示されない場合（後件不明示）は発話文末または単独で使われる(14)(15)。

(14) 熊吉もはじまらぬやうすと見てとり熊ドレわたしも平さんさやうなら平まあヱヽじやないか（上方，洒落本，色深狭睡夢，上，1826 年，洒落本大成 27p.309，52-洒落 1826_01026，53290）

(15) 旦那ハテ，目出たいから買ふてこい。徳内左様ならと，徳内，徳利をもつて酒屋へ行，（江戸，噺本，馬鹿大林，1801 年，噺本大系 13p.315）

“別れの挨拶語”サヨウナラは接続の機能を果たさず前件・後件から独立している。そのため，直後に語句や節が続かない場合が多い。よって，後件不明示は“別れの挨拶語”サヨウナラに顕著な特徴であると言える。

次例のように，サヨウナラ（バ）の直後が人名のみの場合，その人名を後件（呼びかけ）と見なし，後件不明示には含まない。

(16) 娘が桟橋（さんばし）を渡ッて，いよいよ船へ乗り込もうとして，こちらをふり向いて，「叔父様，御機嫌よろしゅう。さようなら秀さん」ト言ッた声，名残りに残したその声がまだ四方に消えぬ内，姿は船の中へ隠れてしまッた。（東京，小説，初恋（矢崎嵯峨の舎著），1889 年，青空文庫）

以上，①②に基づき，サヨウナラ（バ）の歴史を記述する。

ただし，サヨウナラ（バ）がこれらの特徴を満たしたからといって，必ずしも“別れの挨拶語”と見なすことはできない。たとえば，(17)は離行行動の特徴を満たすが“別れの挨拶語”とは言えない。(18)も後件不明示の特徴を満たすが，明らかに“別れの挨拶語”ではない。(19)は離行行動・後件不明示どちらの条件も満たすが，「旦那」に言い渡された使いに行く場面であり，サヨウナラが「別れ」の意を表しているとは言えない。

(17) 藤「馬鹿（ばか）をいはずと早（はや）く行（いき）ねへ　由「さやうならば思（おも）ひきつてヘイ御機嫌（ごきげん）ようと立出（たちいづ）る（江戸，人情本，春色梅児与美，8，1833 年，国語研蔵 11 オ，53-人情 1833_02008，41720）

(18) 客サア一ツのみな。げいチト是はおゝさへ。客マア／＼。（げい）さやうなら。

ト三味せんをかゝへて居ながら，さかづきをとる。（再掲(9)）

(19) 旦那ハテ，目出たいから買ふてこい。徳内左様ならと，徳内，徳利をもつて酒屋へ行，（再掲(15)）

離行行動・後件不明示は“別れの挨拶語”サヨウナラに必要な条件ではあるが，これらを満たせば必ず“別れの挨拶語”になるわけではない点で，十分条件とは言えない。

本章では“別れの挨拶語”サヨウナラに顕著な特徴として，サヨウナラ（バ）の変化過程を捉えやすくするためにこれらの特徴を設定したにすぎない。“別れの挨拶語”サヨウナラの確例は，あくまで(5)〜(7)のように形式それ自体で「別れ」の意を表すと解釈できる例である。離行行動・後件不明示の特徴を満たすことがすなわち“別れの挨拶語”サヨウナラであるということにはならない。

５．調査結果

５．１　離行行動の特徴を満たす例

離行行動を伴うサヨウナラ（バ）の推移を示す（表 1)。

表1）離行行動の特徴を満たす例の歴史的推移

			近世					近代	
			1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	1876-1900	1901-1925
上方関西	該当例	用例数	0	11	4	2	2	-	8
		百分率	0.0%	26.2%	16.0%	20.0%	12.5%	-	72.7%
	全用例数		8	42	25	10	16	-	11
江戸東京	該当例	用例数	3	11	29	7	11	15	15
		百分率	11.5%	26.8%	22.8%	17.5%	30.6%	60.0%	83.3%
	全用例数		26	41	127	40	36	25	18

※「全用例数」は当該時期におけるサヨウナラ（バ）の全用例数を指す（表2・3同様）。また、調査資料が得られなかった箇所は「-」で表す（表2 以降同様）。

表 1 から近世上方では 1776〜1800 年以降，離行行動の例が現れることが看取される(20)。

(20) 去ル人，なんぞ風ウかわりの道具もとめんと，壱丁目筋うろり／＼と見廻り，将棊（しやうぎ）ばんの両めんハ有まいかと尋る。道具やもあきれながら，ハイ，出来合ハご

ざりませぬ。外に何ぞ御覧といふ。買人さやうならバ先よしと，又北へ行。（上方，噺本，立春噺大集，君竹 3，1776 年，噺本大系 10p.239）

近世では，全体に対して該当例の占める比率はあまり高くなく，全体の 1〜3 割程度で推移する。この期はむしろ離行行動以外の行動を伴うことが多い(21)(22)。

(21) （おのぶ）髪ハ出来たが，かねがたらぬよつて，かりにいかねバならぬわいなといへバ，おはぐろの鉄漿ととりちがへ，そんならわたしが所にも少〻あるよつて，遠慮ハない事。たくさんに御つかいなされといへバ，是ハ／＼，さよならおかしなさるかとはいる。（上方，噺本，庚申講，4，1797 年，噺本大系 13p.139）

(22) 五どふでやけた手がたではあるし。はなしのたねにうつくしものゝねきで。寐て見ましよ十それもよかろ中ゐそれはよろしうござりませう。さやうなら御酒はまはして取ませうトさかづきをあづかり。小めろをよびふたりしてそこらをかたづける。（上方，洒落本，箱まくら，上，1822 年，洒落本大成 27p.122，52-洒落 1820_01048，66930）

(21)(22)では「はいる」「あづかる」「よぶ」「かたづける」等の行動が明示される。近世上方では，サヨウナラ（バ）は離行行動に限らず範列的に様々な行動を伴えたと言える。

近代関西では，離行行動が全体の 7 割以上を占めるようになる(23)(24)。

(23) 武は幾度か點頭いてゐたが，振り返つて私に，『左様なら』と云つて，裏門から歸つて行つた。（関西，小説，月夜，6，1909 年，新小説 1909-4p.21）

(24) 『さいなら，…』『左様なら大けに，…』近所の人々は，口々に挨拶して，長い土間をぞろぞろと店先きから歸つて行かうとするので，（関西，小説，狐火，4，1917 年，太陽 1917-4p.274，60M 太陽 1917_04039，91000，91080）

資料が限られるため推測の域を出ないが，近代関西では「サヨウナラ（バ）〜」と発話すればその場を離れるということが定着しつつあった可能性がある。

近世江戸における離行行動の初出は(25)である。

(25) 大今に。来よふサア／＼後に／＼忠 幸 長さよふなら。御機嫌よふ里琴お休ねんしよ大なんと沢井氏。さつき来た。芸者とやらは。何ンだかすつきり。おもしろふもない。ものたの沢それでも。あれは忠治や幸治が。よつ程。勤ましたのサ（江戸，洒落本，南閨雑話，部屋の体，1773 年，洒落本大成 6p.49，52-洒落 1773_01007，30970）

(25)では離行行動が明示的でない。しかし，「大じん」「忠治・幸治郎・長七」の別れのやりとりの後，「大じん」「沢井」の話題は「芸者」という全く別のものに移る。また，「忠治・幸治郎・長七」はこの後一度も登場しない。文脈上，離行行動が取られたことは明白である。

近世江戸では，該当例の全体に占める比率は上方同様 1〜3 割程度で推移する。この期は離行行動以外の行動が目立つ(26)〜(28)。

(26) 喜のそのおせけへもすんだ事だそうだ。もふこゝ切リの事さ女房さやうなら。よふござりますけどもト立て神だなのよこ手かたなかけへわきざしをかけ。しよくだいをともし手あぶりをかたよせて。盃（さかづき）だいをまん中へ出ス（江戸，洒落本，総籬，2，1787 年，洒落本大成 14p.48，52-洒落 1787_01065，100650）

(27) 初「おむさん，お背中（せなか）をお出（だ）し遊（あそば）せ。お流（なが）し申ませう（略）初「サア／＼お出（だ）し遊（あそ）ばせ　むす「ハイさやうならお出（だ）し遊（あそば）しませう。ヲヽあつ　おさめ「ヲヽあぶないどうお仕（し）だ（江戸，滑稽本，浮世風呂，3 下，1812 年，大系 63p.205）

(28) 卒八「（略）ヤレ／＼草臥（くたびれ）た／＼，是でまづみんな片付（かたづい）た。」ト座になをり，「ヘイ左様なら，おやくそくの，鉢肴（はちざかな）をさし上ゲます。」ト，今の車をいだし，（江戸，滑稽本，花暦八笑人，3 上，1821 年，小池 1942:126）

(26)(28)では「かける」「ともす」「いだす」等の行動が明示される。(27)では行動が明示されていないが，「むす」の発話内容から「背中を出す」行動が取られたことは明白である。近世江戸では上方同様，サヨウナラ（バ）の直後に離行行動以外の様々な行動を取れたと言える。

近代東京では全体の 6〜8 割以上が離行行動を伴う例である(29)(30)。

(29) 兜の緒を緊めてくれる母親が涙を噛み交ぜて忠告する。ても耳の底に残るように懐かしい声，目の奥に止まるほどに眤しい顔をば「さようならば」の一言で聞き捨て，見捨て，さて陣鉦や太鼓に急き立てられて修羅の街へ出かければ，（東京，小説，武蔵野（山田美妙著），上，1887 年，青空文庫）

(30) 「（略）九時までに来なくってはいかん。日本堤分署です。――浅草警察署の管轄内の日本堤分署です。――それじゃ，さようなら」と独りで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。（再掲(7)）

以上，離行行動を伴うサヨウナラ（バ）について記述した。該当例は東西ともに 18 世紀後半以降出現し，近代になるとまとまって見られるようになることがわかった。先行論では 19 世紀初期頃に“別れの挨拶語”サヨウナラが出現するとされる（1 節）。このことを踏まえれば，当該時期における離行行動の比率が低いことは注目される。19 世紀初期頃にサヨウナラが「挨拶表現として定着した」（田島 2018:14）のであれば，離行行動を伴う例が 19 世紀初期以降増加傾向にあってもよい。しかし，該当例の比率が増加するのは，近代になってからである。サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の変化が明確になるのは，やはり近代以降と考えるべきであろう。

５．２　後件不明示の特徴を満たす例

後件不明示のサヨウナラ（バ）の推移を示す（表 2）[3]。

近世上方では後件不明示の該当例は少なく，全体の 1 割に満たない時期もある(31)～(33)。

---

[3] 次例は後件が存在するものと見なした。

(オ) （化物売り）ばけものや／＼，ばけものや／＼。化物よ。ハイ，御らふじませと，ズイト出したハ**（絵）**（客）アヽ今時取らぬ所だ。ズツトゑいのを出せ／＼。（化物売り）ハイ，左様なら**（絵）**（客）エヽナンノこつたナ。コリヤなひ所だ。イキナを出して見せや。（江戸，噺本，仕形噺，1773 年頃，噺本大系 9p.302）

化物売りがサヨウナラ発話直後に売り物の化物を提示する場面である。実際のテキストでは，用例の**（絵）**の箇所に化物の絵が挿入されている。後件が言語化されておらず，一見，後件不明示の例のようにも見える。しかし，『仕形噺』は「文中に文字で書くべき所を絵で示す新趣向の噺本」（噺本大系 9p.327）であり，絵が文字と同等の働きを担うと考える。このように考えれば，(オ)では化物の絵がサヨウナラの後件に相当することになる。よって，本章では後件不明示の例として計上していない。

表2）後件不明示の特徴を満たす例の歴史的推移

			近世					近代	
			1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	1876-1900	1901-1925
上方関西	該当例	用例数	0	2	1	1	3	-	5
		百分率	0.0%	4.8%	4.0%	10.0%	18.8%	-	45.5%
	全用例数		8	42	25	10	16	-	11
江戸東京	該当例	用例数	2	5	21	4	7	12	18
		百分率	7.7%	12.2%	16.5%	10.0%	19.4%	48.0%	100%
	全用例数		26	41	127	40	36	25	18

(31) 新五「イザ，お三人。」賴母「御老分なれば，新五左殿。」亘利齋宮「先(ま)づ／＼。」新五「左様ならば。」ト皆〻目礼(もくれい)，こなし有(あつ)て，長門之介が前を丁寧(ていねい)に辭儀(じぎ)して通り，花道へ行(い)て立(たち)並(なら)び，浪平に鳥渡(ちよつと)會釋(えしやく)して，靜(しづか)に向ふへ靜々(しづ〳〵)と這入(はいる)。（上方，歌舞伎，韓人漢文手管始，1789 年，大系 53p.281）

(32) 熊吉もはじまらぬやうすと見てとり熊ドレわたしも平さんさやうなら平まあエヽじやないか（再掲(14)）

(33) 中どふでもおかへりでムリ升かへイさようなら手大きにごくろう（上方，滑稽本，穴さがし心の内そと，2，幕末頃，前田 1974:464）

1901～1925 年の関西では後件不明示の例が増え，4 割以上を占めるようになる(34)(35)。

(34) 『さいなら。』『御機嫌さんで。』『また來まッせ。……待つておいでやすいな。』鶯の雛は，船の上から小(ち)ひさな口を開(あ)けて，こんなことを，とり〴〵に言ひ／＼した。（関西，小説，守護神，3，1915 年，中央公論 1915-4p.213）

(35) 文字盤の剥げかゝつた古い／＼八角時計が，頭の上で四時を打つと，お針子たちは待ち兼ねてゐたやうに縫ひ物を取り片付け，『お師匠(し)さん，さいなら。』と，銘々におちよぼ口(ぐち)をしながらお辭儀して，赤い帶を見せつゝ，裏口から歸つて行つた。（関西，小説，髭，5，1918 年，早稲田文学 1918-1p.113）

後述するように，同時期の東京語資料では後件不明示の例が 10 割を占める。この点を踏まえると，1901～1925 年関西の後件不明示の比率は決して高くはない。

近世江戸では 1775 年以降，後件不明示の例が現れる。上方同様，比率は 1～2 割程度と低い(36)～(38)。

(36) 綱マア呑なんし後アイ左様なら半サア出しなせへ後つぎなさんな（江戸，洒落本，甲駅新話，1775 年，洒落本大成 6p.301，52-洒落 1775_01010，54360）

(37) （おみつ）「（略）折角お里さんの志だから一ツ呑なせへな（お照）「ハイ／＼さやうならばト盃をうける（江戸，人情本，明烏後の正夢，5-15，1824 年，東大国語研蔵，53-人情 1824_08014，47280）

(38) 髪結ひは，鬢盥を直ぐに引き下ゲ，「旦那さん，左様なら」と忙がしそうに出て行く。（江戸，滑稽本，妙竹林話七偏人，3 上，1857 年，興津 1983 上:196）

近代東京では 1876～1900 年で約半数，1901～1925 年で全用例が該当例であった(39)(40)。

(39) 孝「決して忘れません，さようならば」と孝助は母に別れて角屋へまいり（東京，小説，怪談牡丹燈籠，21，1884 年，青空文庫）

(40) 車夫が梶棒をあげようとする時女将が祝儀袋をその手に渡すのが見えた。「さようなら」「お大事に」はばかるように車の内外から声がかわされた。（東京，小説，或る女，26，1911 年，青空文庫）

近代になって後件不明示の比率が増加する点は関西と同様である。しかし，1901～1925 年の関西では後件不明示の全体に占める比率は 5 割に満たない。このことを考慮すれば，近代東京における後件不明示の増加の度合いはかなり大きいと言える。ただし，前述したように，関西・東京語資料には注意すべき点があり（3 節），比較の条件が統一されていない。本節における比較の結果は，あくまで目安としてのものである。

以上，後件不明示の特徴を満たすサヨウナラ（バ）について記述した。該当例は東西ともに 18 世紀後半から出現し，近代でまとまって見られるようになること，東京の方が関西より増加の度合いが大きいことがわかった。離行行動同様，先行論で“別れの挨拶語”サヨウナラが出現するとされた 19 世紀初期頃において，後件不明示の比率は低い。19 世紀初期にサヨウナラ（バ）が“別れの挨拶語”として定着しているならば，当該時期の後件不明示の比率が高くてもよいはずである。しかし，後件不明示の比率が高くなるのは近代以降で

ある。5.1 節の調査結果と併せて，“別れの挨拶語”サヨウナラの変化が明確になるのは近代以降であると言える。

５．３　離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例

前節までは，離行行動・後件不明示それぞれの特徴を満たすサヨウナラ（バ）の歴史を記述した。本節では両特徴を同時に満たす例の歴史を記述する。これには別々に記述したそれぞれの指標の関連性を見出す意図がある。サヨウナラ（バ）全用例に対する該当例の歴史を示す（表 3）。

表3）離行行動・後件不明示の特徴をともに満たす例の歴史的推移

			近世					近代	
			1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	1876-1900	1901-1925
上方関西	該当例	用例数	0	2	0	0	0	-	4
		百分率	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	-	36.4%
	全用例数		8	42	25	10	16	-	11
江戸東京	該当例	用例数	0	0	15	1	5	11	15
		百分率	0.0%	0.0%	11.8%	2.5%	13.9%	44.0%	83.3%
	全用例数		26	41	127	40	36	25	18

近世上方では(41)(42)が唯一の例である。

(41) 去人，道傍(みちばた)の干売(ほしうり)見せへ立寄，此辺に見通(とを)しさまがござりますときゝましたが，向ひの山伏(やまぶし)さまでござりますかと尋ぬれバ，ハイ，左やうでござりますけれど，あれハ大へたてござるゆへ，外をお頼なされませときいて，左やうならバと行過るを，（上方，噺本，夕涼新話集，4，1776 年，噺本大系 10p.306）

(42) 新五「イザ，お三人。」頼母「御老分なれば，新五左殿。」亘利齋宮「先(ま)づ／＼。」新五「左様ならば。」ト皆〻目礼(もくれい)，こなし有(あつ)て，長門之介が前を丁寧(ていねい)に辭儀(じぎ)して通り，花道へ行(い)て立(たち)並(なら)び，浪平に鳥渡(ちよつと)會釋(えしやく)して，靜(しづか)に向ふへ靜々(しづ〳〵)と這入(はい)る。（再掲(31)）

近世上方では，サヨウナラ（バ）を含む発話の直後に様々な行動を伴えた（5.1 節）。

(41)「行過る」・(42)「向ふへ静々と這入」も，その様々な行動の 1 つであろう。“別れの挨拶語”として使用されたというよりも，サヨウナラバが偶然，その場を離れる行為とともに使用されただけであると考える。

近代関西では一定数該当例が見えるが，比率は 36.4%とそれほど高くない(43)。

(43) 文字盤の剥げかゝつた古い／＼八角時計が，頭の上で四時を打つと，お針子たちは待ち兼ねてゐたやうに縫ひ物を取り片付け，『お師匠さん，さいなら。』と，銘々におちよぼ口をしながらお辭儀して，赤い帯を見せつゝ，裏口から歸つて行つた。（再掲(35)）

近世江戸では 19 世紀以降，該当例が見られるようになる(44)。

(44) 旦那ハテ，目出たいから買ふてこい。徳内左様ならと，徳内，徳利をもつて酒屋へ行（再掲(15)）

近世江戸では 2 特徴を同時に満たす例が全体の 1 割程度とあまり多くないが，近代東京では該当例の比率が高くなる(45)(46)。特に 1901～1925 年では，同時期の関西（36.4%）と比べて，使用率が 83.3%と著しく高い（繰り返すが，条件の整った比較ではない）。

(45) （小）わたしも少し用があるから。イヽエ。また後にでなほしてこやうヨ。左様ならツと棄ぜりふ。小年ハいそしく會釋して。小褄かゝげてたちかへりぬ。（東京，小説，当世書生気質，16，1885-86 年，晩青堂 p.346）

(46) 「（略）九時までに来なくってはいかん。日本堤分署です。――浅草警察署の管轄内の日本堤分署です。――それじゃ，さようなら」と独りで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。（再掲(7)）

以上，離行行動・後件不明示を同時に満たす例について記述した。東西どちらの地域においても概ね，近世では該当例が少なく，近代に増加するという結果を得た。なお，東京の方が関西に比べて使用率が高い。前節までの記述から，離行行動・後件不明示それぞれの特徴を満たす例は近代以降増加することがわかっている。本節の結果は，それぞれの特

徴の歴史と軌を一にするということである。また，近代特に 20 世紀初期に離行行動や後件不明示の特徴を満たす例が増加することは，“別れの挨拶語”サヨウナラの確例が 20 世紀初期に出現すること（2 節）と矛盾しない。

それでは，調査結果の見方を変えてみると，どのような結果が得られるだろうか。表 3 では，サヨウナラ（バ）全用例数を分母とし，離行行動・後件不明示を同時に満たす例の比率を示した。それに対し次の表 4 では，後件不明示の特徴を満たすサヨウナラ（バ）のうち，離行行動の特徴を満たす例の比率を示す。

表4）後件不明示のうち離行行動の特徴も満たす例の歴史的推移

			近世					近代	
			1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	1876-1900	1901-1925
上方関西	該当例	用例数	0	2	0	0	0	-	4
		百分率	-	100%	0.0%	0.0%	0.0%	-	80.0%
	全用例数		0	2	1	1	3	-	5
江戸東京	該当例	用例数	0	0	15	1	5	11	15
		百分率	0.0%	0.0%	71.4%	25.0%	71.4%	91.7%	83.3%
	全用例数		2	5	21	4	7	12	18

※「全用例数」は「後件不明示」を満たすサヨウナラ（バ）の数を表す。その数値は表2 における「該当例」の「用例数」に一致する。

近代関西では後件不明示 5 例のうち 4 例が離行行動も満たしている。サヨウナラ（バ）全用例から見れば 2 特徴を満たす例の比率は低い（表 3）。一方，後件不明示を分母にすると該当率は 8 割を占める。近代関西では後件不明示のサヨウナラ（バ）のほとんどが離行行動を伴う場面で使用されるということである。

近世江戸では時期による多寡はあるが，概ね 19 世紀初期以降，後件不明示を満たす例のうち離行行動も満たす例の比率が高い。サヨウナラ（バ）全用例を分母とする，2 特徴を同時に満たす例の比率は低い（表 3）。対して，後件不明示を分母とした該当例の比率は 19 世紀初期の時点で既に高い。すなわち，19 世紀初期以降の江戸では，後件不明示を満たすサヨウナラ（バ）のほとんどが離行行動を伴う場面で使用されるということである。

19 世紀初期は，先行論で“別れの挨拶語”が見られるようになるとされた時期である。しかし，当該時期の例を“別れの挨拶語”であると断定するのは早計である。本章の調査から言えば，江戸における 19 世紀初期は，離行行動を伴う場面で，後件不明示の形のサヨウナ

ラ（バ）の使用率が増加する時期ということになる。“別れの挨拶語”ではなく，後件を言語化しない形のサヨウナラ（バ）が，その場を離れたり離れる人を見送ったりする場面で使用され始めたにすぎない。近世ではサヨウナラ（バ）全用例数に対する該当例の数も少なく，“別れの挨拶語”として定着した段階とは言えないだろう。

また，その使用率の増加は，上方関西と比べ江戸東京で先行する。従来，“別れの挨拶語”サヨウナラの東西差については断片的な指摘があるのみであり（前田 1985，森田 1997），またその見解も一致していなかった。本章では，“別れの挨拶語”サヨウナラに顕著な特徴を持つ例の増加が江戸東京で先行することを統計的に実証した。

６．おわりに

本章では接続表現サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を記述した。具体的には，“別れの挨拶語”サヨウナラに顕著な次の特徴を指標とし，用例を観察した。

①発話直後にその場を離れる行動（離行行動）を伴うこと

②後件が明示されないこと（後件不明示）

本章では次の結果を得た。**①離行行動**を満たすサヨウナラ（バ）は近世では少なく，近代になると増加する。**②後件不明示**を満たすサヨウナラ（バ）も近世では少なく，近代になると増加する。サヨウナラ（バ）全用例に対して**①離行行動・②後件不明示**を同時に満たす例も近世では少なく，近代になると増加する。**②後件不明示**の特徴を満たすサヨウナラ（バ）のうち**①離行行動**の特徴も満たす例の比率は，江戸では 19 世紀初期以降高い。このように具体的指標を定めることで，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を精緻化した。

また，各特徴の使用率は上方関西よりも江戸東京の方が高いことが多く，使用率が高くなる時期も江戸東京で先行する。本章では，従来断片的な指摘のみであったサヨウナラ（バ）の頻用地域について，統計的に実証した。これにより，接続表現の地理的分布について把握する一助となったと考える。

以上の議論の確度を高めるには，資料の質・量ともに増やした調査を行い，さらに検討を重ねる必要がある。

本章で扱った離行行動や後件不明示の特徴だけでは，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”

化について論じるには不十分である。序章で述べたように，接続表現のうち“別れの挨拶語”化するのは，サラバやサヨウナラ（バ）といった順接仮定条件を表す形式のみである。いずれも構成要素である指示表現（サ・サヨウ等）や接続辞（バ・ナラ（バ）等）の機能が，“別れの挨拶語”化の過程で不明瞭化していく。本章で“別れの挨拶語”サヨウナラの確例とした 20 世紀初期の例(5)〜(7)も，指示表現や接続辞の機能が不明瞭化していると考える。よって，“別れの挨拶語”の成立過程について論じるには，指示詞や条件表現といった文法的特徴を指標とすべきである。また，本章ではあまり触れていないが，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化について論じるには，接続詞の段階を想定すべきである。指示詞や条件表現との関連性への言及，接続詞化の条件の設定と過程の観察は，次章以降で扱う。

使用テキスト

一部記号で示す。※刊行・初演等の地域が不明の資料や上方関西・江戸東京に該当しない資料は除外

◎…**国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2020.03, 中納言 2.5.2）**https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2020 年 7 月 20 日確認）短単位検索，①キー: (語彙素読み="サヨウ" AND 品詞 LIKE " 形状詞%")　※うちナラ（バ）を後接する例を目視で確認，②キー: 語彙素読み="サヨウナラ"　※サンプル ID，開始位置，permalink はバージョン 2023.03　※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

○…**『新編日本古典文学全集』小学館**：ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」https://japanknowledge.com/（2020 年 8 月 10 日確認）詳細（個別）検索，キー「さやう」「左様」「さよふ」「さよなら」　※うちナラ（バ）を後接する例を目視で確認

△…**『日本古典文学大系』岩波書店**：国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.j p/~nkbthdb/（2019 年 7 月 8 日確認）キー「さやう」「左様」「左やう」「さ様」　※うちナラ（バ）を後接する例を目視で確認

□…**武藤貞夫・岡雅彦 編『噺本大系』東京堂出版**：国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.j p/infolib/（2020 年 7 月 30 日確認）キー「さやう」「左様」「さやふ」「さよう」「さよふ」「左やう」「さ様」「さよなら」　※うちナラ（バ）を後接する例を目視で確認

▲…洒落本大成編集委員会編（1978-1988）『洒落本大成』中央公論社

■…国立国語研究所・東京大学国語研究室所蔵本

▽…「青空文庫 Aozora Bunko」https:// www.aozora.gr.jp/（2023 年 11 月 22 日最終閲覧）

◇…『CD- ROM 版新潮文庫の 100 冊』新潮社

●**上方**[1751-1775]【**噺本**】軽口片頬笑，軽口大黒柱…□，【**歌舞伎**】幼稚子敵討…△，【**洒落本**】異本郭中奇譚…◎，[1776-1800]【**浄瑠璃**】新版歌祭文，繪本太功記…△，【**噺本**】夕涼新話集，年忘噺角力，立春噺大集，時勢話綱目，歳旦話，滑稽即興噺，軽口筆彦噺，鳩潅雑話，雅興春の行衛，庚申講，新話違なし，曲雑話…□，【**歌舞伎**】韓人漢文手管始…△，【**洒落本**】風流裸人形，北華通情，南遊記…◎▲，[1801-1825]【**噺本**】笑の友，新撰勧進話，麻疹噺，玉尽一九噺，会席噺袋，臍の宿かえ，花競二巻噺，春興噺万歳…□，【**洒落本**】嘘之川，竊潜妻，誰が面影，粋の曙，箱まくら…◎▲，[1826-1850]【**噺本**】落噺顋懸鎖，落噺千里藪，大寄噺の尻馬初編…□，【**洒落本**】色深狭睡夢…◎▲，[1851-1875]【**滑稽本**】諺臍の宿替…武藤禎夫 校訂・解説（1992）『諺臍の宿替』太平書屋，穴さがし心の内そと…前田勇（1974）「穴さがし心の内そと」近代語学会 編『近代語研究』4 武蔵野書院 pp.429-484.

●**関西**[1901-1925]【**小説**】月夜…新小説 1909/4，木像…読売新聞 1910/5-7，筍婆…中央公論 1914/4，守護神…中央公論 1915/4，二代目…中央公論 1916/9，狐火…◎太陽 1917/4，髭…早稲田文学 1918/1

●**江戸**[1751-1775]【**噺本**】都鄙談語三篇，仕形噺，御伽噺，坐笑産，近目貫，稚獅子…□，【**洒落本**】郭中奇譚，南閨雑話，甲駅新話…◎▲，[1776-1800]【**浄瑠璃**】碁太平記白石噺…○，伊賀越道中雙六…△，【**噺本**】乗合舟，気のくすり，大御世話，年の市，春帖咄，福茶釜，間女畑，喜美談語，詞葉の花，無事志有意…□，【**洒落本**】当世左様候，深川新話，総籬，仕懸文庫…◎▲，道中粹語録，傾城買四十八手，錦之裏…△，【**黄表紙**】敵討義女英…△，[1801-1825]【**噺本**】馬鹿大林，滑稽好，落咄臍くり金，一口饅頭，御贔屓咄の親玉，花の咲，珍学問，笑府商内上手，落咄腰巾着，諢話江戸嬉笑，山の笑，富久喜多留，落咄熟志柿，落咄屠蘇機嫌，一雅話三笑，無塩諸美味，落噺屠蘇喜言…□，【**歌舞伎**】名歌徳三舛玉垣，お染久松色讀販…△，【**洒落本**】花街鑑…◎▲，【**滑稽本**】東海道中膝栗毛，浮世床，酩酊気質…○，浮世風呂…△，花暦八笑人（春の部～三編追加）…小池藤五郎 校訂（1942）『花暦八笑人』岩波書店（以下，小池 1942），【**人情本**】明烏後の正夢…○，[1826-1850]【**噺本**】十二支紫，延命養談数，百歌撰，笑語草かり篭，落噺年中行事，はなしの種，百面相仕方ばなし，昔はなし…□，【**洒落本**】花街寿々女…◎▲，【**滑稽本**】花暦八笑人（四編上巻～五編下之巻）…小池（1942），【**人情本**】仮名文章娘節用，春色梅児与美，恋の花染，春色辰巳園，花廼志満台…◎■，[1851-1875]【**噺本**】春色三題噺初編…□，【**歌舞伎**】小袖曽我薊色縫…△，【**滑稽本**】妙竹林話七偏人…興津要 校注（1983）『妙竹林話七偏人（上）（下）』講談社，安愚楽鍋…◎国立国会図書館所蔵本，【**人情本**】春色連理の梅，春色江戸紫…◎■，春色恋廼染分解…浅川哲也（2012）『春色恋廼染分解翻刻と総索引』おうふう.

●**東京**[1876-1900]【**小説**】怪談牡丹灯籠，武蔵野，初恋，金色夜叉…▽，大つごもり，十三夜，たけくらべ，わかれ道…◇，当世書生気質…坪内雄蔵（1885）『当世書生気質』晩青堂（国立国会図書館デジタルコレクション（https:// dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/887445/），書誌 ID：000000512081，識別子(DOI)：10.11501/887445，2023 年 11 月 22 日最終閲覧），[1901-1925]【**小説**】吾輩は猫である，或る女…▽，友情，痴人の愛…◇，其面影，三四郎…『CD-ROM 版明治の文豪』新潮社.

●**その他**【**小説**】桑の実…▽，【**辞書**】和英語林集成…飛田良文・李漢燮 編（2000）『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索』（第二巻）港の人，同（2001）『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』（第三巻）港の人.

第５章 サヨウナラ（バ）の接続詞化

―指示性と場面展開機能に着目して―

１．はじめに

サ＋ヨウ＋ナラ（＋バ）という構成要素から成っていた接続表現サヨウナラ（バ）は，順接仮定条件の機能を希薄化させ，後にサヨウナラという形式自体で「別れ」の意を帯びるようになった。これに該当する例が 20 世紀初期頃に見える(1)～(3)。

(1) おくみは坊ちやんをつれて門口で見送つた。「さ，こちらへ入らつして左様ならをなさいまし。(略)」と，おくみは坊ちやまが車の背中の漆塗へ顔を写してゐられるのをこちらへ引き放した。（小説，桑の実，8，1913 年，青空文庫）傍点原文ママ

(2) おくみは久男さんを負(おぶ)つて後から門口まで附いて出た。「坊ちやんがお父さまに左様ならでございますつて。」と，こちらから言ふと，（同）

(3) 「（略）九時までに来なくってはいかん。日本堤分署(にほんづつみぶんしょ)です。――浅草警察署の管轄内(かんかつない)の日本堤分署です。――それじゃ，さようなら」と独(ひと)りで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。（東京，小説，吾輩は猫である，9，1905 年，青空文庫）

(1)～(3)のような“別れの挨拶語”サヨウナラには，順接仮定条件の機能はない。構成要素であるサの指示機能は不明瞭化していると言える。

なお，指示性は「なくなる」のではなく，あくまでも「不明瞭」である。“別れの挨拶語”サヨウナラは一見指示性がないように思える。しかし，出会った人々が何らかの相互行為を行った後でなければ別れの挨拶を交わすことはできない。“別れの挨拶語”には先行する状況が必ず存在するということである。接続表現サヨウナラ（バ）が先行文脈を具体的に指示するのに対し，“別れの挨拶語”サヨウナラはそれまでの状況を一括し，漠然と指示すると考える。このように考えると，“別れの挨拶語”サヨウナラの指示性は「ない」のではなく，「不明瞭」と考えるのが適切である。先行する何かを受けるという点では接続表現

サヨウナラ（バ）も“別れの挨拶語”サヨウナラも共通しており，連続性が見出せる。

また，サヨウナラ（バ）の用例を観察すると，次のような注目すべき例が見られる。

(4) 卒八「（略）ヤレ／＼草臥(くたびれ)た／＼，是でまづみんな片付(かたづい)た。」ト座になをり，「ヘイ左様なら，おやくそくの，鉢肴(はちざかな)をさし上ゲます。」ト，今の車をいだし，（江戸，滑稽本，花暦八笑人，3 上，1821 年，小池 1942:126）

(4)のサヨウナラは明らかに“別れの挨拶語”ではない。一方，サの明瞭な指示対象もない。直前の自身の発話（波線部）は自身の経験した既実現事態を表しており，順接仮定条件の前件にはなりにくい。よって，(4)のサヨウナラは順接仮定条件の接続表現とも異なる。

これは，もともと「サ＋ヨウ＋ナラ（＋バ）」と個々の要素に分析できたサヨウナラ（バ）が，機能的に一語の接続詞として確立した段階であると考える。つまり，前者の段階ではサが持つ指示の機能が明瞭であるが，後者ではサは語の一部でしかなく，もとの機能は不明瞭化しているということである。序章で触れたように，前者を「接続表現」，後者を「接続詞」と呼んで区別する。接続詞サヨウナラ（バ）は，接続表現サヨウナラ（バ）が“別れの挨拶語”化する過渡的な段階であろう。

それでは，接続表現サヨウナラ（バ）が順接仮定条件を表すのに対し，接続詞サヨウナラ（バ）はどのような機能を持つのだろうか。(4)では「片付け」という状況を一区切りし，「鉢肴を出す」という新たな場面へと展開していることが読み取れる。このように状況を区切り，新しい場面へと展開する機能（以下，場面展開機能）が，接続詞サヨウナラ（バ）が持つ機能であると考える。

“別れの挨拶語”サヨウナラも，その場の状況を区切り，「離行」という新たな場面へと展開する機能を持つと捉えられる。この点で場面展開機能を有していると言える。水谷（1982:23）も「別れの言語行動は，それまでの行動への区切りを示す役割」を担い，「その後の行動への働きかけの機能を持つと考えるべきではないか」と述べる。この役割が本章の場面展開機能と同質のものかは検討を要するが，大局的には“別れの挨拶語”に「状況の区切り」のような働きがあることは認められよう。

以上を踏まえ，接続詞サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を各段階における指示性・機能という観点から捉えると表 1 のようになる。

表1）サヨウナラ（バ）の変化過程

段階	言語形式	指示性	機能
分析的（サ+ヨウ＋ナラ（＋バ））な段階	接続表現サヨウナラ（バ）	明瞭	順接仮定条件
機能的に一語化した段階	接続詞サヨウナラ（バ）	不明瞭	場面展開機能
それ自体で「別れ」の意を表す段階	“別れの挨拶語”サヨウナラ（バ）	不明瞭	場面展開機能

接続詞サヨウナラ（バ）と“別れの挨拶語”サヨウナラは，指示性が不明瞭であることと場面展開機能を持つことが共通する。このことから既述のように，接続表現サヨウナラ（バ）は直接“別れの挨拶語”化したのではなく，指示性が不明瞭化し，場面展開機能を持つようになる段階を経て“別れの挨拶語”化したことが窺える。このことは，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化を論じるにあたり，接続表現から接続詞への変化について解明する必要があることを示唆する。そこで本章では，接続表現サヨウナラ（バ）の接続詞化の過程について記述することを目的とする。特に，第 2 章でも用いた以下の観点を採用する。

①サヨウナラ（バ）の構成要素であるサヨウの指示性が不明瞭であること

②サヨウナラ（バ）が場面展開機能を有すること

サヨウナラ（バ）が時代の断絶なく見られるようになるのは 17 世紀後半以降である。また，第 4 章によれば，“別れの挨拶語”サヨウナラの特徴に合致する例が増加してくるのは近代（19 世紀後半～）になってからである。そこで 17 世紀後半以降 19 世紀半ば頃までのサヨウナラ（バ）の様相を見る。

２．指示性の不明瞭化

２．１　調査の観点

本節では「指示性明瞭」から「指示性不明瞭」への変化過程を調査する。しかし，指示性が明瞭か不明瞭かを文脈解釈のみで判断するのは困難である。そこでまず，用例を客観的に分類するための指標を設ける。用例の出現状況に照らして設けるため，第 2 章で用いた基準とは異なることを予め断っておく。

サヨウナラ（バ）が指示性を有する場合，指示対象は通常サヨウナラ（バ）の前方に現れる。そこでサヨウナラ（バ）の直前の文脈に着目する。文脈は「言語的文脈」と「非言

語的文脈」に分けられる。前者はサヨウナラ（バ）直前に発話として言語化された文脈がある場合(5)(6)，後者はサヨウナラ（バ）直前に言語化された文脈がなく，地の文等で何らかの状況が示される場合である(7)。言語的文脈はさらに「自分の発話」(6)と「相手の発話」(5)に分類できる。

(5) 幸何に致しませふ沢義太夫が。よかろふ茶左様なら。何太夫が宜ふござりませふ（江戸，洒落本，南閨雑話，坐舗の体，1773 年，洒落本大成 6p.47，52-洒落 1773_01007，14930）**言語的文脈 相手の発話**

(6) 「（略）やつぱり拾ふた薬にして。心置なふ養生さしたが。ハよさそふに思はるゝ」と。聞て平作感じ入。「アヽそふじや有た。ヱヽお前様は恐ろしい。發明なお人じやの。そふ聞ましては申様もござりませぬ。左様ならもふ歸りましよ。旦那様おさらば」（江戸，浄瑠璃，伊賀越道中雙六，沼津の段，1776 年，大系 99p.348）**言語的文脈 自分の発話**

(7) きくとぢトいふ十五六のしんぞう。吉六があとに付てこゝにきたる吉さやうなら一寸お盃トきまりの手つゞきあつて（江戸，洒落本，花街寿々女，上，1826 年，洒落本大成 27p.270，52-洒落 1826_01063，73900）**非言語的文脈**

サヨウナラ（バ）の直前の文脈という観点で，地域別の推移をまとめた（表 2）。

表2）サヨウナラ（バ）の直前の文脈

			1676-1700	1701-1725	1726-1750	1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	計
上方	言語的文脈	自分の発話			1	1	6	2	1	7	18
		相手の発話	3		1	7	18	19	3	9	60
	非言語的文脈						2	4	2		8
	計		3		2	8	26	25	6	16	86
江戸	言語的文脈	自分の発話	-	-	-	2	3	32	23	13	73
		相手の発話	-	-	-	21	30	68	15	18	152
	非言語的文脈		-	-	-	3	4	7	4	4	22
	計		-	-	-	26	37	107	42	35	247

※発話文を対象とし，地の文や発話の引用等は含まない。「-」は当該時期に調査対象となる文献が見出せないことを表す。空欄は調査対象となる文献は見出せるが，用例が得られないことを表す。表3以降同様。

なお，サヨウナラ（バ）直前が感動詞の場合は，さらにその直前の文脈を対象とする。たとえば(8)ではサヨウナラ（バ）の直前にハイという感動詞がある。この場合，さらにその直前の相手の発話「サア／＼，お出し遊ばせ」が対象となる。

(8) 初「おむさん。お脊中をお出し遊せ。お流し申ませう（略）初「サア／＼，お出し遊ばせ　むす「ハイ，さやうならお出し遊しませう。（江戸，滑稽本，浮世風呂，3 下，1812 年，大系 63p.227）**言語的文脈 相手の発話**

サヨウナラ（バ）の直前の文脈による分類は，指示性が明瞭か不明瞭かを直接見分ける指標ではない。しかし，用例を具に観察するための補助線として，ある程度の有効性は得られると考える。以下，表 2 の結果をさらに細かく見ていく。

２．２　調査結果

２．２．１　非言語的文脈を受ける例

サヨウナラ（バ）の直前が非言語的文脈である例は，上方・江戸双方で 18 世紀後半以降見られるようになる(9)(10)。なお，(9)では「イヤ近／＼参ふ」と発話が行われるが，同時に「門口へ出る」という行動を伴う点で，この期以前に見られるような単なる対話の例とも異なる。行動が行われた点を重視し，非言語的文脈を受ける例と見なす。

(9) 彼男，イヤ近／＼に参ふといふて門口へ出る。中居ハ送り出，さやうならバ，おちかい内。よふお出なましたといふ。（上方，噺本，立春噺大集，蘭庭 4，1776 年，噺本大系 10p.259）**非言語的文脈 指示性不明瞭**

(10) 茶サア／＼モフ大ぶん。お座がふけました　ゲイシヤ皆〻三味せんはこへ仕舞ひ左様ならどなた様も。御機嫌よふ女郎共も一ツのんで。いきねんし（江戸，洒落本，南閨雑話，坐舗の体，1773 年，洒落本大成 6p.48，52-洒落 1773_01007，22310）**非言語的文脈 指示性不明瞭**

非言語的文脈を受ける場合，サヨウナラ（バ）の明瞭な指示対象は見られない。サヨウナラ（バ）は言語化されていない漠然とした状況を受けるのみである。よって，非言語的文脈を受けるサヨウナラ（バ）は指示性不明瞭の特徴を有する。すなわち，接続詞としての

要件を 1 つ備えていると判断できる。

２．２．２　言語的文脈を受ける場合

２．２．２．１　相手の発話を受ける場合

サヨウナラ（バ）の直前が言語的文脈である例は，上方では 17 世紀後半以降，江戸では 18 世紀後半以降現れる。上方の 17 世紀の例は全て相手の発話が直前にある例である(11)(12)。

(11) 医師出あひ，さらば上へ御あがり候へといハるれば，かの文盲(もんまう)なる人，土足にて候といふ。医師(くすし)，さやうならば，先うらの竹椽(ちくゑん)へ御とをりあれといハるゝ。（上方，噺本，当世軽口咄揃，4，1679 年，噺本大系 5p.65）**言語的文脈　相手の発話　指示性明瞭**

(12) ▲主しびりのけはないか ▲くわしやおふるまひのお供(とも)しては。五里(ごり)でも三里(さんり)でもしびりがおこる事ては御ざない ▲主さやうならはいひつけてをいたさかなをかふてこい（上方，狂言，狂言記外五十番，2，あく太郎，1700 年，北原・大倉編 1997:372）**言語的文脈 相手の発話 指示性明瞭**

(11)のサヨウナラバは相手の発話を受け，「土足なら，まず竹椽へお通りください」と解釈され，文意が通る。(12)も「五里でも三里でも痺れが起こらないなら，言い付けておいた肴を買ってこい」となり，文意が通る。(11)の「土足にて候」のような事実の述べたてや，(12)の「おふるまひの……御ざない」のような話者の判断を受ける場合，順接仮定条件の解釈になりやすい。このように 17 世紀上方の例は指示性明瞭，つまり接続表現の例である。

サヨウナラ（バ）が相手の発話という言語的文脈を受ける場合でも，発話内容そのものではなく，発話やその場の状況から導ける推論を受けていると考えられる例も存する(13)。

(13) 初「おむさん。お脊中(せなか)をお出(だ)し遊(あそ)ばせ。お流(なが)し申ませう（略）初「サアノ＼，お出(だ)し遊(あそ)ばせ　むす「ハイ，さやうならお出(だ)し遊(あそ)ばしませう。（再掲(8)(13)）**言語的文脈 相手の発話 指示性不明瞭**

(13)は相手の発話の後にサヨウナラが発話される例である。サヨウナラが相手の発話内容

を指示すると考えると，「*私が背中を出すなら，私は背中をお出ししましょう」等と解釈するしかないが，文意が通らない。相手の発話が命令表現である場合特に，発話内容を直接受けているという解釈は取りづらい。サヨウナラは相手の発話内容というより，“相手が発話を行った”という状況を受け，そこから推論される相手の意向を指示していると見る。そして，推論した相手の意向内容を仮定し，順当な内容を後件に導いていると考える。サヨウナラの指示対象は相手の発話内容ではなく，推論によって導かれた相手の意向内容ということになる。(13)では，「むす」は「初」の発話から「自分に背中を出してほしい」という「初」の意向を推論する。その内容をサヨウナラで仮定し，「お出し遊しませう」という順当な内容を続けている。「初」の意向は「むす」にとって未知の内容であり，仮定的に捉えるのは自然である。解釈すると「あなたが私に背中を出してほしいなら，私は背中を出しましょう」となり，文意が通る。

(14)は相手が発話を行ったという行為を受け，推論した内容をサヨウナラ（バ）の後に続ける例である。

(14) 白蓮「(略）アヽ，そんならお前がおさよの連かへ。」清吉「へヽヱ，さやうならあなたが旦那様でござりますか。是は初めてお目に掛ります。（江戸，歌舞伎，小袖曽我薊色縫，1859 年，大系 54p.424）**言語的文脈 相手の発話 指示性不明瞭**

サヨウナラが相手の発話内容を指示すると解釈すると，「*私がおさよの連れなら，あなたが旦那様ですか」となる。しかし，「自分がおさよの連であるか否か」は清吉にとって既知的な内容であり，清吉自身が仮定的に捉えるのは不自然である。また，前件と後件の因果関係も見出せない。(14)のサヨウナラは相手の発話内容ではなく，相手が発話したという行為自体を受け，そこから推論される内容を後件として提示していると考える。清吉は，白蓮が「お前がおさよの連かへ」と発話した事実を受け，「このように言うということは，この人が旦那様なのだろう」と推論し，その内容を後件として続けている。なお，相手の発話が疑問表現である場合に必ず，発話という行為自体を受ける解釈になるわけではない。「お前がおさよの連かへ」という問に対し，「さやうなら，よろしうござれども」等と応答すれば，「私がおさよの連れなら良いのですが」と解釈でき，サヨウナラが発話内容を指示すると捉えられる。(14)では直前が疑問表現であることによってではなく，サヨウナラの前後の発話の因果関係が成立しないことによって，サヨウナラが相手の発話した行為

そのものを受けるという解釈が自然になるのである。

その他，相手の発話が応答表現の場合も，相手が発話した行為そのものを指示する解釈が成り立つ(15)。

(15) そさあ御酒(ごしゅ)ウ上りませんか文あいそさやうならわたくしがお燗(かん)を見てあげませう（江戸，洒落本，深川新話，1779 年，洒落本大成 8p.218，52-洒落_1779_01025，36960） **言語的文脈 相手の発話 指示性不明瞭**

応答表現は命題を表さないため，サヨウナラ（バ）が発話内容を指示する解釈は成り立たない。(15)では，文二郎が「あい」という応答を行ったことを，おそのが受け，「「さあ御酒ウ上りませんか」という自分の提案に対して文二郎が納得している」と推論していると考える。

(13)～(15)は相手が発話したという行為・状況を受け，順当な内容を推論する例である。先行する状況を受け，順当な内容を続ける点で，順接仮定条件を表す接続表現サヨウナラ（バ）の特徴と合致する。ただし，本章ではこれを接続詞サヨウナラ（バ）の要件の 1 つを満たす例であると考える。相手が発話した行為やその場の状況から推論される内容を指示する場合，指示対象が言語化されていないことになる。つまり，非言語的文脈を受ける場合と近似する。非言語的文脈を受けるサヨウナラ（バ）は指示性不明瞭であり，接続詞サヨウナラ（バ）の要件を 1 つ満たす。よって，非言語的文脈を受ける状況に近い(13)～(15)等のサヨウナラ（バ）も，接続詞の要件を満たしていると考える。表 2「相手の発話」のうち発話という行為そのものを受ける例は，上方・江戸双方で 18 世紀後半以降見られるようになる。

２．２．２．２　自分の発話を受ける場合

サヨウナラ（バ）の直前が自分の発話である場合，18 世紀半ば頃までは順接仮定条件を表す例のみ見える(16)。

(16) ハツ大星由良之助(おほぼしゆらのすけ)様お宅はこれかなさやうならば加古川本蔵が女房戸無瀬でございます（略）ちとお目にかゝりたい様子につき，はる〳〵参りましたと伝へられてくだされと言ひ入れさせて（上方，浄瑠璃，仮名手本忠臣蔵，9，1748 年，新

全集 77p.115）**言語的文脈 自分の発話 指示性明瞭**

(16)は「大星由良之助様のお宅がこれならば，……とお伝えください」と解釈でき，サヨウナラバは順接仮定条件を表す。サヨウナラバの直前に疑問や推論等，話者の判断に関わる内容が来る場合，比較的に順接仮定条件として解釈しやすい[1]。これは，相手の発話を受ける場合(12)と同様である。

18 世紀後半以降になると，明瞭な指示対象が見出し難い例が見えるようになる(17)(18)。

(17) 手大きにごくろう中旦那へよろしふト一さんへもよろしふ十介どんまいど御くろうさんへイさようなら／＼アン／＼／＼／＼（上方，滑稽本，穴さがし心の内そと，2，幕末，前田 1974:464）**言語的文脈 自分の発話 指示性不明瞭**

(18) 「（略）やつぱり拾ふた藥にして。心置なふ養生さしたが。ハよさそふに思はるゝ」と。聞て平作感じ入り。「アヽそふじや有た。エヽお前様は恐ろしい。發明なお人じやの。そふ聞ましては申様もござりませぬ。左様ならもふ歸りましよ。旦那様おさらば」（再掲(6)）**言語的文脈 自分の発話 指示性不明瞭**

(17)ではサヨウナラ直前に「十介どんまいど御くろうさん」という相手への労い表現が見える。(18)では「申様もござりませぬ」のように自身の状態を表すことで，相手の発話に納得した様子を示している。つまり，2 例とも相手の行為を評価する表現がサヨウナラの直前に来ている。相手への評価を仮定的に捉えるのは不自然であるから，順接仮定条件は成り立っていないと言える。よって，(17)(18)の波線部とサヨウナラの後件は明瞭な因果関係で結び付いているとは言えず，指示性不明瞭であると考える。

また，表 2 を見ると江戸では 19 世紀以降，自分の発話が直前に来る例(19)～(21)が激増している。

(19) ごけ「アノあら吉が来てかいな。コレハ河四郎さん，有がたふござります。みなさんこれにへ。ハイさよならトにはかにそは／＼として，あいさつもそこ／＼，

[1] ただし，サヨウナラ（バ）の直前が断定「だ・である」で終わっている等，話者にとって確定的な内容の判断が来る場合は，それを話者自身が仮定的に捉え直すのは不自然であるため，順接仮定条件の解釈が成り立たない。第 2 章(13)等も参照のこと。

ばんとう引つれてたつてゆく。（江戸，滑稽本，東海道中膝栗毛，8 下，1809 年，新全集 81p.505）**言語的文脈 自分の発話 指示性不明瞭**

(20) 九介「イヤモウ，是に懲(こ)りねへ事はござりやせぬ。」久作「何かとはやあなた方，大きに御苦労を懸けました。さやうなら私は是でお別(わか)れ申(まうし)しませふ。」（江戸，歌舞伎，お染久松色讀販，1813 年，大系 54p.195）**言語的文脈 自分の発話 指示性不明瞭**

(21) 紫「（略）お菓子(くわし)をおあがり。サア金(きん)ぼう好(すき)ならたんとおあがりヨ　小三「ハイあがりがたふ。さやうなら坊(ぼう)やいたゞきな。（江戸，人情本，仮名文章娘節用，3 上，1834 年，国語研蔵 21 オ，53-人情 1834_05007，95050）**言語的文脈 自分の発話 指示性不明瞭**

いずれも相手の行為に対する感謝や労いを述べた後に，サヨウナラを続けている。相手に働きかけた後，発話の主導権を自分が握ったまま，サヨウナラによって話題を切り替えているように捉えられる。(19)では「ごけ」は「河四郎」に働きかけた後，「みなさん」に対して「さよなら」と発話し，その場を去っている。(20)(21)でも相手の発話に反応した後に，「さやうなら」によって話題が切り替えられている。これは，次節で述べる場面展開機能の現われと考える。このような表現が 19 世紀以降の江戸に多いのは，江戸語における表現志向のあり方が関わると考える。江戸語では「事実に対する認定情報を一方向的に主張し，聞き手に提示する方法」（矢島 2016:196）が好まれるとされている。矢島（2016）はこのタイプを［一方向性／主張・提示型］と呼ぶ。(19)〜(21)では，相手に話題の主導権を握る隙を与えず，サヨウナラによって強引に話題を切り替え，一方向的に後件の内容を主張するという点で［一方向性／主張・提示型］に沿う表現方法であると言える。よって，19 世紀以降，江戸において自分の発話を受ける例が増加するのは，［一方向性／主張・提示型］という江戸語の表現志向の現われであると考える。

２．３　まとめ

本節ではサヨウナラ（バ）の直前の文脈に着目し，指示性が明瞭か否かを調査した。本節で指示性不明瞭と判断した例は，①サヨウナラ（バ）が非言語的文脈を受ける例，②言語的文脈を受ける場合のうち，相手の発話が直前に現れるが，相手の発話内容ではなく，発話という行為・状況そのものをサヨウナラ（バ）が受ける例（相手の発話が命令・応答

表現である等，サヨウナラ（バ）の前後の因果関係が成立しない例），③言語的文脈を受ける場合のうち自分の発話（相手の行為を評価する表現）が直前に現れ，話題を切り替える例である。以下に，調査結果を示す。

①は上方・江戸双方において 18 世紀後半以降見出せる。
②は上方・江戸双方において 18 世紀後半以降見出せる。
③は上方・江戸双方において 18 世紀後半以降見出せる。［一方向性／主張・提示型］の表現志向が現れやすい江戸では 19 世紀以降激増する。

以上より，指示性不明瞭の例，すなわち接続詞サヨウナラ（バ）の条件を満たす例は，18 世紀後半以降の上方・江戸双方，特に 19 世紀以降の江戸で顕著に見出せるようになる。

３．場面展開機能の発達

本節では，サヨウナラ（バ）の場面展開機能の発達過程を見る。サヨウナラ（バ）が場面展開機能を持つかを意味分析のみで判断するのは困難であり，客観的な指標が必要となる。そこでサヨウナラ（バ）に後続する意志・命令表現，ハイ・アイ等の感動詞（以下，ハイ類）を指標とする。

３．１　意志・命令表現

意志・命令表現はサヨウナラ（バ）の後続表現の中でも，場面が展開することを明示的に表す表現である。これは第 2 章でも述べた通り，疑問・推量表現等が事態に対する話者の認識を表すのに対し，意志・命令表現は行為の実行に関わる意味を表すからである。自ら行為を実行したり相手に行為を実行させたりすることは場面展開の契機となる。よって，場面展開の際には意志・命令表現が多く使用されることが予想される。以上から意志・命令表現はサヨウナラ（バ）の場面展開機能の発達過程を辿る指標として有効である。 ただし，サヨウナラ（バ）が意志・命令表現と共起しなければ場面展開機能を表さない，とは考えない。自らの行為の宣言や相手への働きかけが表されていれば，願望表現や疑問表現等でも場面は展開し得ると考える（第 3 章注 2 参照）。本章では，場面展開機能の発達過程を辿るための 1 つの補助線として，意志・命令表現に着目するものである。

小林（1996:264-265）は『虎寛本狂言』におけるサヨウナラ（バ）の後続表現を調査し

ている。それによれば推量表現 3 例，意志表現 1 例，疑問表現 1 例であり，意志・命令表現への偏向は特に見られない。他にサヨウナラ（バ）の後続表現を調査した研究は見られず，様相は不明である。

そこで，サヨウナラ（バ）の後続表現を調査した（表 3）。表 3 では，(22)のような後件が明示されない例は除く。ゆえに合計数が表 2 と一致していない。

(22) 綱マア呑(のみ)なんし後アイ左様(さよう)なら半サア出(た)しなせへ（江戸，洒落本，甲駅新話，1775 年，洒落本大成 6p.301，52-洒落 1775_01010，54360）

表3）サヨウナラ（バ）の後続表現

		1676-1700	1701-1725	1726-1750	1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	計	備考
上方	意志				2	8	11	3	3	27	
	命令	3		2	1	3	4	1	3	17	勧誘（意志動詞＋マショウカ等）含む
	平叙				1	3	4			8	
	疑問				2	2	2		1	7	
	推量				1	2				3	
	省略				1	5	1	1	2	10	
	呼びかけ						2	1	3	6	人名等
	その他					2			1	3	「物申」「ごめん」等
	計	3		2	8	25	24	6	13	81	
	意志命令率	100%	0.0%	100%	37.5%	44.0%	62.5%	66.7%	46.2%	54.3%	
江戸	意志	-	-	-	3	6	24	2	8	43	
	命令	-	-	-	9	6	14	10	12	51	勧誘（意志動詞＋マショウカ等）含む
	平叙	-	-	-	1	4	7	2	1	15	
	疑問	-	-	-	2	1	10	3	3	19	
	推量	-	-	-	2	1				3	
	省略	-	-	-	6	14	25	20	2	67	
	呼びかけ	-	-	-		1	4		1	6	人名等
	その他	-	-	-			3		1	4	願望，「ごめん」等
	計	-	-	-	23	33	87	37	28	208	
	意志命令率	-	-	-	52.2%	36.4%	43.7%	32.4%	71.4%	44.7%	

※各時期に占める各後続表現の割合が30.1%～の箇所に濃い網掛け，15.1%～の箇所に薄い網掛けを施す。

また，(23)のような勧誘の表現（意志動詞＋マショウカ等）は相手への働きかけを伴う点で命令と通ずるため，命令表現に含む。なお，(23)のように「人称名詞＋後続表現」の形を取るものは「呼びかけ」には含まず，後続表現の意味を優先して解釈した。

(23) 雪「アヽ左様なら兄さん参りませうか（江戸，人情本，春色連理の梅，3-8，1851年，東大国語研蔵 1 ウ，53-人情 1851_07008，2500）

表 3 から，上方では一貫して意志・命令表現が大部分を占めるが，それ以外にも幅広い後続表現を取ることが看取される(24)〜(27)。

(24) 医師出あひ，さらば上へ御あがり候へといハるれば，かの文盲なる人，土足にて候といふ。医師，さやうならば，先うらの竹椽へ御とをりあれといハるゝ。（再掲(11)）**命令表現**

(25) おもての簀戸をぐわら／＼。男どなた。（木屋）ハイ。木屋でござります。お事多ござりませう。男旦那ハ他行。木や左様なら，後かたさんじませうといぬ。（上方，噺本，滑稽即興噺，1，1794 年，噺本大系 12p.256）**意志表現**

(26) げいこでけすぎたいこでけすぎたからのむほんじやわいなア。さやふならだんなこんばんはありがたふぞんじます。（上方，洒落本，風流裸人形，上，1779 年，洒落本大成 8p.276，52-洒落 1779_01033，11090）**平叙表現**

(27) ひとりの子が，アノ町人ハ哥よまぬものかして，百人首の中に町人ひとりも無ナア。何いひなさるやら。町人がのふてわいナア。さやふなら，どれが町人でござりますへ。（上方，噺本，時勢話綱目，4，1777 年，噺本大系 11p.87）**疑問表現**

19 世紀前半頃は比較的意志・命令表現に偏向する(28)(29)。

(28) 〝旦那長兵へ，起んかいやい。さりとは／＼なんぎなやつ。毎朝／＼起すので声がかれる〝長さよふなら，ちつと七ツ星のねりやくでもお上りなされませ（上方，噺本，春興噺万歳，1，1822 年，噺本大系 15p.158）**命令表現**

(29) 一文でも引おつたら，その着物までぬがして取のじやゾ。サア早ふはだかになつてしまへ。エヽぶつ／＼ぼやくと，此出ば包丁がお見舞もふすゾ。客〝エヽこれ／＼，あやまつた／＼。ヘイ／＼さやうならおつしやる通り，ミな着物をぬいで払ひ升る。（上方，滑稽本，諺臍の宿替，7，幕末，武藤 1992:91）**意志表現**

江戸では資料が見られるようになる 18 世紀後半以降一貫して，意志・命令表現が一定の

割合を占めることが看取される(30)(31)。

(30) 初「おむさん。お脊中をお出し遊せ。お流し申ませう（略）初「サア／＼，お出し遊ばせ. むす「ハイ，さやうならお出し遊しませう。（再掲(8)）**意志表現**

(31) 紫「（略）お菓子をおあがり。サア金ぼう好ならたんとおあがりヨ　小三「ハイあがりがたふ。さやうなら坊やいたゞきな。（再掲(21)）**命令表現**

ただし，上方では 19 世紀前半頃，意志・命令表現に比較的偏向するのに対し，同時期の江戸では上方と比べて意志・命令表現の比率があまり高くない。これは，江戸で 18 世紀後半以降一貫して，疑問表現や述部省略表現等幅広い後続表現を取ることによる(32)(33)。

(32) 幸何に致しませふ沢義太夫が。よかろふ茶左様なら。何太夫が宜ふござりませふ（再掲(5)）**疑問表現**

(33) 喜兵「（略）モシ，人間の命が十五兩で買われまするかへ。」太郎「ササ，御尤でござります／＼。○〔ト又金を殖やし,〕さやうならば三十兩で。」ト喜兵衛見て（江戸，歌舞伎，お染久松色讀販，1813 年，大系 54p.237）**省略表現**

省略表現の中では特に，別れの場面での使用例が目立つ(34)(35)。

(34) （新）「（略）茂之介どの，參宮いたされたら，かならずお訪ねなされてくだされい。わづかの寄りでござる。」（淺）「さやうならば道中ごきげんよく。」（江戸，黄表紙，敵討義女英，上，1795 年，大系 59p.220）**省略表現**

(35) 寿「サア／＼でへぶ風のわりい請だ行ふ／＼　仇「ハイさやうならまた後ほど（江戸，人情本，春色辰巳園，3-7-2，1835 年，国語研蔵 18 オ，53-人情 1835_04007，67240）**省略表現**

これらは，意志・命令表現のように明示的に「場面展開」を表す表現とは異なる。しかし，別れという新たな行為を起こす態度表明となっている点で，一種の場面展開を表すと捉えられる。これらは 18 世紀後半の時点で一定数見られる。上方ではこのような例は僅かである。表 3 で意志・命令表現の数値のみを見れば，江戸における場面展開機能の発達は 19 世

紀後半頃のように見えるが，別れの場面での省略表現等を考慮に入れれば，18 世紀後半頃から場面展開機能が発達し始めていたと考えることも可能である。

ところで，(34)のサヨウナラバは「ごきげんよく」と共起している。サヨウナラ（バ）は，18 世紀後半頃から江戸を中心に「ごきげんよく」「ごきげんよう」等（以下，ゴキゲンヨウ）と多く共起するようになるとされている（濱田 2013:60，田島 2018b:12）(36)(37)。

(36) さやふなら御きげんよふ（江戸，洒落本，南品あやつり，1791 年，濱田 2013:62）

(37) さやうなら御きげんよう（江戸，洒落本，古今馬鹿集，1774 年，田島 2018b:13）

田島（2018b:12）は，『甲駅新話』（1775）に単独で使用されるゴキゲンヨウが見られることから，既にゴキゲンヨウが別れの挨拶表現として確立していたとする。しかし，第 4 章 1 節で述べたように，ある表現が単独で使用されていることだけでは，“別れの挨拶語”化したかどうか判定できない。そのため本研究では，1775 年時点でゴキゲンヨウが“別れの挨拶語”化していたと積極的には見なさない。だが，別れの場面で多用されてはいたのであろう。田島（2018b）は，ゴキゲンヨウとサヨウナラ（バ）がひとまとりで別れの挨拶表現であった段階を経て，サヨウナラが単独で別れの挨拶表現になったと見ている[2]。

しかし，そもそもなぜサヨウナラ（バ）はゴキゲンヨウと共起するようになったのだろ

---

[2] 田島（2018b:15）は，ゴキゲンヨウが別れの場面だけでなく，出会いの場面でも使用されていた点(ア)を踏まえ，「「ごきげんよう」を別れの挨拶として用いるには「さようなら」の助けがあった方が都合がよい。そのことによって，別れの挨拶表現としての「さようなら」の定着を促す要因にもなったと思われる」と述べている。

(ア) 銅助「此間は御無沙汰いたしました。御きげんよろしう。是はトばかりさし出す。（江戸，滑稽本，浮世床，1813-1824 年，田島 2018b:15）

しかし，ゴキゲンヨウと共起し始めた頃のサヨウナラ（バ）は，未だ “別れの挨拶語”化していない。そのサヨウナラ（バ）の助けがあったからといって，出会いの場面でも使用されるゴキゲンヨウが，なぜ「別れの挨拶として用い」られるようになるのだろうか。これについて本章では，サヨウナラ（バ）が「状況を区切る」機能を発達させつつあったためと考える。出会いの場面では，初めから状況が区切られた状態で挨拶をする。そのため，状況を区切る標識としてのサヨウナラ（バ）を用いる必要がない。一方，別れの場面では何らかの相互行為の後，その状況を区切ってから別れの文言を切り出すのが一般的である。よって，ゴキゲンヨウがサヨウナラ（バ）と結びついて「別れの挨拶として用い」られるのは，サヨウナラ（バ）が状況を区切る標識として使用しやすかったからであると考える。

うか。本章では，この点を，サヨウナラ（バ）の場面展開機能の発達と見なす。サヨウナラ（バ）がゴキゲンヨウと共起するようになる 18 世紀後半は，意志・命令表現や別れの場面における省略表現等，場面展開を表し得る表現とサヨウナラ（バ）の共起例が一定数使用される時期でもある。ゴキゲンヨウはその語構成から，もともと相手に働きかけ，相手の状態等を気遣う表現であったと言える。相手への働きかけが見られる点は，命令表現と近似する。よって，サヨウナラ（バ）がゴキゲンヨウと共起しやすくなった背景には，サヨウナラ（バ）の場面展開機能の発達があったと言えよう。この点は，サラバが「暇申す」と共起しやすくなった背景と軌を一にする（第 2 章 4.2 節参照）。なお，サヨウナラ（バ）の後続がゴキゲンヨウのみの場合，「よく／よう」の連用修飾先が省略されていると見なし，省略表現に分類している。

３．２　ハイ類

ハイという感動詞に注目し，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化について論じた研究に倉持（2013a，2013b）がある。倉持（2013a:47）は次のように述べる。 倉持（2013b:264-265）も同様のことを述べている。

> 「さようなら」は，その場の頃合いを読んで，時間の区切りを告げるための接続表現である。その言葉の前に，さらに区切りの言葉を付けるということは，後ろの「さようなら」に区切りの機能がなくなったことを意味する。
>
> この「ハイ」という掛け声は，意味のある言葉ではないが，相手の注意を喚起することで，一種の区切りの機能を持つと考えられる。（略）
>
> すなわち，「ハイ」と「さようなら」は似たような機能を持っていたと見られる。しかし，それが「ハイさようなら」となったことで，「さようなら」は別れを告げる機能を持つ感動詞であり，定型化したあいさつ言葉とすることができる。

倉持（2013a，2013b）は「区切りの機能」を持つサヨウナラ（バ）が，同機能を持つハイと共起することでその機能を失い，「あいさつ言葉」として使われるようになったと説明する。ハイという具体的な指標をもとに機能変化を説明する点で，一定の合理性がある。

しかし，倉持（2013a，2013b）は接続詞サヨウナラ（バ）の段階を想定していない。既述のように，サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化を論じるうえで，接続詞サヨウナラ

（バ）の段階を認めることは重要である。ハイ等との共起関係についての調査でも，接続詞の段階を想定すべきである。

そもそも倉持（2013a，2013b）は，“別れの挨拶語”サヨウナラが「区切りの機能」を失っていると見ている点で，本研究の立場とは異なる。本研究の考えでは，“別れの挨拶語”サヨウナラは場面展開機能を有する（1 節）。だからこそ，サヨウナラ（バ）は同機能を有する接続詞の段階を経たのではないかと考える。“別れの挨拶語”が場面展開機能を有すると考えた方が，接続詞からの変化の流れを説明するうえで理にかなっている。

また，倉持（2013a，2013b）は調査形式をハイに限定しているが，サヨウナラ（バ）と共起する感動詞にはアイ・ヘイ等もあり，併せて調査すべきである。ハイ・アイ・ヘイの辞書記述を見ると，ハイは『日本国語大辞典』（以下，日国）で「②何か行動に移ろうとするときなどに，注意を促したり，挨拶のことばの上に軽く添えたりして用いることば」（日国「はい」）と説明される(38)。アイは「②何か行動に移ろうとするときなどに，相手に注意を促したり，挨拶のことばの上に添えたりして用いる語」（日国「あい」）と，ハイと同じ説明が与えられる(39)。ヘイは「肯定，承諾の気持をあらわすときに発することば。また，人の要求に応じたり，人にものをすすめたりするときにも用いる。「はい」と同じ意で商人がへりくだって使う。へえ」（日国「へい」）とある(40)。

(38) どうもモシ。こまったなまけ者でごぜへすネエ。ハハハハハ。ハイどなたも（江戸，滑稽本，浮世床，初編上，1813 年，日国「はい」）

(39) アイとさし出す火入を取て（江戸，洒落本，弁蒙通人講釈，1780 年，日国「あい」）

(40) 「いくらだの」「ヘイ十四匁八分でおます」（江戸，滑稽本，東海道中膝栗毛，4 下，1805 年，日国「へい」）

ハイ・アイは何か行動を起こす際に発する言葉であり，ヘイはハイと類似する言葉であることがわかる。よって，アイ・ヘイはハイと併せて調査する形式として適切である。

これを踏まえ，ハイ類とサヨウナラ（バ）の共起（以下，ハイサヨウナラ（バ）類）の歴史的推移を調査する。調査対象とする形式はハイ・アイ・ヘイ（ヘエ含む）である。該当例の推移を表 4 に示す。

表4）ハイサヨウナラ（バ）類の歴史

		1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	計
上方	ハイ		5	3	1	3	12
	ヘイ					10	10
	計		5	3	1	13	22
江戸	ハイ	6	1	26	8	2	43
	アイ	3	1	2		1	7
	ヘイ		2	6	5	2	15
	計	9	4	34	13	5	65

表4から，上方では18世紀半ば頃まで例が見えず，18世紀末頃からハイを中心に用例が現れることが看取される(41)(42)。

(41) 医たこをたべると，はしかを内へすひ入れます。其外竹のこ，うなぎなど，ミな大毒でござる亭主ハイ，さやうなら，あなたの御薬ハどくになりましようか（上方，噺本，麻疹噺，4，1803年，噺本大系14p.142）

(42) 手大きにごくろう中旦那へよろしふト一さんへもよろしふ十介どんまいど御くろうさんへイさようなら／＼アン／＼／＼／＼（再掲(17)）

江戸では18世紀後半以降ハイ・ヘイ・アイいずれも一定数確認される(43)〜(45)。

(43) 後ホンニ夫じやア鬧しかろう半ハイ左様ならとなたも緩りとあがりまし（江戸，洒落本，甲駅新話，1775年，洒落本大成6p.301，52-洒落 1775_01010，55920）

(44) 卒八「（略）ヤレ／＼草臥た／＼，是でまづみんな片付た。」ト座になをり，「ヘイ左様なら，おやくそくの，鉢肴をさし上ゲます。」ト，今の車をいだし，（再掲(4)）

(45) 唄女「（略）重綾はん左様なら　綾「アイ左様ならサアもしへ是をお着なんしヨヲ（江戸，人情本，春色恋廼染分解，4，1862年序，浅川2012:156）

倉持（2013a:47，2013b:265）は，「さようなら」が「ハイさようなら」となったことで，別れを告げる機能を持つ「定型化したあいさつ言葉」となったと述べる。しかし，接続詞

サヨウナラ（バ）の段階を想定しておらず，説明が飛躍的である。18 世紀後半以降のハイサヨウナラ（バ）類は，サヨウナラ（バ）の場面展開機能がこの期に最も顕著になったことの表れとして，場面展開機能を持つ形式同士が選好する環境（意志・命令表現）に共起して生まれたと考える。この点は，サラバがイザ・イデ等の感動詞と共起するようになる流れと同様である（第 2 章 4.3 節)。サヨウナラ（バ）は「ハイさようなら」となったことで「定型化したあいさつ言葉になった」のではなく，「接続詞サヨウナラ（バ）として確立した」のである。

３．３　まとめ

本節では，サヨウナラ（バ）に後続する意志・命令表現，共起するハイ類に着目し，サヨウナラ（バ）の場面展開機能の発達過程を調査した。調査結果を以下に示す。

・上方では 17 世紀後半以降一貫して意志・命令表現の割合が高いが，19 世紀前半頃比較的意志・命令表現に偏向する。
・江戸では 18 世紀後半以降，疑問・省略表現の割合が高く，意志・命令表現の割合が上方と比べて全体的に高くない。しかし，それらを除けば 18 世紀後半以降安定して高い割合を占める。また，別れの場面で多用される述語省略表現も場面展開機能を担うと考える。 ゴキゲンヨウとの共起例も増加する。
・ハイサヨウナラ（バ）類は上方・江戸双方で 18 世紀後半以降見出せるようになる。

以上より，場面展開機能を有する例，すなわち接続詞サヨウナラ（バ）の条件の 1 つを満たす例が 18 世紀後半以降，上方・江戸双方で顕著に見出せるようになることを確認した。

４．おわりに

本章では，接続表現サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を明らかにするにあたり，接続詞サヨウナラ（バ）の段階を認めたうえで，変化過程を記述した。特に，サヨウナラ（バ）の指示性が「明瞭」から「不明瞭」へと変化する過程，サヨウナラ（バ）の機能が順接仮定条件から場面展開機能へと変化する過程を調査した。調査の結果，指示性不明瞭の例が 18 世紀後半以降，上方・江戸双方において見出せるようになること，場面展開機能を有する例も 18 世紀後半以降，上方・江戸双方で顕著に見出せるようになることが確

認できた。以上より，サヨウナラ（バ）は 18 世紀後半頃に接続詞化したと考える。

サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を記述した第 4 章では，“別れの挨拶語”サヨウナラの特徴を満たす例は関西・東京双方において 19 世紀後半以降増加し，20 世紀初期には“別れの挨拶語”サヨウナラの確例が見られることを示した。このことから，サヨウナラ（バ）が接続詞の段階を経て“別れの挨拶語”化したと見て，時期的にも整合性が取れている。

サヨウナラ（バ）の使用は主に近世期以降である。しかし，サヨウナラ（バ）の構成要素はそれ以前に既に見える。それにも拘わらず，サヨウナラ（バ）の変化が進行する時期が 18 世紀後半以降なのはなぜか。このことは，サヨウナラ（バ）がサラバと共通の変化過程を辿ってきた一方で，サヨウナラ（バ）独自の事情が関わっていると考える。第 6 章で考察する。

使用テキスト

一部記号で示す。

◎…**国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2019.3, 中納言 2.4.2）** https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/（2019 年 12 月 23 日確認）短単位検索，①キー: (語彙素読み="サヨウ" AND 品詞 LIKE "形状詞%")　※うちナラ（バ）が後接するものを目視で採取，②キー: 語彙素読み="サヨウナラ"　※サンプル ID，開始位置，permalink はバージョン 2023.03　※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

○…**『新編日本古典文学全集』小学館**：ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」https://japanknowledge.com/（2020 年 1 月 8 日確認）詳細（個別）検索，キー「さやう」「左様」「さよふ」「さよなら」，範囲「古典本文」

△…**『日本古典文学大系』岩波書店**：国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/（2020 年 1 月 8 日確認）キー「さやう」「左様」「左やう」「さ様」

□…**武藤貞夫・岡雅彦　編『噺本大系』東京堂出版**：国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/infolib/（2020 年 1 月 8 日確認）キー「さやう」「左様」「さやふ」「さよう」「さよふ」「左やう」「さ様」

▲…洒落本大成編集委員会編（1978-1988）『洒落本大成』中央公論社.

■…国立国語研究所・東京大学国語研究室所蔵本

●**近世前期上方**[1676-1700]【**噺本**】当世軽口咄揃…□,【**狂言**】狂言記外五十番…北原保雄・大倉浩 編（1997)『狂言記外五十番の研究』勉誠社，[1726-1750]【**浄瑠璃**】仮名手本忠臣蔵…△,【**噺本**】咲顔福の門…□

●**近世後期上方**[1751-1775]【**噺本**】軽口片頬笑，軽口大黒柱…□,【**歌舞伎**】幼稚子敵討…△,【**洒落本**】異本郭中奇譚…◎▲，[1776-1800]【**浄瑠璃**】新版歌祭文，繪本太功記…△,【**噺本**】立春噺大集，時勢話綱目，歳旦話，滑稽即興噺，軽口筆彦噺，新話違なし…□,【**歌舞伎**】韓人漢文手管始…△,【**洒落本**】風流裸人形，南遊記…◎▲，[1801-1825]【**噺本**】麻疹噺，会席噺袋，臍の宿かえ，春興噺万歳…□,【**洒落本**】嘘之川，竊潜妻，誰が面影，粋の曙，箱まくら…◎▲，[1826-1850]【**噺本**】落噺顋懸鎖，落噺千里藪…□,【**洒落本**】色深狭睡夢…◎▲，[1851-1875]【**滑稽本**】諺臍の宿替…武藤禎夫 校訂・解説（1992)『諺臍の宿替』太平書屋，穴さがし心の内そと…前田勇（1974)「穴さがし心の内そと」近代語学会 編『近代語研究』4 武蔵野書院 pp.429-484.

●**近世後期江戸**[1751-1775]【**噺本**】仕形噺，御伽噺…□,【**洒落本**】郭中奇譚，南閨雑話，甲駅新話…◎▲，[1776-1800]【**浄瑠璃**】碁太平記白石噺…○，伊賀越道中雙六…△,【**噺本**】気のくすり，春帖咄，詞葉の花，無事志有意…□,【**洒落本**】深川新話，総籬，仕懸文庫…◎▲，道中粹語録，傾城買四十八手，錦之裏…△,【**黄表紙**】敵討義女英…△，[1801-1825]【**噺本**】馬鹿大林，落咄腰巾着，落咄屠蘇機嫌，落噺屠蘇喜言…△,【**歌舞伎**】お染久松色讀販，名歌徳三舛玉垣…△,【**洒落本**】花街鑑…◎▲,【**滑稽本**】東海道中膝栗毛，浮世床，酩酊気質…○，浮世風呂…△，花暦八笑人（春の部～三編追加）…小池藤五郎 校訂（1942)『花暦八笑人』岩波書店（以下，小池 1942),【**人情本**】明烏後の正夢…◎■，[1826-1850]【**噺本**】百面相仕方ばなし…□,【**洒落本**】花街寿々女…◎▲,【**滑稽本**】花暦八笑人（四編上巻～五編下之巻）…小池（1942),【**人情本**】仮名文章娘節用，春色梅児与美，恋の花染，春色辰巳園，花廼志満台…◎■，[1851-1875]【**歌舞伎**】小袖曽我薊色縫…△,【**滑稽本**】妙竹林話七偏人…興津要 校注（1983)『妙竹林話七偏人（上）（下)』講談社，安愚楽鍋…◎国立国会図書館蔵本,【**人情本**】春色連理の梅，春色江戸紫…◎■，春色恋廼染分解…浅川哲也（2012)『春色恋廼染分解翻刻と総索引』おうふう.

第 6 章 サヨウナラ（バ）の接続詞化―構成要素に着目して―

1．はじめに

サヨウナラ（バ）は大きく 2 分すると，「サヨウ＋ナラ（バ）」から成る。後述するように，サヨウナラ（バ）の用例がまとまって見出せるようになるのは 18 世紀後半以降である。しかし，サヨウナラ（バ）の構成要素であるサヨウ及びナラ（バ）は 10 世紀までに既に見出せる。構成要素が中古までに見出せるにも拘わらず，サヨウナラ（バ）がまとまって使用されるようになるのが 18 世紀後半以降なのはなぜだろうか。

本章ではこの問に対し，「近世までにサヨウ及びナラ（バ）が変化したことで，サヨウナラ（バ）という形式を構成しやすくなった」という背景があったことを主張する。サヨウナラ（バ）は，サヨウ及びナラ（バ）という表現が存在していれば即座に成立する表現ではなく，両者が質的に変化した結果，成立し，定着した表現であると考える。

第 5 章で述べた通り，18 世紀後半はサヨウナラ（バ）が接続詞化する時期でもある。サヨウナラ（バ）が一語の接続詞として使用されるようになることと，まとまった数の用例が見出されるようになることとは並行的な現象であると考える。本章はサヨウナラ（バ）がどのように接続詞化していくのかを，第 5 章とは異なる観点から記述するものである。

2．問題の所在

サヨウナラバは中世前期の『古今著聞集』に初出する(1)。

(1) 御心ざし淺からねば，やがて三千の列にもめしをかれて，九重（ここのへ）のうちのすみかをも，御はからいあるべきにもありけるを，まめやかに歎申（なげきまうし）て，さやうならば中（なか）／＼御なさけにても侍らじ，淵瀬をのがれぬ身とも成（なり）ぬべし（説話，古今著聞集，8，1254 年，大系 84p.266）

しかし，その後は 17 世紀後半まで例が見えない(2)。

(2) さるとひやうなる牛蒡売（ごほううり），物よしに行あふ。ものよし，牛蒡をいハヽふといふ。牛蒡売（ごばううり）めいわくし，最早（もはや）さきほどにいハふたといふ。さやうならバ，手判（てはん）の札（ふた）が

あるべきほどに札を見せよといふ。（上方，噺本，当世軽口噺揃，4，1679 年，噺本大系 5p.66）

サヨウナラ（バ）がいつ頃からまとまって使用されるようになるのかを確かめるために，国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（以下，CHJ）の用例を採取した[1]。表 1 に CHJ におけるサヨウナラ（バ）の用例数をジャンル別に示す（用例の見えない時代・ジャンルは非表示）。サヨウナラ（バ）が連続する場合(3)は，連続するひとまとまりで 1 例と数える。

(3) その　友だちが　四人　並んで，「さやうなら，さやうなら。」と　いって，手をふりました。（教科書，小学校国語 5 期，四乗合自動車，よみかた四 p.21，60T 小読 1941_52B04，3290，3350）

表1）CHJにおけるサヨウナラ（バ）の使用状況

時代	近世		近代					
ジャンル	洒落本	人情本	明治初期口語	雑誌	小説	落語SP盤	新聞	教科書
用例数	56(273.9)	48(126.9)	17(84.3)	70(5.5)	21(30.1)	21(247.5)	5(13.0)	60(75.1)

※括弧外の数字は粗頻度，括弧内の数字は100万語あたり（記号等除く）の頻度を表す。

表 1 から，サヨウナラ（バ）は近世後半から見られるようになることがわかる。CHJ における初出例を示す。

(4) 客南無三めしつぼが取ついた内サヤウナラお出あそばしませ（江戸，洒落本，郭中奇譚，弄花巵言，1769 年，洒落本大成 4p.301，52-洒落 1769_01001, 29690）

[1] 形態論情報に誤りがある例の他，振り仮名から明らかにサヨウナラ（バ）に該当しないもの(ア)(イ)，振り仮名が付されず読みが特定できないもの(ウ)等は除外する。

(ア) 男はうなづき左様ならお待申しますと思はず大きく云ふ口を（雑誌（文芸），従軍人夫，1895 年，太陽 1895-1p.94，60M 太陽 1895_01019，67650）**振り仮名「そん」**

(イ) 然し左様なら我輩は早く歸らなくてはと（雑誌（文芸），セバストウポルの火花（承前），9，1901 年，太陽 1901-9p.103，60M 太陽 1901_09023，104080）**振り仮名「さう」**

(ウ) 東や左様ならゆる／＼御遊びまた明ばんさんじましよ（上方，洒落本，異本郭中奇譚，弄花巵言，1772 年，洒落本大成 4p.322，52-洒落 1772_01035，79440）**振り仮名なし**

以上，サヨウナラ（バ）がまとまって見られるようになるのは 18 世紀後半以降である。しかし，サヨウナラ（バ）の構成要素であるサヨウ及びナラ（バ）はそれぞれ 10 世紀までに用例が見出せる(5)(6)。

(5)　（翁）「かくなむ帝の仰せたまへる。なほやは仕(つか)うまつりたまはぬ」といへば，かぐや姫答(こた)へていはく，「もはら，さやうの宮仕へつかまつらじと思ふを（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，新全集 12p.59，20-竹取 0900_00001, 137220）

(6)　石木(いはき)をも問(と)ひ放(さ)け知らず家ならば〔伊弊那良婆〕かたちはあらむを（和歌集，万葉集，5，雑歌，794 番歌，新全集 7p.24，10-万葉 0759_00005, 1820）

このことは，「サヨウ及びナラ（バ）という構成要素が揃っていれば，サヨウナラ（バ）という構成体が頻用される」というわけではないことを示唆する。

サヨウナラ（バ）がまとまって見えるようになるのが 18 世紀後半以降なのはなぜか，という点については，「サヨウ及びナラ（バ）が歴史的に変化したことで，サヨウナラ（バ）という形式を構成しやすくなった」という仮説が立てられる。サヨウとナラバは中世前期頃，臨時的に結び付くことは可能であったが(1)，接続詞として定着する条件は整っていなかったのであろう。しかし，時代が下るとサヨウまたはナラ（バ）が何らかの形で質的に変化し，それによってサヨウナラ（バ）が頻用される素地が整い，18 世紀後半以降まとまって見られるようになったと考える。

それでは，サヨウまたはナラ（バ）が被った変化とはどのようなものだろうか。本章では，それぞれの歴史を個別に観察し，変化過程を記述するとともに，その変化がサヨウナラ（バ）の歴史にどのように関わるのかを考察する。まず，サヨウの推移から観察する。

３．サヨウの変化過程

３．１　後接要素

３．１．１　調査の観点及び使用状況の概要

サヨウの推移を観察するにあたり，まずサヨウの後接要素に着目した。この方法により，ナラ（バ）がどのような流れでサヨウに後接するようになるのかを把握することができる。また，内省の利かない古典語の用例を，ある程度客観的に分類することが可能となる。

サヨウの後接要素に関する研究はいくつか見られるが，どのようにナラ（バ）等の要素

を後接するようになったのかは十全に把握されていない。鈴木（2000）は中古から中世の作品を対象に，指示詞サとその連語（サシテ・サスガ・サセル等）の一語化について考察し，どの作品にどの形式が何例見えるのかを網羅的に示している。それによれば，サヤウ503例中サヤウノ212例，サヤウニ139例と「サヤウノ・サヤウニの形で多用され」（p.56）ているという。また，岡﨑（2010:71-72）によれば，サヨウは中世前期頃まではニ・ノ・ナルを後接することが多く，中世後期以降デ等を後接するようになるとされる。さらに，森田（1997:206）には，「「さやう」は感動詞としては「さ」を伴って「さやうさ」「さうさ」の形で江戸ことばに見える」とある。以上の先行論から，サヨウが中古～近世にかけて後接要素を替えながら変遷してきたことがわかる。しかし，鈴木（2000）の調査は主に中世前期以前に限られ，サヨウの通時的な様相は不明である。岡﨑の調査は通時的であるが，対象となる資料が限られている（源氏物語，覚一本平家物語，天草版平家物語，虎明本狂言，近松浄瑠璃のみ）。また，森田（1997）には近世期についての言及があるが，サヨウナラ（バ）が多用される近世後期の様相は不明である。よって，後接要素に着目したサヨウの歴史的推移の把握は不十分であると言ってよい。

そこで本節では，CHJ におけるサヨウの使用状況を概観する。漢字表記の例については振り仮名の形態論情報が付与されており，「さよう」と読めるものを対象とした。

サヨウの後接要素の歴史的推移を示す（表 2）。サヨウが連続する場合は，連続するひとまとまりで 1 例と数える(7)。また，見出しの例(8)は調査対象から除く。

(7) 左に右飛行機の完成なぞは，政府なり，篤志家なりが十二分に發明家を欵待し，保護しなければ駄目です。」「さよう，さよう」と言ふのを聞濟して，（雑誌（文芸），誇，1909 年，太陽 1909-16p.105，60M 太陽 1909_16029，85090，85130）

(8) 当世左様候序　夫霜朔は楽暫之声極晦は扇子ノ＼の声をたのしみ（江戸，洒落本，当世左様候，1776 年，洒落本大成 7p.13，52-洒落 1776_01013，30）

後接要素のうちニやニテを後接し，用言を修飾する用法を「連用修飾用法」，ノやナル・ナ等を後接し，体言を修飾する用法を「連体修飾用法」，デやジャ，ナラ（バ）等を後接し，述語を構成する用法を「述語用法」とする。後接要素のない例のうち，サヨウが直接用言を修飾するものを「連用 ϕ」とし，連用修飾用法に含める。また，後接要素がなく，応答表現として使用されるものを「応答 ϕ」とする。応答 ϕ は繋辞相当の要素を含ま

表2）サヨウの後接要素

		連用修飾用法			連体修飾用法			
		ニ	ニテ	連用φ	ノ	ナル	ナラム	ナ
中古	仮名文学	70(81.7)	12(14.0)		81(94.5)	30(35.0)	9(10.5)	
中世前期	説話・随筆	18(25.3)	3(4.2)		34(47.8)	2(2.8)	7(9.8)	
	日記・紀行	3(27.2)			9(81.6)			
	軍記	10(35.6)			17(60.5)			
中世後期	キリシタン	9(73.0)			10(81.1)			
	狂言	180(766.4)	1(4.3)	1(4.3)	84(357.7)			
近世	随筆・紀行	8(73.4)	2(18.4)		2(18.4)	1(9.2)		
	近松浄瑠璃	1(4.3)			2(8.6)			3(12.9)
	洒落本	8(39.1)		2(9.8)	3(14.7)	1(4.9)		2(9.8)
	人情本	2(5.3)		8(21.1)	2(5.3)			4(10.6)
近代	初期口語	7(34.7)		8(39.7)	2(9.9)	2(9.9)		6(29.8)
	雑誌	29(2.3)		4(0.3)	8(0.6)	2(0.2)		34(2.7)
	小説	3(4.3)			1(1.4)			8(11.5)
	落語SP盤							
	新聞	1(2.6)		1(2.6)	1(2.6)			9(23.4)
	教科書	2(2.5)		1(1.3)	1(1.3)			1(1.3)

		述語用法							その他
		デ	ジャ	ナラ（バ）	サ	応答φ	カ	デス	
中古	仮名文学					1(1.1)			
中世前期	説話・随筆								1(1.4)
	日記・紀行								
	軍記								
中世後期	キリシタン								
	狂言	68(289.5)	1(4.3)						
近世	随筆・紀行								1(9.2)
	近松浄瑠璃								1(4.3)
	洒落本	12(58.7)	8(39.1)	56(273.9)	13(63.6)	9(44.0)	3(14.7)		1(4.9)
	人情本	33(87.2)		48(126.9)	36(95.2)	5(13.2)	2(5.3)		1(2.6)
近代	初期口語	19(94.2)		17(84.3)	8(39.7)	3(14.9)		5(24.8)	1(5.0)
	雑誌	70(5.5)		70(5.5)	6(0.5)	35(2.8)	24(1.9)	13(1.0)	3(0.2)
	小説	1(1.4)	1(1.4)	21(30.1)	3(4.3)	1(1.4)			2(2.9)
	落語SP盤	5(58.9)		21(247.6)			12(141.5)	1(11.8)	1(11.8)
	新聞	6(15.6)		5(13.0)			1(2.6)	1(2.6)	
	教科書	11(13.8)		60(75.1)		2(2.5)			

※括弧外の数字は粗頻度，括弧内の数字は100万語あたり（記号等除く）の頻度を表す。100万語あたりの用例数が50語以上の箇所に濃い網掛け，20語以上の箇所に薄い網掛けを施す。デにはデハの融合形ジャ（ア）を，カにはカナ・カイナ等を含む。「その他」は，ダツ・ケ・モ・シカラバ・ナレバ等である。

ないが，便宜的に述語用法に分類する。さらに，「ニ／ニテ＋存在動詞」の形で述語用法のように解釈できるものもあるが(9)(10)，便宜的に「連用修飾用法」に分類する。このタイプについては後述する（3.3 節）。

(9) むかし，陸奥（みち）の国にて，なでふことなき人の妻（め）に通ひけるに，あやしう，さやうにてあるべき女ともあらず見えければ，（歌物語，伊勢物語，15，10 世紀前半，新全集 12p.127，20-伊勢 0920_00001，35460）

(10) （道綱母）「こはなぞ，こはなぞ」と言へど，いらへもせで，ろんなう，さやうにぞあらむと，おしはからるれど，（日記，蜻蛉日記，上，10 世紀後半，新全集 13p.148，20-蜻蛉 0974_00003，13570）

表 2 から，中世前期頃まではニ・ノを後接する連用・連体修飾用法の例が主であること，中世後期にデを後接する述語用法の例が現れ，その後，後接要素が多様化する一方，連用・連体修飾用法の例が減少することがわかる。以下，時代別に用例を分析する。

３．１．２　中古・中世前期

岡崎（2010:71）が述べるように，中世前期頃まではニ・ノ・ナル後接例が多い。サヨウ＋ニによる連用修飾用法(11)，サヨウ＋ノ・ナルによる連体修飾用法(12)(13)が中心である。中古には準体用法のナルも 1 例ある(14)（表 2 では連体修飾用法ナルとして計上）。また，先行論では言及されなかったが，サヨウ＋ナラムの連体修飾用法も見える(15)。ナラムは全て連体修飾用法の例であり，述語用法の例（例：さやうならむ。）は見えない。

(11) 気色（けしき）ばみて，ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ，かれがれにと絶えおかむをりこそは，さやうに思ひ変ることもあらめ，（作り物語，源氏物語，夕顔，11 世紀初期，新全集 20p.155，20-源氏 1010_00004，73190）

(12) 女（め）の童（わらは）を出（いだ）して，出でて往（い）ぬべき少しの隙（ひま）やあると見せけれども，「さやうの隙ある所には，四五人づつ，くくりをあげ，（略）みな立てりければ，出づべきやうもなし」（説話，宇治拾遺物語，2-9，13 世紀前半，新全集 50p.86，30-宇治 1220_02009，4980）

(13) 人の，「このきはは，さりともくづほれたまひなむ」と思ひたりしところを，違（たが）

へむと思(おぼ)したりしなめり。さやうなるところのおはしまししなり。（歴史物語，大鏡，地 内大臣道隆，1100 年頃，新全集 34p.275，20-大鏡 1100_02007，85580）

(14) まして，琵琶(びは)かい調べ，笛の音(おと)など聞えたるは，過ぎていぬるもくちをし。さやうなるに，牛のしりがいの香(か)の，なほあやしうかぎ知らぬものなれど，をかしきこそ物ぐるほしけれ。（随筆，枕草子，いみじう暑きころ，11 世紀初期，新全集 18p.347，20-枕草 1001_00208, 1270）

(15) ただ，藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて，さやうならむ人をこそ見め，（作り物語，源氏物語，桐壺，11 世紀初期，新全集 20p.49，20-源氏 1010_00001，111440）

一方，指示詞サを上接しないヨウにはこれら以外のタイプも見える。「やう（なり）」を統語的な観点から通時的に調査した山村（2013:63-64）によれば，中古～中世前期において，「やう（なり）」には連用・連体修飾用法の他，主語・目的語に立つ例(16)(17)，文末名詞文を構成する例(18)が存するという。「やうなり」を意味用法の観点から分析した山口（2001:107）にも，「やうなり」が述語成分になる例(19)が挙げられている。また，小久保（1978:47）は，指示詞カを上接した「かやう」の述語用法の例(20)を挙げている（ただし，終止形「かやうなり」は見えない）。

(16) 「百首よむやうはならひたるか」と仰せごとありければ，（説話，古今著聞集，5，1254 年，山村 2013:63）

(17) この僧，人の夢にみえけるやうをかたる時，この男いふやう，（説話，宇治拾遺物語，89，13 世紀前半，同 p.63）

(18) 又，惠心僧都ノ給仕ノ弟子頓死ス。物ニトラルヽ様ナリケレバ，不動ノ慈悲ノ呪ヲ誦セシメ，僧都，地蔵ノ寶號ヲ唱ヘラル。（説話，沙石集，2，1283 年，同 pp.63-64）

(19) こなたかなたの目には，李を二つつけたるやうなり。（作り物語，竹取物語，10 世紀初期，山口 2001:107）

(20) かやうなれば慰めこよなし。（歴史物語，栄花物語，ころものたま，院政期，小久保 1978:47）

以上から，統語的観点で言えばサヨウが主語・目的語に立つ例や，主節述語を構成するサヨウナリ，従属節述語を構成するサヨウナラバ・サヨウナリトモ・サヨウナレバ等の例が存在しても不思議ではない。しかし，調査範囲内では，中世前期までにはこれらの例が見出せなかった[2]。なお，述語用法は中世後期以降見られるようになる（3.1.3 節）。サヨウが主語・目的語に立つ例はこの時期以降も見えないため，本章ではこれ以上扱わない[3]。

以上，中古・中世前期のサヨウはニ・ノ等を後接する連用・連体修飾用法が中心であり，述語用法の例は見出せないことを確認した。中古・中世前期のサヨウが述語用法を持たない点については，機能的側面から考察を試みる（3.2 節）。

３．１．３　中世後期

中世後期でも引き続き，連用・連体修飾用法が中心である(21)(22)。連用修飾用法の中には，サヨウが後接要素を取らない形（連用 ϕ）も 1 例見られる(23)。

(21) 重盛に遅れまらして後は，高い山，深い海とも頼み奉ってこそ有ったに，然様に〔ſayŏni〕成り果てさせられた事の悲しさよと有って，（キリシタン資料，天草版平家物語，4-14，1592 年，大英図書館蔵 p.319，40-天平 1592_04015，33210）

(22) 下人共に荷物を負おせらるる所に，Ｅｓｏｐｏ荷奉行に言うは：某は未だ然様の

---

[2] 表 2 に見える中古の「応答 ϕ」は，以下の『落窪物語』の例である。

(エ) かたはらなる瓶子（へいじ）をあけて，ただ取りに取れば，（下女）「少しは残したまへ」と言へば，（あこぎ）「さよさよ」と言ひて，紙に取り分けて（作り物語，落窪物語，1，10 世紀後半，新全集 17p.53，20-落窪 0986_00001，125450，125470）

この例から，中古で既に応答表現のサヨウが存したように一見思われる。しかし，CHJ 底本の新全集解説には「『落窪物語』の伝本には善本はなく，古い写本もまったくない。（略）大部分の写本は近世期のものである。（略）この物語が室町時代や江戸時代にまで伝わるには，本文上に相当な書写上の変化を予想しなければならない」（pp.377-378）とある。つまり，現存の『落窪物語』の内容や書き方は中古に書かれたものと異なる可能性が大きい。また，音縮約形「さよ」は(エ)を除けば 18 世紀以降にしか出現しない。(エ)は後世の言語使用の反映と見るべきであろう。

[3] 調査範囲外には，サヨウが主語に立つ例が近世に 2 例見える(オ)。ただし，両例とも振り仮名が施されておらず，サヨウの確例とは言えない。目的語に立つ例は調査範囲外にも見えなかった。

(オ) 武左「（略）尚後（きやうこう）願（ぐわん）に致して給（たべ）まいと存（ぞんじ）まする。」皆ミ「左様がよふござりまする」（上方，歌舞伎，幼稚子敵討，2，1753 年，大系 53p.157）

〔ʃayŏno〕事に慣れまらせぬ程に，小軽い荷を下されいと言うた所で，（キリシタン資料，天草版伊曽保物語，Ｅｓｏｐｏの生涯の事.，1593 年，大英図書館蔵 p.412，40-天伊 1593_00002, 16070）

(23) （主）「（略）見にいたれハ，人のいふたよりも見事な（太郎冠者・次郎冠者）「さやうおほしめせハ両人ながらかたじけなふござる（狂言，虎明本狂言，鳴子，1642 年写，翻刻註解上 p.600，40-虎明 1642_04033，3090）

この時代で特筆すべき点は，『虎明本狂言』にデ(24)(25)やジャ(26)を後接する述語用法が現れる点である。特にデは頻用され，相手の発話に対して肯定的に応答する表現（相手の発話内容が真であると見なせることを告げる表現）として使用されることが多い(24)。相手の発話内容が偽であると見なされる場合は否定的に応答される(25)。

(24) （祖父）「うゝ何といふぞわかうなる薬の水がある程に，それをくれてわかうなひてくれうといふか（孫一）「中／＼さやうで御ざる（狂言，虎明本狂言，薬水，1642 年写，翻刻註解上 p.108，40-虎明 1642_01021，15950）

(25) （吉田の何某）「さてハやまのかミが云事ハこハし，身どもが云事ハきくまひと云か（太郎冠者）「さやうでハござらぬ（狂言，虎明本狂言，座禅，1642 年写，翻刻註解下 p.527，40-虎明 1642_08063，16550）

(26) うつくしひ上らうさまの仰らるゝハ，げにもさやうじや，さらハいなかの男にうたをよふでかけう（狂言，虎明本狂言，坊々頭，1642 年写，翻刻註解上 p.263，40-虎明 1642_02016，5110）

以上，中世後期のサヨウについては，連用・連体修飾用法が引き続き一定数使用される一方，デ等を後接する述語用法（応答表現）も使われるようになることが確認された。

３．１．４　近世・近代

近世・近代では連用・連体修飾用法が衰退する傾向にある。まず，連用修飾用法ではニ後接例(27)が減少する。一方，連用 ϕ の例(28)が一定数見出せる。

(27) 新七飛(と)び出(い)で縋(すが)りつきお情けない，旦那殿何とて左様(さやう)に，よこしまにお聞きなさ

るるぞ（上方，浄瑠璃，淀鯉出世滝徳，上，1708 年，新全集 74p.71，51-近松 1708_02001，40010）

(28) 由「イヤまづあの茶屋で一ぷくたべましやう。爰は餘り路辺じや。正「成程さよふいたしましやう（江戸，人情本，明烏後の正夢，3-7，1823 年，東大国語研蔵 3 ウ，53-人情 1823_08007，8220）

サヨウの連用 ϕ の例は，同時期に見られる指示副詞ソウからの類推によって生じたのではないかと見ておく。『日本国語大辞典』（以下，日国）はソウについて，「（前の語・文脈などを受けて）そのように。そのようで。」(29)(30)，「連用修飾語として用いる時，その被修飾語を省略してその意味を含める。（略）」(31)，「何かを思い出したり，相手のことばに応答したりする時に感動詞のように用いる。（略）」(32)，「相手のことばに対する肯定や問い返し，または半信半疑の気持，感動などを表わす。」(33)と説明する。

(29) 天道は終れば始まるぞ。寒去れば暖になる様にぞ。人もさうぞ（抄物，両足院本周易抄，4，1477 年，日国「そう」）

(30) 行迹徳行のふみ行うわざは心にさうせうかうせうと思えばなる者ぞ」（抄物，玉塵抄，6，1563 年，同）

(31) 『五文にまけろ』〈略〉『とっぴょふずもない。盗物では有るまいし，半分殻でもそふは売らない』（江戸，談義本，根無草，3，1763～1769 年，同）山括弧原文ママ

(32) 『それ，見やしゃったかの〈略〉』『イヤイヤ，さふじゃさふじゃ』（上方，歌舞伎，幼稚子敵討，6，1753 年，同）山括弧原文ママ

(33) 詞の返答に，しか也と云心をそうといへり，心，如何。これはそといふを，そうといひなせる也。そはそのの反（名語記，4，1275 年，同）

ソウは応答表現として使用される(32)(33)。一方，通常の述語用法(29)や連用修飾用法(30)(31)としても使用される。連用修飾用法の場合，ソウにニは後接しない。このことから，応答表現としても使われるソウが，連用修飾用法の場合にニを後接しないということからの類推で，応答表現の例が増加していたサヨウの連用修飾用法でも，ニを後接しない形が使用されるようになったのではないだろうか。サヨウはもともと指示副詞サと名詞ヨウの

要素が十分に機能していたと考える（3.2 節で後述）。それが，中世後期頃になるとサヨウの形で一語化し，それ自体が指示副詞相当の語として振る舞える（サヨウが何も後接せずそれ自体で連用修飾をする）ようになったのではないだろうか[4]。この仮説を裏付けるにはソウの歴史を詳細に観察する必要がある。今後の課題とする。

連体修飾用法[5]ではノ後接例(34)が減少傾向にある。また，数は多くないが，ナ後接例が使用されるようになる(35)。

(34) 今日(こんにち)では左様(さやう)の看病婦(かんびやうふ)はあるまいと思(おも)ひますが，（雑誌（非文芸），患者並びに病家の心得て置くべき一般智識，1909 年，女学世界 1909-3p.149，60M 女世 1909_03052，40880）

(35) 淵「（略）それは向(むか)ふの客(きやく)が色男(いろおとこ)で。其方(そのほう)はふられたと申ではないか。左(さ)よふな時(とき)などは身(み)どもなら若(わか)い者(もの)を呼(よび)つけて。（江戸，人情本，明烏後の正夢，4-10，1824 年，東大国語研蔵 21 ウ，53-人情 1824_08010，79990）

なお，中世末期『日葡辞書』には既にナ後接例が見える(36)。表2ではナ後接例が浄瑠璃以降に現れるが，実際にはそれより少し遡る時期には使用されていたと推測できる。

(36) Sayŏna. l, sayŏno. サヤウナ．または，サヤウノ（さやうな．または，さやうの）。形容詞．そのような（もの），または，それに類した（もの）（キリシタン資料，（邦訳）日葡辞書，1603-1604 年，土井・森・長南編 1990:566）

近世以降サヨウの連用・連体修飾用法は指示詞の歴史に沿う形で衰退に向かい，ソノヨウ等の新しい形式に交替していくと考える。岡﨑（2010:71）によれば，「近世前期においてカク・サ系列「カヤウ・サヤウ」とコ・ソ系「コノヤウ・ソノヤウ」の勢力が交替する」

---

[4] さらに言えば，日常の口語的表現として使用されるソウに対して，古風な文語的表現としてサヨウが要請された可能性がある。この点も含め，今後の課題である。

[5] 調査範囲外だが，近世初期頃に後接要素なしの連体修飾用法 ϕ の例が 1 例見える。(カ)のサヨウは「物」を修飾し，「そのような」の意を表すと解釈できる。この例の位置付けについては保留する。

(カ) ▲とのかう屋にたらぬ物ならば。しんし。きぬばりの。やうな物では。なかつたか▲くわしやいや。さやう物では。御さりませなんた（狂言，狂言記，1-2，1660 年，北原・大倉 1983:107）

という。また，岡崎（2010:84）はサ系列指示詞からソ系指示詞への交代が，中世後期を転換期として起こったと述べる。つまり，サヨウが従来から担っていた連用・連体修飾用法に限れば，指示詞の歴史的変化に伴い，ソ系の形式に置き換わっていると言える。

しかし，サヨウナラ（バ）は指示詞の歴史的変化に伴わず，近世以降も使用され続ける。この点にはサヨウの述語用法，特に応答表現としての使用の増加が関与したと考える。

近世・近代ではデ・ジャ後接例(37)(38)の他，サ・カ等を後接して主節述語を構成する例(39)(40)，後接要素を取らずに単独で使用される例（応答 ϕ）(41)が見える。その多くが，相手の発話に対する肯定的な応答表現として使用されている。

(37) 東京が不景気ぢやの寂寞の酢ぢやのこんにやくぢやのと云のは理にうといやからのいふことぢやテ●「仰を伺ひますれば実にさやうでござい升（明治初期口語資料（文芸），安愚楽鍋，2 下，1871 年，国立国会図書館蔵 16 ウ，60C 口語 1871_02204，80790）

(38) 秋サア／＼こりやアたいへんにこはしかけた犬悦子すむめへ按さやうじやなちと立にくいな（上方，洒落本，竊潜妻，下，1807 年，洒落本大成 24p.210，52-洒落 1807_01045，105280）

(39) くみ「ハイ花参ツても宜らうか。姉さんがお案事じやアあるまいか　花「左様サ。（江戸，人情本，春色江戸紫，3 中，1864 年，国語研蔵 10 ウ，53-人情 1864_03008，33450）

(40) 將軍これを聽き少し不審の顔色しヲ丶左様か併し余は上等麥酒は注文せざりし筈なるにと云捨て（新聞（非文芸），◎モルトケ將軍，1887 年，読売新聞 1887-11-03-第 3847 号 p.2，60P 読売 1887_B3029，5670）

(41) 母「（略）帰らなくツちやアならねへことが出来たからヨ又来るがいゝはな。ネエお増さん　増「さやう。そんなら仇さん行て来なゝ（江戸，人情本，春色辰巳園，2-5，1834 年，国語研蔵 8 ウ，53-人情 1834_04005，21230）

ナラ（バ）後接例が見出せるようになるのは 18 世紀後半頃からである(42)〜(44)。

(42) 客南無三めしつぼが取ついた内サヤウナラお出あそばしませ（再掲(4)）

(43) 長尾 滝本 さやま「どふいたして／＼。梅ケ谷さまお上へおすゝめ遊ばしませ　梅

「さよふならみなさまも御いつしよに　三人「すぐに御前へ上りませう（江戸，人情本，明烏後の正夢，2-4，1822 年，東大国語研蔵 9 ウ，53-人情 1822 08004, 23860）

(44) 良吉は起きあがったが，涙ぐんだ目を，寝臺の方へ送って，「をぢさん。さよーなら。」と，ふりかへり／＼出て行った。（教科書，高等小学校国語 1 期，第十二課 子どもの看病（二），1904 年，高等小学読本 七 p.62，60T 高読 1904 14A12, 17360）

以上，近世期のサヨウについては連用・連体修飾用法の例が大きく減少し，述語用法，とりわけ応答表現としての使用が中心となることがわかった。指示詞の歴史から逸脱したサヨウが使用され続けられたのは，この新しい表現においてであろう。指示詞の歴史から逸脱したにも拘わらず，サヨウが応答表現として維持されたのは，脚注 4 で述べたこととも関わるが，特定の位相においてサヨウのような言い方が要請されたためであると考える。詳細な検討は今後の課題である。

３．２　機能的側面

３．２．１　中古・中世前期

本節では，サヨウの機能的側面に着目する。サヨウの機能的側面に関するまとまった先行論は見られない。岡﨑（2010）が断片的に触れている程度である。そこで本節では，指示詞サと名詞ヨウの機能に着目する。中古・中世前期頃のサヨウは，サの指示機能とヨウの「一致・例示」の機能が比較的明瞭である（「一致・例示」は山口 2001 の術語）。

具体例を見て行こう。まず，サヨウに先行する言語的・非言語的文脈が後続成分（サヨウの修飾先の用言や体言）の内容と一致することを表す例，また，先行する言語的・非言語的文脈が後続成分の例示となることを表す例についてである。(45)のサヨウは，先行文脈（波線部）を指示し，それが後続成分（二重傍線部）の内容と一致していることを表す。(46)のサヨウは，先行文脈（波線部）を例示したうえで，それに類する「人」を話題としている。(47)のサヨウは「（車を）さし退けさせる」という非言語的文脈（波線部）を例示し，それに類する行為（二重傍線部）を禁止している。

(45) よろしうものせさせたまひければ，なほかう思ひおこせるついでにとなむ思うた

まふる。さやうに伝へものせさせたまへ」と聞こえたまふ。（作り物語，源氏物語，行幸，11 世紀初期，新全集 22p.302，20-源氏 1010_00029，48100）

(46) 大路近なる所にて聞けば，車に乗りたる人の，有明のをかしきに簾あげて，「遊子なほ残りの月に行く」といふ詩を，声よくて誦したるもをかし。馬にても，さやうの人の行くはをかし。（随筆，枕草子，大路近なる所にて聞けば，11 世紀初期，新全集 18p.323，20-枕草 1001_00185，730）

(47) よき女房車多くて，雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に，（略）ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。（供人）「これは，さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と，口強くて手触れさせず。（作り物語，源氏物語，葵，11 世紀初期，新全集 21p.22，20-源氏 1010_00009，19120）

それぞれのサヨウの指示機能は，岡﨑（2010）でいう「照応用法」(45)(46)，「直示用法」(47)に当たる。照応用法は「対話により音声化，または書記化された言語文脈内に，当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞がある」（岡﨑 2010:11）用法，直示用法は「今，現場で目に見える，直接知覚・感覚できる対象がある」（同 p.12）用法を指す。岡﨑 2010:116）によれば，中古ではサ系列指示詞の直示用法が十分に発達していなかったという。中古の直示用法の例は，(47)のサヨウとサナガラ 1 例のみである（岡﨑 2010:116）。

先行文脈に指示対象が見出せない例もある。(48)は夕霧が紫の上を思い出し，紫の上のような人と暮らしたいと考える場面である。サヨウは，夕霧の記憶内の紫の上を指示対象として例示し，それに類する「人」を取り上げている。指示対象は話者の直接経験に関わる記憶内の要素であり，先行文脈には見られない。

(48) 人柄のいとまめやかなれば，似げなさを思ひよらねど，（夕顔）さやうならむ人をこそ，同じくは見て明かし暮らさめ，（作り物語，源氏物語，野分，11 世紀初期，新全集 22p.269，20-源氏 1010_00028，23720）

このような用法は，岡﨑（2010）で「観念用法」と呼ばれる。観念用法は「エピソード記憶領域内にある，過去の直接経験に関わる要素を指示対象と」（岡﨑 2010:12）し，「言語テキスト内に先行詞もなく，今，現場で目に見える，直接知覚・感覚できる対象もない」（同）用法である。現代語のソ系指示詞は観念用法を持たないが，中古のサ系列指示詞は

観念用法を持っていたという（岡﨑 2010:111）。観念用法は現代語のア系指示詞が持つ用法である（岡﨑 2010:13）。

上記のいずれにも該当しない例も見える。(49)は源氏が，中納言の君という長年気にかけていた女房に対して，喪服の期間中はかえって「さやうなる筋」のことを口に出さない，という内容である。新全集頭注 21 には「「さやうなる筋」は色恋の方面のこと。」（p.59）とあるが，先行文脈に「色恋の方面」に当たる記述はない。

(49) 暮れはてぬれば，御殿油（とのあぶら）近くまゐらせたまひて，さるべきかぎりの人々，御前（おまへ）にて物語などせさせたまふ。中納言の君といふは，年ごろ忍び思ししかど，この御思ひのほどは，なかなかさやうなる筋にもかけたまはず。（作り物語，源氏物語，葵，11 世紀初期，新全集 21p.59，20-源氏 1010 00009，146730）

(49)のサヨウの用法は「基準指示用法」に当たると思われる。基準指示用法は，「言語文脈内あるいは眼前の対象と心内の基準（(略)）を照合する」（堤・岡﨑 2022:92，中略川村）用法である。(49)はサヨウに先行する言語的文脈（源氏が中納言の君に対してよそよそしいこと）が，書き手の心内の一般常識（普段の源氏の振る舞い）と照合された結果，それらが一致しない（「かけたまはず」である）ことを表していると考える。(49)は岡﨑（2010:217-240）の分類で言えば，「曖昧指示表現α」に当たると思われる。現代語の例を挙げておく(50)。

(50) a.あの人，{そっち系／その筋} の人なんだって。
b.（町でばったり男女の友人に出会い）ははーん，2 人はそういう関係か。
（堤・岡﨑 2022:93 一部改変）

以上，中古・中世前期頃のサヨウは，指示詞サと名詞ヨウが複合した機能を表す。それぞれの機能（照応・直示・観念・基準指示用法，一致・例示）は明確な線引きが難しい場合が多い。そのため，一々の用例数を示すことは避ける。

ここで，サヨウの機能と後接要素の関係についても考えたい。山口（2001:106）は，「やうなり」は類似するものを関係づける「類縁性の用法」（例示・一致・比況）を持つという。そのうち「例示や一致の用法は，ともに連用法・連体法という修飾法に偏る」とされ

る(51)～(54)。これは「例示性や一致性が，後続成分のための例示であったり，後続成分の指示内容との一致，不一致であったりすることにおいて，ともに後続成分の修飾法に立ってこそめだつ意味関係だからであろう」と説明される。

(51) 成親・俊寛が様に，遠き国遥かの嶋へもうつしやらんずるにこそ。（軍記，覚一本平家物語，3，法皇被流，1371 年頃，山口 2001:105）**連用・例示**

(52) 長恨歌，王昭君などやうなる絵は，おもしろくあはれなれど，（作り物語，源氏物語，絵合，11 世紀初期，同）**連体・例示**

(53) あはれ親の子を思ふやうに，子は親をおもはざりけるよ。（軍記，金刀比羅本保元物語，中，13 世紀前半，山口 2001:106）**連用・一致**

(54) ことにありしやうなる言づてもしたまはねば，（作り物語，源氏物語，夕顔，11 世紀初期，同）**連体・一致**

一致や例示を表すサヨウが連用・連体修飾用法に偏ることは，「やうなり」が連用・連体法に偏ることと並行的に捉えられる。中世前期までのサヨウの後接要素の様相は，サとヨウの原義を反映したものと言えよう。

また，山口（2001:106）によれば，「類縁性の用法」には「一致・例示」の他に，「比況」の用法があるという。比況の用法には連用・連体・述語法の例が認められるとされる。

(55) 紅葉のやうやう色づくほど，絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして，（作り物語，源氏物語，夕顔，11 世紀初期，山口 2001:106）**連用・比況**

(56) 物語に，ことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。（作り物語，源氏物語，賢木，11 世紀初期，同 p.107）**連体・比況**

(57) こなたかなたの目には，李を二つつけたるやうなり。（再掲(19)）**述語・比況**

「やうなり」の述語用法は比況を表す場合に用いられることがわかる。サヨウが比況の用法を表す例は，本章の調査では見出せなかった。サヨウにヨウの原義が反映していたとすれば，比況を表せないサヨウには述語用法の例が認められないということになる。

では，なぜサヨウは比況を表せないのだろうか。これは文が 2 文以上になる場合，原理的に比況の意味を表しにくいことが関係すると考える。たとえば，比況の意は「まるで小

学生が泣きわめくように，彼は泣いた。」のように，1 文で表されるのが普通である。これを「*小学生が泣きわめいた。まるでそのように，彼は泣いた。」のように 2 文に分けると，1 文目で既定事実のように描写された内容が，2 文目では非実現のように描写され直すことになり，不自然である。ただし，1 文目が実際に生じた出来事としてではなく，発話時とは無関係の命題として提示されれば，「小学生が泣きわめく。まるでそのように，彼は泣いた。」という言い方ができなくはない。しかし，やや修辞的である。基本的には，比況の意味は 2 文では表せないと言ってよい。なお，一致や例示の解釈であれば，「小学生が泣きわめいた。そのように泣く人たちを見て彼は悲しんだ。」のように，2 文で表されても問題ない。これと同じ原理が，古典語のサヨウにも当てはまると考える。指示詞サを含むサヨウは前件と後件の 2 文を繋げることが多い。よって，比況の意は表しにくいと言える。そのため，サヨウに比況を表すものは見えず，それに伴って述語用法の例も見出しがたいと考える。

３．２．２　中世後期以降

中世後期以降もサヨウの連用・連体修飾用法の例は，照応・直示・基準指示用法を持ち，一致・例示を表す。なお，観念用法の例は見られない。これはサ系列指示詞の観念用法が中世前期を最後に見られなくなること（岡崎 2010:124-125）の反映だろう。

中世後期から見られるようになる述語用法についても考察する。(58)〜(60)のサヨウは相手の発話内容の真偽を判断する応答表現として使われている。

(58)　（祖父）「うゝ何といふぞわかうなる薬の水がある程に，それをくれてわかうなひてくれうといふか（孫一）「中ノ＼さやうで御ざる（再掲(24)）

(59)　（罪人）「某ハ河内の国，やをの里の者でござるが，やをのおぢざうさまより，ゑんまわうへのお文で御ざる（閻魔王）「尤さやうであらう，（狂言，虎明本狂言，八尾，1642 年写，翻刻注解上 p.486，40-虎明 1642_04006，5290）

(60)　（主）「汝がゆくまひならハ，身共にもつてゆけといふ事か（太郎冠者）「いやノ＼さやうでハござなひ，（狂言，虎明本狂言，腥物，1642 年写，翻刻注解上 p.595，40-虎明 1642_04032，1750）

応答表現における指示機能は，単なる先行文脈指示とは異なり，基準指示用法を持つ。

(58)(59)のサヨウは，相手の発話内容を話者の心内の基準と照合し，その結果が一致していることを表す。照合の結果，相手の発話内容が話者の心内基準と一致しなければ否定される(60)。近世・近代における応答表現としてのサヨウも，同様の機能を持つと考える。応答表現の基準指示用法は堤・岡﨑（2022）で「同意」とされており，「曖昧指示表現α」(49)と区別される。

前節で，比況を表せないサヨウは述語用法を持たないと述べた。しかし，中世後期以降，サヨウは述語用法を獲得する。これはサヨウが比況を表せるようになったわけではなく，サとヨウの機能を十分に反映しなくなり，一語化しつつあったことの表れと考える。応答表現として使用されるサヨウが表す基準指示用法は，指示詞の範疇に収まる機能ではある。しかし，かつて照応・直示・観念用法等，様々な機能を持っていた頃と比較すると，指示詞を含む表現としての自由度は失われている。また，サヨウはかつて一致・例示の機能を有していたが，中世後期以降の応答表現の場合，先行文脈（特に相手の発話）と話者の心内基準との一致・不一致を問題とする機能のみに固定化している。サヨウが一語化することで，その機能は同意を表す基準指示用法に特化するようになったということである。

既述の如く，サ系列指示詞は中世後期を転換期としてソ系指示詞へと交替していく（岡﨑 2010:84）。それにも拘わらず，サヨウは中世後期以降も使用され続ける。これは，サヨウが応答表現として，新たな機能を獲得したためだろう。サヨウは応答表現として使用され始めたために，サ系列指示詞衰退の影響を受けず，その形式を維持できたと考える。

３．３　サヨウの応答表現化の背景

以上見たように，時代が下るにつれ，サヨウの述語用法，とりわけ応答表現的に使用される例が増加していく。サヨウはどのようにして述語用法（応答表現）の例を増加させるただろうか。この問題を考察するにあたり，サヨウ＋デがアル等を後接する例について，加えて指示詞サ・シカ，サリ等の述語用法について検討したい。

まず，サヨウの述語用法がデ後接例を出発点として拡大していくことに着目する。『虎明本狂言』を見てみると，サヨウ＋デは全て，アル（アリ）・ナイ（ナシ）・オハシマス・ハベル（ハベリ）・サブラフ・ゴザル・ゴザアル等，存在の有無を表す動詞・形容詞由来の形式（以下，アルで一括する）を後続させている(61)～(63)。

(61)　（罪人）「某ハ河内の国，やをの里の者でござるが，やをのおぢざうさまより，

ゑんまわうへのお文で御ざる（閻魔王）「尤さやうであらふ（再掲(59)）

(62) 身共が身のうへをわらハせらるゝかと思ふて，きびがハるかつたが，さやうでハなひよな（狂言，虎明本狂言，八尾，1642 年写，翻刻注解上 p.221，40-虎明1642_02010，4130）

(63) （祖父）「うゝ何といふぞわかうなる薬の水がある程に，それをくれてわかうなひてくれうといふか（孫一）「中ノ＼さやうで御ざる（再掲(24)）

これに類似する表現に，サヨウ＋ニ／ニテの後にアルが続く例がある(64)(65)。

(64) むかし，陸奥（みちの）の国にて，なでふことなき人の妻（め）に通ひけるに，あやしう，さやうにてあるべき女ともあらず見えければ，（再掲(9)）

(65) （道綱母）「こはなぞ，こはなぞ」と言へど，いらへもせで，ろんなう，さやうにぞあらむと，おしはからるれど，（再掲(10)）

デ＋アルは「「にて」が「で」と変化し，それに動詞「ある」が複合した語」（山口秋穂 2001:502）と説明される。このことから，ニテ＋アルとデ＋アルは連続的と言える。吉田（2019:247-263）によれば，「にてあり」が断定表現化を果たしたと思しき例は 12 世紀後半に見えるとされ，それ以前は「～という状態（資格）でいる」という存在の意を表すという。述語用法のデ＋アルに連なるのは，断定表現化後のニテ＋アルであろう。また，ニ＋アルは「に存在する」意の他に，「である」意があるとされている（佐伯 1956:1）。よって，サヨウ＋ニ／ニテ＋アルとサヨウ＋デ＋アルは意味・構造の点で連続的ということができる。このことから，サヨウ＋デ＋アルが出現した背景には，サヨウ＋ニ／ニテ＋アルが使用されていたことがあったのではないかと推測される。

そこで，サヨウ＋ニ／ニテ＋アルの歴史的推移を確認する（表 3）。表 3 では，ニとアルの間に係助詞が介在する例も表示する。例の少ない近世以降は一括して示す。また，応答表現との関係を見るため，各時代で「サヨウ＋ニ／ニテ＋アル」が相手の発話を受けている例の割合を最下部に示す（相手の発話率）。なお，相手の発話を受けているだけで，必ずしも応答表現と解釈できないものも含む。

表3）「サヨウ＋ニ／ニテ＋アル」の使用状況

		中古	中世前期	中世後期	近世以降
ニ	ニアル			6(16.8)	2(0.1)
	ニハアル	1(0.9)		1(2.8)	
	ニモアル			2(5.6)	
	ニゾアル	2(1.8)			
	ニオハシマス	1(0.9)			
	ニハベル	1(0.9)			
	ニサブラフ		1(0.9)		
	ニモサブラフ		1(0.9)		
	ニソウロウ			1(2.8)	
	ニハソウロウ			1(2.8)	
	ニゴザル			16(44.7)	8(0.5)
	ニゴザアル			4(11.2)	
	ニモゴザル			1(2.8)	
	ニモゴザアル			1(2.8)	
	ニモゴザナイ			1(2.8)	
ニテ	ニテアル	1(0.9)			
	ニテオハシマス	1(0.9)			
	ニテサブラフ		1(0.9)		
	ニテゴザアル			1(2.8)	
計		7(6.5)	3(2.6)	35(97.7)	10(0.6)
相手の発話率		0.0%	66.7%	60.0%	90.0%

※括弧外の数字は粗頻度，括弧内の数字は100万語あたり（記号等除く）の頻度を表す

表 3 を見ると，中古・中世前期の段階からサヨウ＋ニ／ニテ＋アルの例が見えるが(9)(10)，その数はあまり多くないことがわかる。それが中世後期になると，用例が急増することが看取される(61)〜(63)。また，中古に 1 例も見られなかった相手の発話を受ける例(66)が，中世前期以降見られるようになる（中世前期 3 例中 2 例 66.7%，中世後期 35 例中 21 例 60.0%，近世以降 10 例中 9 例 90.0%）。ただし，中世後期までは相手の発話を受けない例(67)も一定程度存する。

(66) （母とぢ）「（略）いまだ死期も来らぬ親に，身を投げさせん事，五逆罪にやあらんずらむ。（略）」と，さめ〳〵とかきくどきければ，祇王涙をおさへて，（祇王）

「げにもさやうにさぶらはば，五逆罪うたがひなし。（軍記，平家物語，1，祇王，13 世紀頃，新全集 45p.45，30-平家 1250_01006，45570）

(67) （朝比奈）「（略）えんまわうハ，玉のかふりに石のおびをして，金銀をちりばめ，あたりもかゝやくやうなるていときひてあるが，一かうさやうにハ候ハぬよ（狂言，虎明本狂言，朝比奈，1642 年写，翻刻注解上 p.464，40-虎明 1642_04001，6340）

一方の中世後期におけるサヨウ＋デ＋アルは，68 例中 61 例 89.7%が相手の発話を受ける例である（少数見られる，相手の発話を受けない例は(62)等）。これと比較すると，サヨウ＋ニ／ニテ＋アルの相手の発話を受ける例は，それほど多くない。なお，表 3 では近世以降あまり例が見出せない。これは，そもそもニを後接するサヨウが減少傾向にあるためであろう（表 2）。ただし，近世以降のほぼ全ての例が相手の発話を受ける。

ニテは先述のようにデの変化前の形とされるが，表 3 ではニテを構成要素とする例は少ない。そのため，サヨウ＋ニテ＋アルが直線的にサヨウ＋デ＋アルに移行したとは考え難い。ここでは，サヨウ＋ニ＋アルという意味・構造の類似した表現が既に使用できていたことを背景として，サヨウ＋デ＋アルが成立したと考えておく。ただし，中世後期までは相手の発話を受けないサヨウ＋ニ＋アルも一定程度存在していることから，サヨウ＋ニ＋アルの段階では応答表現として確立しているわけではなく，サヨウ＋デ＋アルの段階に至って応答表現化したと見る。

以上から，サヨウ＋デ＋アルが出現した背景にはサヨウ＋ニ＋アルが使用されていたことがあったと考える。サヨウ＋ニ+アルもサヨウ＋デ＋アルもそれ自体は指示対象の真偽を判断するだけであるが，それが対者意識に立って使用されれば応答表現のように解釈できる。森田（1997:206）も「さやう」の説明の中で，「自己の心中でソウダナ……と思いめぐらし，ソウダと納得し了解することは，相手のことばをソウダと肯定することに通ずる」と述べている。こうして，サヨウのデ後接例が使用され始めたことを皮切りに，述語用法，特に相手の発話に対する応答表現の例が次第に拡大していったのだろう。

また，中世前期頃までは指示詞サ・シカの述語用法や，指示詞サ＋アリの複合形サリ（の反復形）が応答表現として使われていたと思われる(68)～(71)。

(68) この男の供（とも）なる人を呼ばせて，（女たち）「この，のぞきたまへる人は，この，南

に宿(やど)りたまへるか」と問ふ。（供人）「さなり」（歌物語，平中物語，10 世紀後半，新全集 12p.526，20-平中 0960_00001，209250）

(69) （源氏）「いかにぞ。昨夜(よべ)，宮は待ち喜びたまひきや」，（夕霧）「しか。かなきことにつけても，涙もろにものしたまへば，いと不便(ふびん)にこそはべれ」（作り物語，源氏物語，野分，11 世紀初期，新全集 22p.272，20-源氏 1010_00028，31900）

(70) 院，「融ノ大臣カ」ト問セ給ケレバ，使，「然也」ト答フ。（説話，今昔物語集，14-29，1100 年頃，吉田 2019:259）

(71) 「おい，さり／＼」とうなづきて，（作り物語，源氏物語，玉鬘，11 世紀初期，大木 1981:123）

サ・シカ・サリについて詳細に調査してみなければ判然としないが，サヨウが応答表現化した背景の 1 つとして，もともと応答表現として使用されていたサ・シカ・サリが衰退していくことも影響したと考える。

４．ナラ（バ）の変化過程

次にナラ（バ）の歴史を観察する。小林（1996）によれば，古典語におけるナラバは，体言(72)または活用語連体形(73)しか承接し得なかったとされる。うち活用語の連体形に承接する例は，中古では僅かしか見られないという（小林 1996:114）。

(72) 石木(いはき)をも 問(と)ひ放(さ)け知らず 家ならば〔伊弊那良婆〕かたちはあらむを（再掲(6)）

(73) 「なを源氏の君，まことに犯しなきにて，かくしづむならば，かならずこのむくひありなん」（作り物語，源氏物語，明石，11 世紀初期，小林 1996:44）

しかし，中世前期以降，活用語連体形にナラバが承接する例が増加していき，中世後期頃には，文相当句にも承接するという(74)〜(76)。小林（1996:123）はこれらを「一旦終止した文全体を承接したもの」と考えている。

(74) a.「サラバ，タダアッタル時トモカクモナッタゾナラバ，ナントショウゾ？」（キリシタン資料，天草版平家物語，1-7，1592 年，大英図書館蔵 p.57，小林 1996:123）

b. 只ありし時ともかくもなりたりせばいかゞせむ（軍記，覚一本平家物語，2，阿古屋之松，1371 年頃，同）

(75) （太郎冠者）／今まいりあれへおりそひ／＼と申さるゝならハ，おざしきを見れハやぶれまとじやとおしやれ（今参）／かしこまつた（太郎冠者）／その心をとハれうならハ，ゐどころが候ハぬと（狂言，虎明本狂言，今参，1642 年写，小林 1996:128）

(76) 已降スルトキハ自殺ハナニカセウソ　死ネナラハ自殺セウソ（抄物，史記抄，5，32 ウ，1477 年，同）

このような文相当句を承接する形式は，ナラバだけに限らない。信太（1970:38），青木（2022:94）によれば，ナレバやナレドモ，ヂヤホドニ等，接続部で用いられるコピュラ形式も文相当句を承接できる(77)～(79)。

(77) 童は見忘れたれども，俊寛は何故に忘れうぞなれば，これこそよと言いも敢えず（キリシタン資料，天草版平家物語，1-12，1592 年，大英図書館蔵 p.86，40-天平 1592_01012，13280，青木 2022:94）

(78) 粛何ガ我事ヲサル者ヂヤナンドヽ申シテゾアルランナレドモ用ラレヌゾ（抄物，漢書列伝竺桃抄，4，7 ウ，信太 1970:38 改変，青木 2022:95）

(79) 太子ニハナントシテ黥ハセウゾヂヤホドニ〔中略〕其師傳ヲ黥シタゾ（抄物，史記抄，3，52 オ，1477 年，湯沢 1981:252 改変，青木 2022:95）中略原文ママ

青木（2022）は，これらが文相当句を引用句として受けたものと説明する。たとえば(77)は「どうして忘れることがあろうか，ということなので」（＝「決して忘れてはいないので」），(78)は「きっと申しているだろう，ということであるが」，(79)は「なぜ入れ墨をするだろうか，ということなので」（＝「入れ墨をすることはないだろうから」）というような内容を表すという。そして，「直接引用または間接引用の「文相当」句を「文相当」形式のまま示し，「なれば／なれども／じゃほどに」といった〈コピュラ＋接続助詞〉形式を用いて後続の節に繋げる，様々な構文パターンがある」（青木 2022:95）と述べている。

その中でも本研究が着目するのは，「相手の発話を受け，その発話を引用した形で「ならば」が続いている」（青木 2022:94）例である(80)(81)。(80)は相手の発話ではなく，相手

の意向を想定して発話し，それをナラバが受ける例であるが，先行する文相当句を引用する点は(81)と共通する。

(80) 何故に祇王は返事をせぬぞ？参るまいか？参るまいならば，その様を言え，清盛も図る様が有る（キリシタン資料，天草版平家物語，2-1，1592年，大英図書館蔵 p.99，40-天平 1592_02001，25780，青木 2022:94）

(81) 殊更ようじんもわるふござる程に，身共はゑまいるまひ「汝がゆくまひならば，身共にもつてゆけといふ事か（狂言，虎明本狂言，腥物，1642 年写，翻刻注解上 p.595，40-虎明 1642_04032，1530，同）

青木（2022:94）は，(80)(81)が「いずれも，「（お前が）行かないというのなら」といった意味で用いられている」ことから，「「ならば」の前接部分は，「引用句」としての「名詞句」であると言えるように思う」と述べている。以上，ナラバに承接する文相当句が引用句として見なせることを確認した。こういった例は，主に中世後期頃に見える。

５．サヨウナラ（バ）の接続詞化

前節で，中世後期頃のナラ（バ）が引用句としての文相当句を承接するようになることを確認した。また，文相当句に承接するナラ（バ）は，相手の発話を受け，その発話を引用した形で使用されることがあることを見た。これらの点が，ナラ（バ）がサヨウに承接するようになることと関係すると考える。

サヨウは，もともと指示対象の内容が後続成分の内容と一致していたり，指示対象が後続成分の内容の例示になっていたりする，ということを表していた。それが中世後期以降，相手の発話を受けるという点のみに焦点が当たるようになって，相手の発話内容の真偽を判断する応答表現として使用されるようになったことを，3 節で確認した。

以上のサヨウとナラ（バ）の歴史を見ると，相手の発話を引用するナラ（バ）が使用される中世後期以降に，サヨウが応答表現化していったことがわかる。中世後期以降のサヨウは，相手の発話を引用する応答表現としての使用を増加させていく。そのため，相手の発話を引用句として受けるナラ（バ）の前接要素として採用されやすかったと考える。

とはいえ，中世後期は未だサヨウの連用・連体修飾用法も一定程度使用されていた時期であった。中世後期では，応答表現のサヨウは勢力の弱いものであったと言える。サヨウ

ナラ（バ）という形式が中世後期ではなく，18 世紀後半以降にしか本格的に見えるようにならないのは，それまでは応答表現のサヨウの勢力があまり強くなかったからであると考える。サヨウとナラ（バ）が複合して接続詞になるには，サヨウの述語用法が拡大し，応答表現として十分に使用されるようになることが必要であったと言えよう。

もちろんサヨウが完全に応答表現化せずとも，ナラ（バ）がサヨウに承接することは可能である。サヨウは引用句である以前に体言相当句であり，その点ではナラ（バ）の上接要素として特段の制限があったわけではない。実際，17 世紀以前にもサヨウナラ（バ）という形式自体は存在している(1)(2)。ただし，それらは接続表現であり，構成要素の個々の機能が十分に見られる段階であったと思われる。

６．おわりに

本章では，「サヨウ及びナラ（バ）が 10 世紀までに見出せるにも拘わらず，サヨウナラ（バ）がまとまって使用されるようになるのがなぜ 18 世紀後半以降なのか」という問について考察し，その背景として，「サヨウ及びナラ（バ）が変化したことで，サヨウナラ（バ）という表現を構成しやすくなったからである」という仮説を立てた。

この仮説を検証すべく， サヨウを観察したところ，もともとニ・ノ等を後接する連用・連体修飾用法が中心だったが，中世後期以降デ・サ等を後接する述語用法，とりわけ相手の発話内容の真偽を判断する応答表現が中心となることが確認された。この変化は，先行文脈が後続成分の内容と一致したり例示であったりすることを表していたサヨウが中世後期以降，相手の発話を受ける引用句相当の表現になる変化として捉えられる。

ナラ（バ）の推移も確認したところ，ナラバはもともと体言相当句を承接する形式であったが，中世後期頃，引用句としての文相当句，特に相手の発話の引用を受ける形式になったことが確認された。

サヨウ及びナラ（バ）の歴史から，相手の発話を引用する応答表現となった中世後期のサヨウが，その段階に至って，ナラ（バ）に前接し得る句としての条件を備えたと考える。それによって，サヨウナラ（バ）という表現が多用されるようになり，指示性の不明瞭化と場面展開機能の獲得を経て，一語化（接続詞化）したと言えよう。接続詞サヨウナラ（バ）は，サヨウ及びナラ（バ）という表現が存在すれば自然と成立・定着する表現ではなく，それぞれの構成要素が質的に変化した結果，生まれた表現であるということである。

しかし，問題も残る。サヨウナラ（バ）が使用された近世には，ソレナラ（バ）やソレ

デハ等，順接仮定条件を表す他の接続表現が使用される時期でもある。同じ順接仮定条件の接続表現が存在しているにも拘わらず，サヨウナラ（バ）はなぜ・どのように使用され続けたのだろうか。この点の解明には，サヨウナラ（バ）を使用する位相等を考慮に入れる必要がある。今後の課題とする。

使用テキスト

一部，記号で示す。

◎…**国立国語研究所**（2023）『**日本語歴史コーパス**』（**中納言** 2.7.2，**データバージョン** 2023.03）https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/（2023 年 9 月 26 日確認）①キー: (語彙素読み="サヨウ" AND 語彙素="然様"), ②キー: 語彙素読み="サヨウナラ"，③キー: (語彙素="なり" AND 品詞="助動詞" AND 活用形 LIKE "未然形%") AND 後方共起: 語彙素="ば" ON 1 WORDS FROM キー，④キー: (語彙素読み="サ" AND 品詞 LIKE "副詞%")AND 前方共起: 書字形出現形="「" ON 1 WORDS FROM キー，⑤キー: (語彙素読み="シカ" AND 品詞 LIKE "副詞%")AND 前方共起: 書字形出現形="「" ON 1 WORDS FROM キー　※以上の検索条件式で得られる例の中から，サヨウナラ（バ），サヨウ，ナラ（バ），サ，シカの例を抽出した ※検索には国立国語研究所『コーパス検索アプリケーション「中納言」』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）を用いた

○…『新編日本古典文学全集』小学館

△…『日本古典文学大系』岩波書店

□…武藤貞夫・岡雅彦 編『噺本大系』東京堂出版

▲…洒落本大成編集委員会 編（1978-1988）『洒落本大成』中央公論社

■…国立国語研究所・東京大学国語研究室所蔵本

●**上代【和歌集】**万葉集…◎○

●**中古【作り物語】**竹取物語，落窪物語，源氏物語，堤中納言物語…◎○，**【歌物語】**伊勢物語，**【日記・紀行】**蜻蛉日記，和泉式部日記，紫式部日記，更級日記，讃岐典侍日記…◎○，**【随筆】**枕草子…◎○，**【歴史物語】**大鏡…◎○，

●**中世前期【軍記】**保元物語，平治物語，平家物語…◎○，**【説話】**今昔物語集（本朝部），宇治拾遺物語，十訓抄…◎○，古今著聞集…△，**【日記・紀行】**建礼門院右京大夫集，とはずがたり…◎○，**【随筆】**徒然草…◎○

●**中世後期【キリシタン資料】**天草版平家物語，天草版伊曽保物語…◎大英図書館蔵本，日葡辞書…土井

忠生・森田武・長南実 編（1980）『邦訳 日葡辞書』岩波書店，**【狂言】**虎明本狂言…◎大塚光信 編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』清文堂出版.

●**近世前期【随筆・紀行】**駿台雑話…◎○，うひ山ぶみ…◎国文学研究資料館蔵本，**【浄瑠璃】**薩摩歌，五十年忌歌念仏，卯月の潤色，淀鯉出世滝徳，鑓の権三重帷子，女殺油地獄…◎○，**【噺本】**当世軽口噺揃…□，**【歌舞伎】**幼稚子敵討…△，**【狂言】**狂言記…北原保雄・大倉浩 編（1983）『狂言記の研究 下 解説篇 翻字篇 索引篇』勉誠社.

●**近世後期【洒落本】**陽台遺編・妣閣秘言，原柳巷花語，郭中奇譚，南閨雑話，甲駅新話，当世左様候，深川新話，風流裸人形，総籬，仕懸文庫，北華通情，阿蘭陀鏡，昇平楽，南遊記，嘘之川，竊潜妻，誰が面影，粋の曙，箱まくら，花街鑑…◎▲，**【人情本】**明烏後の正夢，色深狭睡夢，花街寿々女，仮名文章娘節用，春色梅児与美，恋の花染，春色辰巳園，花廼志満台，春色連理の梅，春色江戸紫…◎■

●**近代【明治初期口語資料】**開化のはなし，文明開化，よりあひばなし，開化問答…◎国立国語研究所蔵本，安愚楽鍋，明治の光，民権自由論…◎国立国会図書館蔵本，春秋雑誌会話篇…◎早稲田大学図書館蔵本，**【小説】**五重塔，たけくらべ，思出の記，吾輩は猫である，蒲団，高野聖，今戸心中，或る女，腕くらべ，無限抱擁，伸子…◎「『日本子歴史コーパス明治・大正編IV近代小説』（短単位データ1.0）概説書」（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-shosetsu-202103.pdf）参照，**【雑誌】**東洋学芸雑誌，国民之友，太陽，女学雑誌，女学世界，婦人倶楽部…◎，**【落語 SP 盤】**漆山角力の噺，愛宕参り，付焼刃，鉄砲弥八，専売芸者，絵手紙，口あい小町，日和違い，電話の散財，天王寺名所，理屈あんま，四百ブラリ，やいと丁稚，浮世床，ぬの字鼠，裁判の噺，昔話田舎者，盲目提灯，鋲泥棒，一枚起請，焙じ茶，粗忽長屋，山号寺号，夜鳴きうどん，成田屋息子…◎，**【新聞】**読売新聞…◎，**【教科書】**高等小学校国語 1 期…◎第 1 期（1904 年）『高等小学読本』一～八，小学校国語 3 期…◎第 3 期（1918 年）尋常小学国語読本巻一～十二，小学国語 4 期…◎第 4 期（1933 年）小学国語読本尋常科用巻一～十二，小学国語 5 期…◎第 5 期（1941 年）ヨミカタ一～二・よみかた三～四・初等科国語一～八，小学国語 6 期…◎第 6 期（1947）こくご一～四・国語第三学年～第六学年

終章　本研究のまとめ

１．本研究のまとめ

１．１　はじめに

本研究では以下の目的と方法を設定し，記述を行った。

目的：指示詞や条件表現といった日本語文法カテゴリーと関わるサ系接続表現の歴史の構築を目指すとともに，サ系接続表現の歴史的記述において日本語文法史の観点が重要であることを主張する

方法：順接仮定条件のサ系接続表現であるサラバとサヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化に着目する。“別れの挨拶語”化がなぜ順接仮定条件を表すサ系接続表現にのみ生じるのか，という問を手がかりとして，当該現象に指示詞や条件表現がどのように関わるのかを記述する

これを踏まえつつ，各章のまとめを行う。

１．２　第１章のまとめ

第 1 章では，サラバの“別れの挨拶語”化について記述した。**①発話直後にその場を離れる行動（離行行動）を伴うこと**，**②後件が明示されないこと（後件不明示）**という観点で調査したところ，①と②の例はそれぞれ中世後期まで少なく，近世前期に増加することが分かった。また，両方の特徴を満たす例は近世前期に，②のうち①の特徴を満たす例は中世後期以降増加することがわかった。この結果から，中世後期以降サラバが後件不明示であれば離行行動を伴うことが一般化していたと言える。本章では 2 つの特徴に基づいて用例を観察することで，サラバが“別れの挨拶語”化する過程の一端を明らかにした。

先行論では，指示詞サや未然形バが中世後期頃を境に衰退していくとされている（岡﨑 2010:84，小林 1996:134）。しかし，サラバは構成要素に指示詞サを含み，未然形バの形を有していながら，中世後期以降も衰退しない。むしろ 17 世紀後半以降オサラバや繋辞後接例といった新しい形式を生み出し，“別れの挨拶語”化という独自の変化を遂げた。サラバの“別れの挨拶語”化は，指示詞や条件表現の変化の中で説明可能な現象ではなく，サラバ

という言語形式に生じた個別の変化を捉えて初めて説明できる現象であると言えよう。

１．３　第２章のまとめ

サラバの“別れの挨拶語”化の過程を精緻化するには，その前段階である「接続詞化」の過程を把握する必要がある。そこで，第 2 章ではサラバの接続詞化の過程を調査した。**①サラバの構成要素である指示詞サの指示性が不明瞭であること**，**②サラバが場面展開機能を有すること**という観点で調査を行ったところ，中古で僅かだった指示性不明瞭の例は中世以降徐々に増加し，中世末期にまとまって見出せることがわかった。また，意志・命令表現との共起率が中世前期以降高まり，イザ等との共起例が中世後期にまとまって見られることから，場面展開機能は中世前期から後期にかけて発達したことがわかった。オサラバや繋辞後接例が 17 世紀後半以降現れる点を踏まえると，指示性の不明瞭化及び場面展開機能の発達が中世末期に最も顕著になるのは，時期的整合性も取れており蓋然性が高い。

１．４　第３章のまとめ

第 3 章ではサラバの接続詞化の過程で見られる諸特徴が，順接仮定条件のサ系接続表現独自のものであるかを確認するため，サレバと未然形バを比較対象として取り上げ，サラバの歴史を調査した。

①サラバとサレバ，未然形バは後続表現においてどのような相違があるかという課題に取り組んだところ，サラバは意志・命令表現との共起率が高く，特に中世前期以降 7〜9 割に達するが，一方で，サレバは意志・命令表現とほとんど共起しないことがわかった。また，未然形バは一定数意志・命令表現と共起し，中世後期以降 5〜7 割に達するが，サラバほどの偏りはないこともわかった。サラバが意志・命令表現と共起しやすいのは，サラバが反事実的事態を表しにくい点で，意志・命令表現との共起に制限がなかったことが要因の 1 つと考える。

②サラバとサレバ，未然形バは先行事態においてどのような相違があるかという課題にも取り組んだ。その結果，サラバは外部事態を受ける例が多く，中世後期には 8 割以上に達することがわかった。一方，サレバは例外を除き，外部事態をほとんど受けないこともわかった。外部事態は話者にとって新情報であり，仮定的に処理されるため，サレバでは受けにくかったと考える。また，未然形バもサラバに比べると，外部事態をあまり受けない。指示詞サを含むサラバの方が，端的に外部事態を指示できたためと考える。

条件表現史では，未然形バが表した仮定条件の表現が近代語で消滅し，もともと確定条件を表した已然形バが仮定条件を表すようになるとされる（小林 1996:17）。ところが，サラバは未然形バ衰退の流れとは連動しない。中古のサラバは比較的幅広い表現を後続していた点で，未だ未然形バの一形式という性格が強かったと考える。だが，中世前期以降サラバと意志・命令表現の共起率が急増する。反事実的事態を表しにくい等の特性を背景に，意志・命令表現との共起の偏りを強めていったと考える。また，サラバはそもそも外部事態を受ける例が多かった。サラバが指示詞サを含み，順接仮定条件を表したことを背景に，中世後期にその傾向が顕著になる。以上の調査と先行論の指摘から，サラバは中世前期以降，未然形バの一形式という性格を脱し始め，中世後期には場面展開機能を担う接続詞となったと考える。本章で見られたサラバの諸特徴は，順接仮定条件を表すサ系接続表現としての，サラバ独自の特性を背景とするものである。

１．５　第４章のまとめ

第 4 章ではサヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化の過程を記述した。**①発話直後にその場を離れる行動（離行行動）を伴うこと，②後件が明示されないこと（後件不明示）**という観点で調査を行ったところ，①と②を満たすサヨウナラ（バ）はそれぞれ，近世では少なく，近代になると増加することがわかった。また，サヨウナラ（バ）全用例に対して①②を同時に満たす例も近世では少なく，近代になると増加すること，②の特徴を満たすサヨウナラ（バ）のうち①の特徴も満たす例の比率は，江戸では 19 世紀初期以降高いこともわかった。また，各特徴の使用率は上方関西よりも江戸東京の方が高いことが多く，使用率が高くなる時期も江戸東京で先行する点が確かめられた。

１．６　第５章のまとめ

第 5 章ではサヨウナラ（バ）の接続詞化の過程を記述した。**①サヨウナラ（バ）の構成要素であるサヨウの指示性が不明瞭であること，②サヨウナラ（バ）が場面展開機能を有すること**という観点で調査を行ったところ，指示性不明瞭の例が 18 世紀後半以降，上方・江戸双方で見出せるようになること，意志・命令表現やハイ等との共起関係の推移から，場面展開機能を有する例も 18 世紀後半以降，上方・江戸双方で顕著に見出せるようになることが確認できた。以上より，サヨウナラ（バ）は 18 世紀後半頃に接続詞化したと考える。

１．７　第６章のまとめ

第６章では，「サヨウ及びナラ（バ）が 10 世紀までに見出せるにも拘わらず，サヨウナラ（バ）がまとまって使用されるようになるのがなぜ18世紀後半以降なのか」という問について検討した。

サヨウの用例を観察すると，もともとニ・ノ等を後接する連用・連体修飾用法が中心だったが，中世後期以降デ・サ等を後接する述語用法，特に応答表現が中心となることが確認された。この変化は先行文脈を受け，後続成分の内容を説明する表現であったサヨウが，中世後期以降，相手の発話を受ける引用句相当の表現になる変化として捉えられる。

ナラ（バ）の推移も確認したところ，ナラバはもともと体言相当句を承接する形式であったが，中世後期頃，引用句としての文相当句，特に相手の発話の引用を受ける形式になったことが確認された。

サヨウ及びナラ（バ）の歴史から，相手の発話を引用する応答表現となったサヨウは，中世後期に至って初めてナラ（バ）に承接しやすくなったことがわかる。それによって，サヨウナラ（バ）という表現が多用されるようになり，指示性の不明瞭化と場面展開機能の獲得を経て，一語化（接続詞化）したと言えよう。接続詞サヨウナラ（バ）は，サヨウ及びナラ（バ）という表現が存在すれば自然と成立・定着する表現ではなく，それぞれの構成要素が質的に変化した結果，生まれた表現であるということである。

１．８　本研究のまとめ

以上より，サラバとサヨウナラ（バ）の史的展開をまとめると，表 1 の通りである（概略のみ示し，細部の情報は捨象している）。

表1）サラバ・サヨウナラ（バ）の史的展開

<table>
<tr><th></th><th>サラバ</th><th>サヨウナラ（バ）</th><th>サ・ソ系(列)指示詞</th><th>順接仮定条件</th></tr>
<tr><td>中古</td><td>接続表現</td><td>―</td><td rowspan="3">サ系列指示詞優勢</td><td rowspan="3">未然形バ</td></tr>
<tr><td>中世前期</td><td>指示性不明瞭⤴,場面展開機能⤴</td><td>接続表現</td></tr>
<tr><td>中世後期</td><td>指示性不明瞭⤴,場面展開機能⤴
➡接続詞化</td><td>サヨウ応答表現化,
ナラ(バ)引用句承接</td></tr>
<tr><td>近世前期</td><td>“別れの挨拶語”化</td><td>接続表現</td><td rowspan="4">ソ系指示詞優勢</td><td rowspan="4">仮定形バ・
ナラ（バ）・
タラ（バ）等</td></tr>
<tr><td>近世後期</td><td rowspan="2"></td><td>指示性不明瞭⤴,場面展開機能⤴
➡接続詞化</td></tr>
<tr><td>近代</td><td>“別れの挨拶語”化</td></tr>
</table>

表 1 から，サラバやサヨウナラ（バ）が，サ・ソ系（列）指示詞の歴史や順接仮定条件の歴史に沿わずに変遷する様が見て取れる。特に，サ・ソ系（列）指示詞の歴史に連動していない様相は顕著である。サ系列指示詞が衰退に向かう中世後期以降に，サラバは“別れの挨拶語”化を果たし，サヨウナラ（バ）は接続詞化・“別れの挨拶語”化している。順接仮定条件の歴史においても，サラバは未然形バの歴史的流れに沿わず“別れの挨拶語”化を果たしている。ナラ（バ）を資材とするサヨウナラ（バ）については，語構成上は順接仮定条件の歴史から大きく反れていないように見えるが，接続詞化の過程で順接仮定条件を表さなくなっていくため，やはり順接仮定条件の歴史と連動しなくなる側面があると言える。このことから，サラバ・サヨウナラ（バ）は指示詞や条件表現の側面からのみでは説明ができない，サ系接続表現としての独自の歴史を辿ったと言うことができる。

構成要素にサ・ソ・シカ系（列）指示詞を含む形式が指示性を不明瞭化させる現象や，順接仮定条件を表していた形式が同条件を表さなくなる現象は，サラバやサヨウナラ（バ）に限った話ではない。たとえば，サスガ（ニ）やサゾ（カシ），サテ（ハ），サナガラ，シカシ（ナガラ）等は，もとはサ・シカ系列指示詞を構成要素に含むが，現代語では指示詞が含まれていることを意識することはあまりない。歴史的変遷の過程で指示性が不明瞭化したと考える。また，もともと順接仮定条件を表したソレデハも，近世後期までは意志・命令表現を後続させる例が少ないが，明治期以降東京語で意志・命令表現等を後続表現として広く取るに至ることが報告されている（矢島 2013:177）。さらに，浜田（1991:39）によれば，ソレデハの指示詞脱落形であるデハにも，いわゆる「転換」の機能があるとされる(1)。

(1) a.では，次のニュースです。
b.では，ただ今より会議を始めます。（浜田 1991:39）

ソレデハのこの変遷の仕方は，サラバやサヨウナラ（バ）が場面展開機能を獲得していく過程と軌を一にする。このように，指示詞を含む表現が指示性を不明瞭化させる現象，順接仮定条件を表していた表現が同条件を表さなくなっていく現象は，サラバやサヨウナラ（バ）だけの個別の現象に留まらない。同じ特徴を有した表現群に共通に見られる現象である。そして，同じ特徴を有する表現群の変化には，「順接仮定条件を表すサ系接続表現は“別れの挨拶語”化する」のような，一定の方向性があると考える。

このような表現群，特にサ系接続表現に共通に見られる変化過程を明らかにすることが本研究の最大の目的である。繰り返しになるが，サ系接続表現の多くは，指示詞や条件表現の歴史とは連動せずに，個別に変化する側面がある。しかし，指示詞や条件表現と全く無縁になるわけではない。サ系接続表現の歴史的変化の解明には，指示詞や条件表現といった文法史の特徴を観点とする必要がある。条件表現史と接続詞的用法の関係について論じた矢島（2013:450）は，近世期以降に発達したソレナラやダカラ等について，「それぞれの構成要素の和として表現が組み換え自由に用いられるのではなく，一体的なまとまりをもつものとして，語彙化・文法化を経て一般化するもの」と述べる。さらに，「時代，あるいは地域ごとにおいて，当該の表現それぞれの一体化の度合いに応じて，条件表現史と連動する様相を変え，また，それとは距離をおく一単位として変化の様子を変える」と述べている。一方で，「その基盤は，条件表現全体の中の一部をなすことにあり続け」，「語彙化・文法化した形式であるからこその特徴」と「母体である条件表現全体の中で位置づけていくべき」特徴をあわせもつ表現群であるという。このようにサラバやサヨウナラ（バ）が指示詞や条件表現の歴史と連動しなくなる変化を辿ったとしても，同じような文法的特徴を持つ表現が同じような現象を辿るのであれば，やはりその基盤は指示詞や条件表現にあると言える。

指示詞や条件表現に関わる接続表現の歴史を，指示詞や条件表現の観点から考察することは，改めて指摘するようなことではないとも思われる。これまでも，歴史的文献に現れるサ系接続表現の中から，同じ文法カテゴリーに属するものを取り上げ，分析を行った研究は見られる（順接条件のソレナラ・ソレデハ・ソレダカラ・ソウスルトを取り上げた矢島 2019，逆接仮定条件のサリトモ・サリトテを取り上げた森脇 2002 等）。

しかし，本研究で主張したいのは，サ系接続表現のもとの文法的機能が希薄化する現象についても，指示詞や条件表現といった日本語文法史の観点が必要なのではないか，ということである。本研究で取り上げた“別れの挨拶語”化という現象は従来，日本語文法史の観点からの考察は不十分であった。それは序章でも述べたように，“別れの挨拶語”が語彙史の中で扱われる対象として見られていたからであろう。しかし，“別れの挨拶語”化する接続表現は，サ・ソ・シカ系（列）指示詞を構成要素とし，順接仮定条件を表すもののみであった。また，サラバとサヨウナラ（バ）に指示詞や条件表現の歴史と連動しない側面があると述べたが，巨視的には文法史に連動しているという見方も可能である。たとえば，“別れの挨拶語”サラバが“別れの挨拶語”サヨウナラ等に取って代わられ，現代語において

日常会話で使用されにくくなっている様相は，変化の時期を考慮に入れなければ，未然形バからナラ（バ）へ交代するという条件表現の歴史に沿った結果とも捉えられる。以上から，サ系接続表現の“別れの挨拶語”化は指示詞や条件表現の観点なくしては，説明され得ない現象であると言える。文法史と連動しない側面を持つサ系接続表現の現象も，その基盤に文法史との関連がある限りにおいては，日本語文法史の俎上に載せて論じられるべきであろう。

このように，サ系接続表現がもとの文法的機能と異なる意味・機能を表すようになる変化は，もとの文法体系から大きく逸脱する現象として位置付けられるのではない。母体となる文法体系から見れば，その基盤を共有しつつ独自の変化をも見せる，周辺的な現象として位置付けることができる。したがって，もとの文法的機能と異なる意味・機能を表すようになる変化にこそ，基盤となる文法史的特徴を観点とすることが重要となろう。本研究は，その一事例である。

２．今後の課題

本研究では，サ系接続表現が日本語文法史にどのように位置付けられるかを考察するため，サラバとサヨウナラ（バ）を取り上げた。しかし，サ系接続表現全体の日本語文法史における位置付けを考察するうえで，サラバとサヨウナラ（バ）のみの様相を記述するだけでは当然十分とは言えない。今後は他のサ系接続表現の歴史も記述することで，指示性が不明瞭化する表現の体系や順接仮定条件を表した接続詞の体系がどのような歴史的変化の影響を被るのか考察を深めたい。

特に，ナラ（バ）を構成要素に持つ表現がどのように推移するのかの記述は不十分である。サラバが未然形バと比較してどのように推移するのかは本研究で取り扱ったが，サヨウナラ（バ）がナラ（バ）の変遷と比較してどのように歴史的に推移するのかは，本研究では未だ明らかになっていない。それだけでなく，ソレナラ（バ）やソウナラ（バ）等，ナラ（バ）を構成要素とする接続表現とサヨウナラ（バ）がどのように使い分けられ，変化していったのかについては検討の余地がある。

同時期に存在するサ系接続表現の使い分けには，位相差が大きく関わると考える。たとえば，サヨウナラは，丁寧な言い方（日本国語大辞典），上位者に対する敬意の高い表現（諸星 1999:61），江戸の旗本社会で定着（諸星 1999:64），遊客や遊女による使用は稀（諸星 1999:65），茶屋の女房・若君や幇間・芸者等が遊客や遊女に対して用いる（同），社会

的身分の上位者や改まった場での使用が目立つ（倉持 2013a:49，2013b:265），出入りの業者・芸者や遊離関係者・裕福な商家のお袋といった丁寧なことば遣いが求められる人々が使用（田島 2018b:15），「そんなら」よりも丁寧（田島 2018b:16）等と説明されている。ソレナラについては，「すんなら」はぞんざいな言い方（日本国語大辞典），「そんなら」は中間的で湯客・遊女・茶屋や遊里関係者に広く使用されている（諸星 1999:65）等と説明される。このように，サ系接続表現は使用位相が形式ごとに異なる。この点が，それぞれのサ系接続表現の成立・展開にどのように関わるのか明らかにする必要がある。

また，第 6 章では，サヨウが応答表現化していく現象を扱った。サ系列指示詞を構成要素とする表現が次第に応答表現的に使用されるようになる現象は，他にも見られる。たとえば，サレバは中世末期頃に応答表現として多用されるようになるとされている（岡﨑 2015:102）(2)(3)。

(2) （夫）<u>されば／＼</u>，重々そなたが道理じや（狂言，虎明本狂言，1642 年写，岡﨑 2015:102）

(3) さてかの倅は無事で里にゐることか。何としたぞと言ひければ。<u>されば</u>，その子を里にやりしと申せしは偽り。（浄瑠璃，近松門左衛門集，岡﨑 2015:101）

これらは指示詞の機能としては，「基準指示用法」（堤・岡﨑 2022）ということになろう。よって，指示詞の体系から大きく逸脱したとは言えない。しかし，応答表現のサレバはサ系列指示詞が衰退するのに反して，中世末期頃以降多用される等，指示詞の歴史に沿わない部分があることもまた事実である。また，なぜ順接確定条件の形式であるサレバが応答表現化するのか，という条件表現と関わる点からも問が立てられる。サ系列指示詞を構成要素とする表現の応答表現化も，サ系接続表現と日本語文法史との関係を考察するうえで有効であろう。

以上，本研究で明らかとなった部分を手がかりに，今後の研究を進めていきたい。まだまだ多くの課題が残ることを自覚しつつ，ここで稿を閉じる。

【参考文献】

青木博史（2022）「文相当句の名詞化」青木博史・岡﨑友子・小木曽智信 編『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房 pp.89-108.

浅見和彦 校注・訳（1997）『新編日本古典文学全集 51 十訓抄』小学館.

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳（1995）『新編日本古典文学全集 21 源氏物語（2）』小学館.

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳（1998）『新編日本古典文学全集 25 源氏物語（6）』小学館.

有田節子（2007）『日本語条件文と時制節性』くろしお出版.

池上禎造（1947）「中古文と接続詞」『国語国文』15-20 京都大学文学部国語国文学研究室 pp.1-9.

磯貝淳一（2016）「接続詞・感動詞の諸問題」中山緑朗・飯田晴巳監修，沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一 編『品詞別学校文法講座 4 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院 pp.193-218.

江口正弘（2010）『天草版平家物語 影印編』新典社.

榎本滋民（1982）「「おさらば」のうた 大衆芸能における別れ」『言語生活』363 筑摩書房 pp.26-35.

大木正義（1981）「「さり」「さなり」をめぐって：中古の和文を中心に」『国文学 言語と文芸』91 大塚国語国文学会 pp.115-136.

大西拓一郎 編（2016）『新日本言語地図：分布で見渡す方言の世界』朝倉書店.

岡﨑友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房.

岡﨑友子（2011）「指示詞系接続語の歴史的変化：中古の「カクテ・サテ」を中心に」青木博史 編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版 pp.67-87.

岡﨑友子（2015）「「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について」『文学論藻 東洋大学文学部紀要 日本文学文化篇』89 東洋大学文学部日本文学文化学科 pp.118-98（pp.(1)-(21)）.

岡﨑友子（2019）「指示詞からみる文法史：内省の効かない古代語を研究対象とする」宮地裕・甲斐睦朗監修『日本語学』38-4 明治書院 pp.12-21.

岡﨑友子（2020）「接続詞」青木博史・高山善行 編『日本語文法史キーワード事典』ひつじ書房 pp.75-76.

小田勝（2015）『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院.

小野寺典子（2014）「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」金水敏・高田博行・椎名美智 編『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房 pp.3-27.

川村祐斗（2018）「サラバの別れの挨拶語化に関する記述的研究」『名古屋大学国語国文学』111 名古屋大学国語国文学会 pp.70-56（pp.(33)-(47)）.

川村祐斗（2020a）「接続表現サラバの“別れの挨拶語”化：「指示性の不明瞭化」と「場面展開機能の発達」」『名古屋大学人文学フォーラム』3 名古屋大学人文学研究科図書・論集委員会 pp.129-144.

川村祐斗（2020b）「中古語におけるサラバ：「未然形＋バ」条件節と比較して」『日本語学会 2020 年度秋季大会予稿集』日本語学会 pp.65-72.

川村祐斗（2021）「接続表現サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化」『Nagoya Linguistics』15 名古屋言語研究会 pp.1-14.

川村祐斗（2022）「接続表現サヨウナラ（バ）の機能変化」『Nagoya Linguistics』16 名古屋言語研究会 pp.1-14.

川村祐斗（2023）「サヨウナラ（バ）の史的展開：構成要素に着目して」名古屋言語研究会第 197 回例会発表資料，2023 年 9 月 30 日，名古屋大学.

川村祐斗（近刊）「サラバの史的展開：サレバ・未然形バとの対照」日本語学会 編『日本語の研究』20-1 武蔵野書院.

京極興一・松井栄一（1997）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹 編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』（第 4 版）明治書院 pp.89-136.（初版 1973）

清瀬良一（1955）「天草本平家物語の接続表現：「さらば」などの場合について」『広島大学文学部紀要』8 広島大学 pp.188-212.

倉持益子（2013a）「別れの言葉に見る日本語あいさつの特徴」『言語と交流』16 言語と交流研究会（発行），凡人社（発売）pp.44-55.

倉持益子（2013b）「あいさつ言葉の変化」『明海日本語』18（増刊号）明海大学日本語学会 pp.259-284.

碁石雅利（2022）「慣用連語「さればこそ」の成立と係り結び」『文学研究』33，聖徳大学短期大学部国語国文学会 pp.51-68.

小久保崇明（1978）「「かやうなり」の活用について」『解釈』24-4 解釈学会 pp.47-49.

小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.

佐伯梅友（1956）「「にあり」から「である」へ」国語学会 編『国語学』26 武蔵野書院 pp.1-6.

坂詰力治（2015）「接続詞「さらば」の意味・用法に関する考察：『平家物語』を中心とした中世の軍記物語をとおして」中山緑朗 編『日本語史の研究と資料』明治書院 pp.101-115.

信太知子（1970）「断定の助動詞の活用語承接について：連体形準体法の消滅を背景として」国語学会 編『国語学』82 武蔵野書院 pp.29-41.

鈴木一彦（1997）「感動詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹 編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』（第 4 版）明治書院 pp.177-208.（初版 1973）

鈴木博（1974）『妙法寺蔵永禄二年 いろは字 影印・解説・索引』清文堂出版.

鈴木芳明（2000）「指示副詞サとサ系連語：指示性と一語化を中心に」『日本語研究』20 東京都立大学 pp.50-63.

高橋尚子（1985）「中古語接続詞の機能と変遷：物語文学作品を資料にして」『愛文』21 愛媛大学文理学部国語国文研究会 pp.8-17.

竹内史郎・岡﨑友子（2018）「日本語接続詞の捉え方：ソレデ，ソシテ，ソレガ，ソレヲ，ソコデについて」『国立国語研究所論集』14 国立国語研究所 pp.241-254.

竹内史郎・萩原咲（2019）「「さらば」の日本語史」NINJAL 共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班（語彙・意味グループ，中古中世グループ，文体資料性グループ）合同研究発表会発表資料，2019 年 9 月 9 日，東洋大学.

高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房.

田島優（2018a）「人情本を利用した挨拶表現研究（序説）」近代語学会 編『近代語研究』20 武蔵野書院 pp.341-363.

田島優（2018b）「さようなら考：その成立と別れの挨拶表現のシステム変化」『東海学園 言語・文学・文化』17 東海学園大学日本文化学会 pp.9-19.

田中章夫（1984）「接続詞の諸問題：その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹 編『研究資料日本文法 4 修飾句 独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院 pp.81-123.

田村早苗（2005）「日本語接続詞の構成性／非構成性：ソシテ・ソレデ・ダカラについて」『京都大学言語学研究』24 京都大学大学院文学研究科言語学研究室 pp.85-115.

堤良一・岡﨑友子（2022）「心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について」『言語研究』161 日本言語学会 pp.91-117.

徳永辰通（2007）「「さればこそ」の二種の用法：主体の感動を表出する用法の成立」安達隆一先生古希記念論文集刊行委員会 編『ことばの論文集 安達隆一先生古希記念論文集』おうふう pp.220-232.

永積安明・島田勇雄 校注（1961）『日本古典文学大系 31 保元物語・平治物語』岩波書店.

中野伸彦（2016）「江戸語の終助詞：「さようなら」と終助詞」宮地裕・甲斐睦朗 監修『日本語学』35-11 明治書院 pp.36-45.

永山勇（1970）「接続詞の誕生と発達」『月刊文法』（10 月号）2-12 明治書院 pp.19-27.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 編（2000-2002）『日本国語大辞典』（第 2 版）小学館.（初版 1972-1976，日本大辞典刊行会 編）

蜂谷清人（1983）「さようなら（然様なら・左様なら）」『講座日本語の語彙 10 語誌II』明治書院 pp.142-148.

蜂谷清人 執筆（2007）「咄本」飛田良文（主幹）・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編『日本語学研究事典』明治書院 p.950.

濱田啓介（2013）「日本文学における別れ時の言い方：さらば考」『解釈』59 解釈学会 pp.50-63.

浜田麻里（1991）「「デハ」の機能：推論と接続語」『阪大日本語研究』3 大阪大学文学部日本学科言語系 pp.25-44.

濱屋方子（2016）『日本語における「挨拶」の諸相』到良出版社.

半藤英明（1992）「古典に於ける慣用句的「こそ」の働き」『國學院雑誌』93-11 國學院大學 pp.22-29.

飛田良文・李漢燮 編（2000-2001）『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』港の人.

前田富祺（1985）「あいさつ言葉の歴史」宮地裕・甲斐睦朗 監修『日本語学』4-8 明治書院 pp.79-89.

前田直子（2009）『日本語の複文』くろしお出版.

松井簡治・上田萬年（1940）『修訂 大日本國語辭典 第二巻』（修訂 6 版）冨山房.（初版 1916）

馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一 校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集 35 今昔物語集①』小学館.

三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二 校注・訳（2000）『新編日本古典文学全集 17 落窪物語 堤中納言物語』小学館.

水谷修（1982）「「別れのことば」総論 別れの言語行動」『言語生活』363 筑摩書房 pp.18-24.

宮内佐夜香（2014）「「ガ」・「ケレド」類を構成要素とする接続詞の発達について：近世後期江戸語・明治期東京語における推移」小林賢次・小林千草 編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版 pp.620-603.

武藤禎夫 編（1979）『噺本大系』9 東京堂出版.

森田良行（1997）「感動詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹 編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』（第 4 版）明治書院 pp.177-208.（初版 1973）

森脇茂秀（2002）「逆接仮定表現の一形式：「さりとて」「さりとも」を中心に」『京都語文』9 仏教大学国語国文学会 pp.50-72.

諸星美智直（1999）「近世武家・町人のあいさつことば」『国文学 解釈と教材の研究』44-6 学燈社 pp. 61-65.

矢島正浩（2013）『上方大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.

矢島正浩（2016）「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」大木一夫・多門靖容 編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房 pp.187-213.

矢島正浩（2018）「逆接確定辞を含む［接続詞］の歴史」藤田保幸 編『形式語研究の現在』和泉書院 pp.57-74.

矢島正浩（2019）「近代落語資料における順接条件系の接続詞的用法について」金澤裕之・矢島正浩 編

『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院 pp. 291- 315.

山口秋穂 執筆（2001）「である」山口秋穂・秋本守英 編『日本語文法大辞典』明治書院 p.502.

山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院.

山口堯二（1984）「感動詞・間投詞・応答詞」鈴木一彦・林巨樹 編『研究資料日本文法 4 修飾句独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院 pp.125-157.

山口堯二（1996）『日本語接続法史論』和泉書院.

山口堯二（2001）「「やうなり＞やうだ」の通時的変化」『京都語文』8 仏教大学国語国文学会 pp.102-119.

山村祐樹（2013）「形式名詞「よう（だ）」の歴史的変遷 : 統語構造の観点から」『京都教育大学国文学会誌』39 京都教育大学国文学会 pp.52-66.

楊瓊（2016）「接続詞「しからば」と「さらば」について：文体による用法差を中心に」『同志社日本語研究』20 同志社大学大学院日本語研究会 pp.67-79.

湯澤幸吉郎（1955）『室町時代言語の研究』再版.（初版 1929）（湯澤幸吉郎 1981『室町時代言語の研究』風間書房.による）

湯澤幸吉郎（1957）『増訂江戸言葉の研究』明治書院.（初版 1954）

吉田永弘（2012）「平家物語と日本語史」『愛知県立大学説林』60 愛知県立大学国文学会 pp.53-68.

吉田永弘（2019）『転換する日本語文法』和泉書院.

Noriko, Akatsuka（1985）*Conditionals and the Epistemic Scale*，Linguistic Society of America 61-3.

「青空文庫 Aozora Bunko」（https:// www.aozora.gr.jp/）2023 年 11 月 22 日最終閲覧

国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」（http://base1.nijl.ac.jp/infolib/）2020 年 1 月 8 日最終閲覧

国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」（http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/）2020 年 1 月 8 日最終閲覧

国立国語研究所「コーパス検索アプリケーション『中納言』」（https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search）2023 年 11 月 22 日最終閲覧

国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」（https:// dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/887445/）2023 年 11 月 22 日最終閲覧

ネットアドバンス「Japan Knowledge Lib」（https://japanknowledge.com/）2023 年 11 月 26 日最終閲覧

付記

本研究の一部は科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号 22KJ1549）の助成を受けたものである。